

ノ後送二便スルヲ得タリ

此日參謀總長、軍令部總長ヨリ祝電ヲ拝受ス 一同三鞭酒ヲ挙ケテ陛下并兩殿下ノ万歳ヲ三唱ス

十月二十八日迄ニ於ケル軍死傷者概數

(將校)

(准士官以下)

計

死

傷

死

傷

第三師団

八五

一九七二

六六二五

八六八二

第十一師団

五〇

一五一

一九三一

五二一八

第一百師団

四〇

一五八

四六八

三六〇四

第九師団

九五

一四四

一三二七

六三二三

第十三師団

一三

三七

二三八

一七七一

重藤支隊

一二

二二

三〇七

八九九

計

六、五二八

二四、九四一

三一、四六九

即大場陥落迄ノ死傷總數三万一千余名ニテ内配屬セル軍直屬部隊ノモノヲ含ム 尚現在迄病者ノ總計ハ約三千名ニテ内死亡五二ナリ右ハ主トシテ虎列拉ナリ

尚傷病者ノ既還送者ハ約五千名ニ達シ原隊復歸者ハ約六千名ノ見込ナレハ 大体本月初旬ニ到着スヘキ補充員ヲ以テ概ネ定員ノ不足ヲ補ヒ得ヘキ見込ナリ

尚軍馬ノ損傷大要如左

傷死

二七二七

現在病馬數 一七三二

病馬死

四二二

計 三二四九

内補充馬ノ既着ノモノ約五〇〇 現在欠馬數約四三〇〇頭ナリ 之レハ当分補充ノ見込ナク戦列隊ハ輜重ヨリ補充ノ外ナシ

◇十月二十八日

各方面ヨリ祝電來ル 東京ニ於テモ此夜ハ提灯行列^{トウチン} 祝慶氣分旺盛ナリシ由ナルモ 予等一同トシテ(ハ)僅ニ上海西方地区ヲ一掃セシ迄ニテ 西方正面ニテハ近ク頑強ナル敵陣ヲ日夜力攻シツツ 又南方ニ對シテハ此戰機ヲ逸セス蘇州河ヲ渡リテ敵ヲ更ニ南方ニ圧迫シテ南市ノ解放ヲ策セサル可カラス マダマダ心中慶祝氣分タルヲ得ス 各師団ノ戰況

一、重藤、永津部隊方面變化ナシ

二、第十三師団ハ依然攻撃ヲ力行シ新陸家橋及西部老陸宅ヲ完全ニ占領セルモ 新陸宅及首家橋宅ノ敵陣ヲ奪取シ得サルノミナラス 広福ハ尚敵兵陣地ヲ増強シツツ兵力亦増加セル如シ 三、第十一師団ハ漸次敵ヲ攻撃シテ中央隊ヲ以テ艾婁濠、朱羅家宅ノ線ニ 左翼隊ヲ以テ稍離レテ郭家宅、范家宅、斗門橋ノ線ニ進出セリ

四、第九、第三師団ハ大要蘇州河岸ニ近ク進出シテ渡河ヲ準備ス 五、第一百師団ハ依然敵兵掃蕩中

依テ軍ハ軍砲兵ヲ新ニ大場鎮西南方約四^{キロ}ノ線ニ進出セシメ 今第十一、九、三師団ノ作戰地境ヲ新区画シ 尔後ノ西方及南方ニ對スル攻撃ヲ準備セシム

此クテ軍今後ノ攻撃ハ西、南兩方面ニ對シ如何ニ実行スヘキヤ 第十軍(ト)ノ關係モアリ慎重ニ考慮セサルヘカラス 而カモ敵ノ退却方向及兵力并蘇州河南方ノ敵陣地ノ情勢等未詳ナルヲ以テ、是等ノ情勢ヲ見極メタル上尔後ノ方針ヲ決定スルコトトス

此日劉家行、顧家宅附近ノ軍野戰予備病院及第三、第十一師団ノ野戰病院ヲ視察シ傷病兵ヲ慰問ス 思(フ)ニ傷病者ノ收容及後送ハ相当順序能ク実行セラレアル如キモ 何分家屋ナク病院モ逐次交代中ニテ 傷者ノ手当等固トヨリ充分ナラス深ク同情ニ禁セサルモノ多シ 仍テ当事者ヲ督励シテ看護及後送ノ万全ヲ期ス

『上村利道參謀副長日記』
十月二十八日 晴

氣溫昇騰暑サヲ覺ユ、幸ニ天氣好シ
第十一師団西面シテ南翔ニ向ヒ作戰ス 軍主力ノ右側ノ掩護ナリ和知聯隊勇敢ニ攻進シ手薄ニ付キ戰車ト後備ニ大隊を配屬ス

尚序ヲ以テ羅店―大場道上唐橋ニ至リ 新二軍兵站ヲ以テスル溫藻浜糧秣輸送集積ノ狀況ヲ視察ス 同浜ハ低水時ニ於テ水幅十米深一二米アリテ四時ノ航運ニ適シ 現下毎日量少クモ二百噸ヲ唐橋附近ニ集積シ得ル情態ニテ 之レニテ今後雨天トナルトモ補給上毫モ心配スヘキ事ナシト安心ス

方面軍幕僚タルヘキ塚田少將以下数名來着ス 仍テ大体予ノ意見ヲ伝ヘル後ノ方面軍作戰ニ関スル研究ヲ命ス

◇十月二十九日

各兵團ハ夫々前任務ヲ続行中ナルモ 第十二師團中央隊ノ張仙廟ノ一角及壬塘橋ヲ占領シタル外大ナル變化ナシ

敵ハ南翔附近ニ漸次陣地ヲ増強シツツアリ 大場、江橋附近ヨリ退却セル敵ノ大部ハ南翔以西ノ地区ニ向ヒタルモノノ如ク 蘇州河南方地区ニ退却セルモノハ其一部ナルカ如シ 尚此方面ニ退却セル敵ハ兵器彈藥ノ大部ヲ失ヒタルカ如ク 此補充ニ相當ノ日子ヲ要スルモノト察セラレ 又敵砲兵ハ目下漸次蘇州河南方地区ニ現レツツアリ

仍テ軍ハ南翔方面ノ攻撃ハ一時之ヲ見合セ 速ニ蘇州河ヲ渡リテ其南岸ニ地歩ヲ占メ 為シ得レハ茲ニ南市ヲ封鎖スル目的ヲ以テ第九、第三師團ノ渡河準備ヲ急カシメ 一方予テ計畫連絡セル支那軍ノ利用ト相俟テ 第三師團ヲシテ先ツ攻撃ヲ實行セシメ續テ第九師團ヲシテ攻撃ヲ實行セシムヘク 遅クモ十一月三日迄ニ之レヲ實行ヲ命ス

尚之レカ為メ軍砲兵ノ全部ヲ之ニ協力セシムヘク 夫々陣地ニ進入セシムルコトトセリ

此日ジェスフヒールド公園ニ於テ英國兵三名我砲彈ノ為メ死傷セル旨 英國側ヨリ抗議シ來レルニヨリ現情ヲ調査セシメタル処 第三師團歩兵砲及山砲ノ砲彈ヲシテ 募巷街附近ノ歩兵ノ中山橋附近ニ對スル砲擊ヲ躲避ニ依ルモノト判斷セラルルニ依リ 原田少將ヲシテ英國側ト交渉セシメ 英軍ハ最初中山橋附近撤退ノ我要求ヲ甘受セス自主的ニ其撤退ヲ行ヒシ結果 我

砲彈ノ危險区域ニ（公算躲避区域）現在セル結果斯ル不幸ヲ見タルヲ遺憾トシ 今後相互能力連絡シテ危險区域ニ止ラサル様取計フヘキ旨相互ノ諒解ヲ得タリ

尚此日仏租界霞飛路ニモ我砲彈落下セリト報アリシモ コハ所以ナキ事ニテ何カノ間違カ或ハ支那軍ノ惡戯又ハ謀略ニ依ルモノナルヘク 其旨ヲ仏側ニ伝ヘシメタリ

思フニ將來上海占領ニ関シテハ尚此種ノ問題頻發スルノ虞アリ 外國側力吾要求ヲ甘受シテ租界境界附近又ハ其以外ノ地区ニ止ルニ於テハ 此種ノ事件ヲ惹起スルコト免レ能ハサル所ナレハ 軍トシテハ各師團ニ命シ外國警備区域ノ攻撃ヲ禁シ 万事速ニ予防スルコトニ務ムルモ支那軍力尚其警備区域又ハ外國軍ノ現在スル附近ニ遮蔽スルヲ洩ル場合ニハ 已ムナク之ヲ攻撃セサル可ラサルコトオモ列國側ニ通セシメタリ

◇十月三十日

情勢變化ナシ

此日予ハ吳淞鎮、宝山鎮ノ軍予備病院及兵站病馬廠ヲ視察シ傷病者ヲ慰問セリ

予備病院ノ情況ハ現有患者二千余名ニシテ 設備固トヨリ不完全ナルモ治療其他ノ手續相當ニ行ハレツツアリ 宝山鎮ノ避病院ハ在院者六百余名ニシテ最早危險狀態ノモノハナク 各種虎列拉、赤痢等漸次減滅シ昨今毎日二三名ノ入院患者アルノミト云フ

兵站病馬廠モ現在馬一七〇〇余頭ニテ傷病相混シ 最モ多キハ鞍傷馬ニシテ其保護治療ハ相當ニ実施セラレアリト認メ安心ス

此クテ先日來ノ視察ノ結果ニ依レハ 人馬傷病者ノ收容、保護ハ固トヨリ完全ナラス 殊ニ其設備ノ不備ナルハ利用スヘキ家屋少ク 且ツ汚穢セルコトニテ万已ムヲ得サルコトト諦ムル外ナシ 目下天幕ノ補給ヲ要求シアレハ將來其到着後ハ寧口之ヲ利用スルコト可ナリト考ヘラル

尚宝山城ニ收容セル避難民ノ狀態ヲ視察ス 現在者計千余名ナルモ多クハ老幼女子ノ類ナリ

『上村利道參謀副長日記』
十月二十九日 空荒模様

第一戰ノ狀況變化ナシ 南翔ヲ攻撃スヘシ、浦東ヲ先ニスヘシ等各種ノ說アリシカ結局南方ノ封鎖ニ全力ヲ注クヘシトノ意見ニ歸ス 次ノ軍司令部ノ位置モ大場鎮或ハ江灣鎮等種々ノ說アリ 本午後江灣方面ヲ視察セシカ復旦、労働兩大学共完全ニ破壊、利用シ得ルハ音楽學校ノミ 結局大場鎮ニ轉移スルコトニ決ス

天氣漸次荒模様ナリ 快晴ナラシコトヲ祈ル 大場鎮守備当面ノ敵ノ師團長敗戦ノ責ヲ負ヒテ自認セシ由敵ナカラ其責任觀念ノ旺盛ナルハ感心ナリ 本夜遂ニ降雨但微雨ニシテ支障ナシ

公算躲避区域ハ正確率上、正確に照準しても、なお砲彈が目標を外れて落ちるかも知れぬ危険区域。

十月三十日 北支から第十六師團を転用、上海派遣軍に編入。
駐華独大使トラウトマン、中国政府外交部次長と会谈。

一般二報道部員ノ指導ニテ日本軍ノ恩恵ヲ感謝シツツアルハ欣フヘク 先日來近郊ノ稻刈其他ノ農作物ノ收穫ニ当ラシメ 既收穫二百四十石其他綿、豆等相当ノ額ニ上リオリ難民ハ大体満足ノ状態ナリ 將來更ニ之ヲ救護シテ皇軍ノ皇澤ニ浴セシムルハ 今後江南地方撫民ノ魁トシテ特ニ注意スヘキコトナリト認メラルモ 其指導方法ニ就テハ尚十分監督指導ノ必要アリト認メラル

予ハ一般難民ニ対シ銀千弗ヲ贈リタルニ一同非常ニ感謝シオレリ

此日方面軍要員ヨリ方面軍司令官ニ対スル參謀總長ノ指示ニ就キ説明ヲ聞ク 内容満足シ難キ点不尠 殊ニ方面軍司令部ノ編成ヲ小規模ニシタル為メ 方面軍ノ指揮ノ範圍及管掌事項ヲ制限セルハ面白カラス 方面軍統率上全權ヲ軍司令官ニ与フルヲ寧ロ正當ナリトスヘク 今後兩軍ノ作戰指導上後退又ハ故障ノ發生スルコトナキヤ憂慮スヘキモノアリ 依テ之ニ関シ予メ參謀本部ニ対シ予ノ意見ヲ通報スルト共ニ 尚占領地ノ民政、國際關係処理等ニ関シ軍司令官ノ權限ヲ明瞭ニシ 所要ノ人員ヲ附スルコトニ付研究ノ上夫々意見ヲ中央ニ具申スヘキ旨命ス

◇十月三十一日

天候下り坂「時」トシテ小雨アリ

此日第三師團ハ蘇州河渡河ヲ敢行セシカ 右翼方面ニ於テ周家橋西方金家頭對岸ニ於テ一部隊ヲ渡河セシメタルノミニテ 周家橋附近ヨリ側射ノ為メ渡河ヲ繼續スルヲ得ス 左翼隊方面ハ全然失敗セリ 蓋シ輕渡河材料ニヨリ架橋ノ法ニヨリタルモノニテ 潮流ト河幅ノ大(五十米)ナル為メ渡河意ノ如クナラサリシナリ 要スルニ師團ノ渡河ハ一面戰場謀略ニ依ル敵軍一部ノ内應の効果ニ望ミ撃キタル点モアレト 大体渡河準備、時前敵陣ノ破壊等充分ナラサリシニ起因スルモノト認メラル

第九師團ハ此日渡河準備未成 十分慎重ニ明日ヲ以テ渡河ヲ強行スル予定ナリ 其他ノ方面変化ナシ

『飯沼守日記』

十月三十日

昨夜少シ雨降り本日ハ曇リ、寒クナル之ヲ順調?
夕刻公平中佐方面軍編成ニ関スル案ヲ持參、軍司令官ニ説明、軍司令官ハ方面軍司令官ノ權限甚タ局限サレアルハ絶対ニ同意スル能ハサル旨ヲ強調シ再研究ヲ命セラ

十月三十一日 上海派遣軍、蘇州河を渡河、南岸の中國軍陣地に對する攻撃を開始。

軍ハ尔後白茆江方面ニ於ケル上陸作戰ヲ準備スル為メ 西方正面ニ於ケル第十三、第十一師團ノ攻撃ヲ一時中止シ 守勢ヲ取ルニ決シ左ノ要旨ノ命令ヲ与フ

一、第十三師團(白砲一大隊ヲ附ス) ヲシテ現陣地以北ノ地区ヲ重藤支隊及永津部隊ニ代リ確保ス

二、重藤支隊及永津部隊 (22(-1) I 11/13 FL 1/13 P) ヲ月浦鎮—宝山城間ニ集結シ上陸戰準備訓練ヲ行フ

三、第十一師團(永津部隊欠) ニ后備歩兵二大隊ヲ附シ陳家行以南ノ現線ヲ確保セシム

昨日來蘇州河畔ノ戰鬪ニ於テ我歩砲ノ射撃及飛行機ノ空中爆撃、射撃等カ 多少英國軍ノ守備区域ヲ犯セル事實アリテ英國側ノ抗議の通告アリ 原田少將ヲシテ之ト接洽セシム 蓋シ英軍力支那軍ノ守備地域ニ接シテ警備シアル為メ 敵軍ニ対スル我空地ノ射撃力当然ノ躲避ヲ以テ 英軍ニ損害ヲ与フルハ已ムヲ得サル処ナリ

軍ハ固トヨリ各師團諸部隊ニ命シテ 英軍及列國軍ノ守備区域ニ損害ヲ与ヘサル様命令シアレト 此躲避の損害ハ已ムヲ得サル次第ニテ 列國軍力支那軍ヲ更ニ西方ニ退避セシムルカ自カ危險区域外ニ引退スルノ外 今後ト雖此ル危惧ヲ免ルル能ハサルハ当然ナレハ 此意ヲ以テ列國側ニ對シ警告ヲ与フル積ナリ 然レトモ英仏軍力初メヨリ支那軍ニ同情支援的態度ヲ取り兎角ニ我軍ノ作戰ニ不利ナル言動アルハ今日ニ始マレルニ非ス 仍テ我方トシテハ相当強硬ニ且ツ合法的ニ今後ノ措置ヲ講スルノ要アリ 此意ヲ參謀本部ニモ報告セシム

◇十一月一日(晴)

周宅二軍司令部移転(欄外)

昨夜來雨ナリシモ今朝以來漸次霽ル 午後一時楊家宅司令所出發新二大場鎮南方約二キロノ周宅ニ移ル

各師團ノ戰況

『上村利道參謀副長日記』

十一月一日 曇 頓ニ寒サ加ハル

軍司令部ヲ大場鎮南方約二軒周宅ニ移ス

本日ヨリ全テ冬服ヲ着用セルカ夫レニテモ尚才幾分寒サヲ覺ユ 氣温ノ激変ナリ 新軍司令部ハ産婆学校ノ付属建物ナリ 新亜細亞ヲ産ム為ノ軍司令部トシテハ縁起好シ

十一月一日 參謀本部の編制を一部改正、事變勃發以來、常に意見が対立していた戦争指導課と作戰課を一課に統合した。

一、第九師團ハ朝來渡河ヲ決行シ 其右翼方面ニ於テ遠ク上流屈曲点附近ニ於テ漕渡ニヨリ成功シ 姚家宅、張家宅附近ニ向ヒ步兵約三大隊ヲ以テ地歩ヲ獲得スルヲ得タルモ 左翼隊方面ニ於テハ渡船潮流ニ妨ケラレ敵火ノ損害ト相俟テ遂ニ中途ニ挫折ス

二、第三師團ハ右翼隊方面ニ於テ步兵三大隊ヲ注入シ 漸次戦果ヲ拡大シツツアルモ 左翼方面ノ渡河ハ遂ニ断念ノ已ムナキ状態ニ在リ

三、此日飛行機ノ報告ニ依リ 蘇州河対岸ノ敵軍退却ノ報アリ 或ハ敵ハ遂ニ上海放棄ニ決シタルニ非スヤトモ考ヘラルルニ依リ 第一師團ヲシテ蘇州河突破及其後ニ於ケル南市封鎖ヲ準備セシムルト共ニ新二架橋材料一中隊ヲ配属ス

四、右翼方面 第十三、第十一師團変化ナシ

此日 方面軍幕僚ヲ会シ 派遣軍幕僚ト共ニ方面軍今後ノ作戰指導方針ニ付研究ス 大要既往研究ノ範圍ヲ出デサルモ 第十軍ノ作戰方針ハ今後ノ情勢ニ於テ多少共變更セシムルノ必要アルモ 情勢未明ナレハ確定セス 暫ク第十軍司令官ノ注意ヲ喚起セシムル程度ニ止ムルコトトシ 尚全般的研究「究」方針ノ決定モ今後ノ情勢ニ応シ定ムルコトトス

新司令部ハ上海市政府公立ノ助産教育学校及児童健康院ニテ 曩ノ吳淞水産学校ト共ニ常ニ「産」ニ縁アルハ瑞徴ト云フ可シ(欄外)

◇十一月二日(小雨)

蘇州河南岸ノ敵ハ 昨日退却ノ報アリシモ依然現地ヲ固守シアルノミナラス 漸次其砲兵ヲ南翔方面ヨリ転置シ其数約十八中隊トナリ 尚南市、浦東方面ヨリモ一部ノ増加ヲ得タルヤノ報モアリ 又謀報ニ依レハ蒋介石ハ此方面軍司令官ニ命令シ 今後約二週ノ間上海南方ヲ固守スヘキ様計ヒタルトノコトニテ 自然第三、第九師團ノ攻撃ハ容易ニ進展セス

第九師團ハ昨日来ノ右翼方面ニ架橋ヲ完成シテ 約六大隊ヲ以テ逐次対岸地辺ニ戦果ヲ拡張シツツアリ 尔後師團ノ全力ヲ此方面ヨリ渡河シテ東南ニ向ヒ攻撃スルノ企圖ヲ有シアリ

第三師團モ其右翼隊方面ノ四大隊ヲ漕渡ニテ渡河セシメ 是亦漸次師團ノ主力ヲ右翼方面ニ轉移渡河スルノ考案ヲ有シアルモ其發展未タ意ノ如クナラス

斯クテ第一師團ノ突破ト南市封鎖ノ作戰ハ未タ実行ノ運ニ至ラス

第十三師團ハ所命ノ如ク重藤支隊トノ交代ヲ行ヒツツ明夜中ニ之ヲ完了スル予定

第十一師團方面変化ナシ

昨日来原田少将ヲシテ英米仏伊等諸國ノ陸海軍司令官トノ交渉ハ概ネ前記ノ我方針ヲ説明シテ大体ノ諒解ヲ遂ケタルラシク 感情の二モ大ナル相互ノ反感ヲ惹起スルコトナシ

尚今後上海西南方地域ニ於ケル外人財産ノ保護ニ就キ 各師團ニ命シテ充分ノ注意ヲ加ヘシムルコトトシ 又英國側ニ連絡將校ヲ常ニ派遣シテ相互連絡ニ当ラシムルコトトセリ

◇十一月三日(曇)

此日明治節日ニ当ル 予ハ此日迄ニ最初ハ嘉定、南翔ヲ 後ニハ上海全市丈テモ占領シテ好節ヲ慶祝センコトヲ期シタリシカ 事志ト違ヒ曩ニ辛フシテ上海西方ノ敵ヲ掃蕩シ得テ 今漸ク蘇州河南岸ニ小地区ヲ獲得スルノミニテ南市モ浦東地区モ尚敵軍ノ手ニ委シツツ此日ヲ迎フルノ已ムナキニ至レルハ真ニ慚愧ノ至 今後益部下ヲ督励鞭撻シテ速ニ上海周辺ノ敵ヲ掃蕩シテ皇軍ノ武威ヲ顯揚スヘキ 陛下ノ御委嘱ニ酬ヘ奉ラサルヘカラス

此日各師團ハ依然攻撃ヲ続行セシモ戦況変化ナシ 蓋シ明治ノ節日ニ際会シ各將兵亦予ト同一ノ感ヲ抱キツツモ 此日僅ニ慶祝ノ氣ニ陥レルモ已ムナシ

此日午前十時司令部職員一同ヲ中庭ヘ集合セシメ 自ラ先頭ニ立チテ東天ヲ望ミ遙拜ヲ行ヒ又東京ニ部下一同ニ代リ祝電奏上方ヲ電報 又終テ食堂ニ会シテ將校一同ト共ニ 天皇皇后両陛下ノ万歳ヲ三唱シ 奉祝ノ拙詩ヲ謹書シテ部下一同ニ示ス 即

明治節奉祝謹詠

百萬匪軍方殄滅 陣中奉祝明治節

『飯沼守日記』

十一月一日

3Dハ左右共昨日ノ通りニテ未タ一兵モ渡河シアラス左翼隊ノ渡河シタル者ハ二三〇名許リナルモ現在残レル者ハ三〇〇名位ニテ翼隊長片山少将ハ之ヲ後退サセル決心ヲ為シ參謀長ハ之ヲ不可トシ旅團長ノ許ニ到リタルモ決着セス、遂ニ師團長ノ決裁ヲ受クルコトニナリシ旨參謀長迄耳ニ入レラレタシト、薄弱ナル意志ニテハ困難ナル作戰ハ出来ス

十一月二日 広田外相、ディルクセン Dirksen, Herbert Von 駐日独大使に對中国和平条件を示す(十一月五日、トラウトマン大使より蒋介石に通告、トラウトマン工作始まる)

『飯沼守日記』十一月三日

明治節吉例ニ依リ天候恢復スル模様明カナリ

方面軍司令部ノ動員ハ十月二十九日下令、(下令ノ正式電報来ラサルモ武藤大佐ハ私伝アリ且書類昨日到着セルヲ以テ)二日完結ノ報告ヲナス 感状授与種々議論アリシモ軍司令官ノ趣旨ニ從ヒ次ノ部隊ニ今日ノ佳辰ニ附与サレタリ田上、應森、飯田、天谷、和知部隊、感状附与ニ就テハ其功績ノ看方、他トノ釣合ヒ、将来ニ及ス影響、軍司令官ノ氣持、軍師團幕僚ノ感シナト種々錯綜シ議論スレハ限リナキモノナリ殊ニ今回ノ如キ作戰ニテハ目立チタルモノナキヲ以テ益々然リ、後ヨリ来リシ師團及個人感状ニ就テハ追テ詮議セラル

十一月三日 ブラッセルで日中紛争に関する九カ国会議始まる(十一月十五日、日本非難決議採択)。

◇十一月四日（小雨）

第九師団ハ僅ニ其前方ニ地域ヲ拡張シ 狄巷上附近ヲ占領セシモ屈家宅ハ未タ占領スルニ至ラス 但シ師団ノ主力ハ既ニ南岸地区ニ兵力ヲ集結スルヲ得タリ

第三師団ハ依然前岸ニ步兵約四大隊ヲ渡河セシメタルノミニテ戦線ヲ拡大スルヲ得ス 北岸ヨリ敵ノ側防陣地ヲ逐次ニ破壊シツツ尔後ノ攻撃ヲ準備中

第十三師団、第十一師団正面変化ナク 重藤支隊、永津部隊ハ此日其兵力ヲ月浦鎮東南地区ニ集結シ 今後ノ転進ヲ準備中ナリ

第十軍ハ昨日既ニ全船隊ヲ以テ馬鞍群島ニ集合シ明朝ノ上陸ヲ準備中ナリ 方面軍ヨリ塚田參謀長ヲ馬鞍島ニ派遣シ柳川軍司令官ニ予ノ意圖ノ大要ヲ代述セシメ 尔後第十軍ノ作戦ニ便セシム 只昨日来天候不面白 明日ノ天候又疑シク心配ニ不堪

雲ニ南市支那避難民ノ為メ仏国宣教師等相謀リ 仏国領事等ノ意ヲ承ケテ南市ノ一部ニ避難民ヲ集合シ 此ヲ中立的地域トシテ其被害ヲ免レシメントノ申出アリシニヨリ 予ハ其主旨ニハ敢テ反対ナキモ 支那人民殊ニ其敵軍今後ノ行動ニヨリ必スシモ之ヲ保証スヘキ限ニアラサル旨ヲ答ヘシメタリ 又英米諸國領事ニ対シ 軍ハ從來南市附近ニ於ケル支那人民ノ犠牲ト同地及浦東地区ニ於ケル列國ノ權益（建築物等）ヲ冒犯スルヲ避ケン為メ 今日迄該地方ニ於ケル攻撃ヲ遷延シ来リシカ 戦況最早永ク之ヲ放置スルヲ許サルニ至レルヲ以テ 支那軍ニシテ依然該地附近ニ止リテ抵抗ヲ持續スルニ於テハ軍ハ早晚之ヲ攻撃セサル可カラス 自然支那人民及英米諸國ノ財産ニ被害ヲ可与ハビムナキ処ナル旨通告セシメタリ 之レ南市ヲシテ可成武力ニ抛ラス 又大ナル被害ナク之ヲ占領スル 予ノ從來ノ希望ニ基クハ勿論ナレトモ 又之ニ因テ英米等ノ自己の利益保護ノ為メ 支那側ニ作用シテ該地ヲ撤退セシメントスル策略ニモ依ルモノナルカ 上記南市ヲ始メ浦東地区ニ於テモ漸次敵軍退却ノ徵アルハ 一方蘇州河岸ニ

於ケル我軍ノ攻撃ニ原因スヘキモ亦此種ノ工作力不少影響アリシモノト察セラル

尚此日南市住民ニ対シ豫テ発表セシ軍司令官ノ布告ヲ散布シ 当地ノ撤退ヲ警告スル伝單ヲ散布ス 英米其他ノ諸國ニ対シ浦東、南市攻撃ニ関スル警告ヲ与フ（欄外）

親補 方面軍司令官（欄外）

此日十月三十日附 予カ新ニ

親補 中支那方面軍司令官兼上海派遣軍司令官 ノ辞令ヲ拜受ス

又此日ヲ以テ方面軍司令部ノ編成ヲ完結シ 幕僚其他ニ命課ヲ与フ

然レトモ第十軍ノ予ノ指揮ニ入ルハ其戦列部隊大部ノ上陸ヲ了リタル後ニ於テ発令セラルヘク 其迄ハ第十軍ハ独立ノ作戦ヲ行フコトニ定メラレアリ 是レ此軍ノ上陸計画カ豫メ予ノ意見ヲ徴セス 中央部ニ於テ決定セラレタル為メ其責任上此ク定メラレタル由ナレト 此辺中央部ノ遣方ハ軍統帥ノ真精神ヲ解セサル若年者共ノ小細工ニテ 今後方面軍ノ編成モ戦闘序列ニ抛ラスシテ編合集團ノ形式ニ抛ルナト遺憾ノ至ナリ

予自身去一日ヨリ多少風邪気味ニテ七、八度ノ熱アリシカ「マラリヤ」ラシク 本日ヨリ規根ヲ服用シ経過良好 此分ナラ後二、三日ニテ全復ノ見込（欄外）

◇十一月五日（曇）

第十軍上陸戦闘成功（欄外）

軍各師団ノ状態変化ナシ

第十軍（丁集團ト称ス）ハ今朝五時半ヨリ第六、第十八師団及第五師団ノ一支隊ヲ以テ一齊ニ金山衛城南側海岸ヨリ上陸ヲ敢行ス

幸ニ同地附近敵ノ守備軍ハ恰モ交代ノ時期ナリシカ如シ 海岸ノ守兵殆トナク 殆ト敵ノ抵抗ヲ受クルコトナク 無事第一線部隊ノ上陸ニ成功シ 同九時半ニハ既ニ金山衛城ヲ占領シ同夕刻ニハ其一部隊ヲ以テ同城北方約二里ノ強堰鎮ヲ占領シ 尚同城東西約三里ノ海岸ニ各一部

『飯沼守日記』十一月四日

司令官二、三日前ヨリ少シ気分勝レス今日軽度ノ「マラリヤ」ト診断ス司令部内ニモ先日中ヨリ数名アリト

24日一昨日一門、本日一門腔発シ本日ハ藥室附近ニテ爆発隣接砲手五名輕傷ヲ負ヘリト一門ハ予備アリ（調査ノ結果二門共過早破裂ナリシコト判明、二彈共広島製）

〔註〕攻城重砲兵第一聯隊第一大隊（長小笠原勝國²⁸則少佐）の四五式二十四榴榴彈砲

十一月四日 「交戦法規ノ適用ニ関スル件」次官通牒「各軍ニ通牒セラレアルニ付」として丁集團（第十軍）參謀長宛発信（陸支密第一七七二号）

〔註〕「交戦法規ノ適用ニ関スル件」梅津陸軍次官より、八月五日駐屯軍參謀長あて通牒（「日支全面戦ヲ相手側ニ先ンシテ決心セリト見ラルルカ如キ言動ハ努メテ之ヲ避ケ」るものとした）

『下村定中将回想応答録』

昭和十四年秋（參謀本部作製）

杭州湾上陸作戦と中支那方面軍の編成

殿下 第十軍を単独で上陸させて其の後で方面軍を作り上海派遣軍司令官を方面軍司令官に兼任させるという案を採られて居るのですが、あの時にはそれで巧く行くだらうといふ考へがあつたのですか。

下村 変則で不可ないと思つて居りましたが、あの当時は方面軍の後方は局限されて居り、又遠く前へ出るといふ考へもありませんでしたから正式に方面軍司令部を作つても居る所がないと云ふ関係もありました。あれは全然変則でありました。

（竹田宮恒徳王大尉と対談）

規根ニキニーネ（マラリアの特効薬）

十一月五日 第十軍、杭州湾北岸に上陸、上海戦線の背後をつく

隊ヲ派遣シ 軍ノ上陸ヲ掩護スルヲ得タリ

該海岸ニハ少数ノ敵軍アリ 殊ニ西方地域ニ於テハ乍浦、平湖方面ヨリ急進シ来レル相当ノ敵ニ対シ交戦中ナリト云フモ状況未タ審カナラス

要之第十軍ノ上陸ハ予力深ク憂慮セシ所ナリシカ 幸ニ天佑ヲ保全シテ海面頗ル平穩ニ且ツ朝霧ノ為メ極メテ急襲ノニ上陸ヲ実行シ得 先ツ最初ノ軍ノ根拠地ヲ獲得シタルハ欣幸ノ極ナリ 只曇天ノ為メ海軍航空隊ノ爆撃ニ不便ナリシハ遺憾ナレト 現ニ此地方今ヤ其後方ニ直接大部隊ノ現在スルモノナキ模様ナレハ此必要モ少シ 只今後作戦ノ進捗ニ伴フ航空隊ノ協力殊ニ各部隊ノ前進ノ為メニハ速ニ天候ノ恢復ヲ欲スル次第ナレト 昨夜ハ夜半大分降雨アリ唯明日ノ天候ノ恢復ヲ神明ニ禱ルノミ

第十軍司令官及之ニ協力セル第四艦隊長官ノ祝電及感謝ノ電ヲ発ス(欄外)

◇十一月六日(時々日光ヲ照スモ雲低シ)

一、派遣軍ノ情况

一、第九師団ハ本夕屈家橋ノ西北角ヲ占領シ 続テ殘敵ヲ掃蕩中ニシテ又施家街正面ニ近接シ 攻撃陣地ヲ推進シツツアリ

二、第三師団ハ午後辟家野及郁家宅ヲ占領シ南岸ニ其地歩ヲ拡張スルヲ得タリ 本夜船隊橋ヲ架設シテ北岸トノ交通ヲ確保スル筈

三、第十一師団左翼江橋鎮附近ノ敵ハ寧口其ノ兵力ヲ増強シツツアル如ク 第九師団ノ右翼ニ脅威ヲ感シ 自然同師団ノ攻撃ヲ遅延セシムルヲ以テ 同師団ヲシテ有力ナル部隊ヲ以テ江橋鎮ヲ攻撃セシムヘク命令ス

又第一百師団ノ一聯隊ヲ近ク其第九師団ノ右翼後ニ集結シ万一ニ備ヘシム

四、第十三師団正面ハ各所ニ小規模ナル敵ノ逆襲アルモ状況変化ナシ

二、第十軍ノ情况

第十軍ハ殆ト敵ノ抵抗ヲ受クルコトナク 此日朝十時既ニ其先遣部隊ヲ以テ松江南方黃浦江ノ線ニ進出スルヲ得タリ 尚同地附近ニ集合セル民船約二百隻アリ 之ヲ利用シテ直ニ一部ヲ以テ北岸ニ渡河セシメタリ 尚軍主力ハ鋭意第六、第十八師団ノ半部ヲ以テタ刻迄ニ黃浦江岸ニ概ネ進出シ得タリ

尚軍ハ第六師団ヲシテ松江ヲ占領セシメ 第十八師団ノ主力ヲ以テ楓涇ニ向ヒ前進セシムヘク区署中ニテ 更ニ第六師団ノ一部隊(歩兵一大隊)ヲ水路平望鎮ニ向ヒ前進セシムヘク区署セルモ 其成功ハ困難ナラン

諸情報ニヨレハ 敵ハ第十軍ノ上陸ニ驚キ急遽嘉興附近ノ部隊ヲ楓涇附近ニ前進セシメ同地附近ヲ守備セシムルト共ニ崑山、蘇州附近ヨリ兵力ヲ南方ニ転進セシメ 青浦及平望附近ニ向ハシメアル如ク 派遣軍前面ノ第二線兵団モ青浦、松江ニ向ヒ退却中ナルカ如キモ第一線部隊ハ依然陣地ヲ固守シアリ(欄外)

◇十一月七日(雨 風速八米)

派遣軍各方面戦況大ナル変化ナシ

第九、第三兩師団ハ僅ニ其地区ヲ拡大シタル(モ) 前面ノ敵ハ尚頑強ニ陣地ヲ固守シアリ但浦東、南市附近ノ敵ハ漸次青浦方面ニ退却中ナリ

第十軍ハ鋭意北進ヲ継続シ 此日夕ニ漸次兩師団ノ主力ヲ松江西南方地区ニ集結シ 一部ヲ以テ楓涇及平望ニ向ヒ前進セシメタルモ 其主力(6D)ハ尚南庫附近ニ於テ渡河中ニテ一部ヲ以テ其北方ニ於テ鐵道線ヲ遮断セリ 又第十八師団ノ主力ハ洙涇附近ニ於テ渡河中ニテ後方補給ト兵力ノ集結次第楓涇ニ向ヒ前進スル筈

此日天候不良ニシテ海面風波相当ナルモ尚揚陸作業ニ妨ナク 不少其効程ヲ遲ラシムルコト已ムナキ次第ニテ 第一百十四師団ノ上陸ハ一日位遅延スルモノト思ハル

此日ヨリ予ハ第十軍ヲ併セ指揮スルコトトナリタルヲ以テ 第十軍ニ命令スルニ主力ヲ以テ

十一月七日 「中支那方面軍」の編合を下令(作戰地域は蘇州—嘉興の線以東と限定)

臨參命第三百三十八号
命令

一、左ノ部隊ヲ中支那方面軍ニ編合シ中支那方面軍司令官松井大將ヲシテ指揮セシム

中支那方面軍司令部
上海 派遣軍

第十軍

二、中支那方面軍司令官ノ任務ハ海軍ト協力シテ敵ノ戰爭意志ヲ挫折セシメ戦局終結ノ動機ヲ獲得スル目的ヲ以テ上海附近ノ敵ヲ掃滅スルニ在リ

昭和十二年十一月七日

奉勅伝宣

參謀總長 載仁親王

中支那方面軍司令官 松井石根殿

上海派遣軍司令官 柳川平助殿

第十軍司令官

〈後方の諸問題〉 井本熊男日記

*

以下の記述は、中支那方面軍兵站主任二宮義清³⁴則參謀の現地出張中の參謀本部河辺作戰課長に対する説明要旨である。二宮少佐は參謀本部、作戰課から出征し、困難を極めた上海の補給問題をよくさばいて、大きな貢献をした。

(1) 第十軍の後方

A 十月一日頃から、黃浦江を利用する補給の研究に着手した。十一月五日第十軍上陸後の状況は一両日不明であったが、七日に至り断片的に成功しつつあることがわかり一応安心した。八日になると、上陸海岸附近のクリークに舟がなく、道路に橋がなく後方は苦境にあることがわかった。九日小畑後方主任參謀(輜重兵中佐小畑信良)から、後方は処置なしの実情である。上海派遣軍の支援を頼む、といってきた。

B 方面軍はこの要求に応ずる如く、上海派遣軍に命令したが、同軍は積極的でない。方面軍は重ねて細部を命令し、特に作命甲として下達したが、派遣軍の第一課はこれが実行を渋った。

次いで派遣軍に対し、上海西方地区に北上突進中の國崎支隊と第

上海西南方ニ於ル派遣軍ノ作戰ニ協力シ 尚崑山方面ニ対スル後ノ作戰ヲ準備スヘキヲ命ジタルモ 同軍ハ既ニ上陸前ノ作戰計畫ヲ變更シ主力ヲ以テ平望、嘉興方面ニ前進スル目的ヲ以テ昨日來区署シツツアルニ依リ 直接上海西南方地区ニ近接シテ敵ヲ捕捉スルノ機会最早見込ナキニ似タリ 遺憾ノ極ナレト是レ結局同軍ノ作戰ヲ最初ヨリ予ニ委任セサル結果ナリ 可惜

◇十一月八日(小雨)

一、派遣軍方面情况大ナル变化ナシ

二、第十軍ノ上陸ハ相当困難ニシテ 両師団ノ野砲ハ未タ上陸ヲ完ラス第百十四師団ノ上陸ハ勿論未タ開始スルヲ得ス 殊ニ陸上交通困難ニシテ泥濘ト共ニ僅ニ輜重車輛ヲ通スル道路一アルノミ 水運モ携帯舟艇ノ陸揚困難ニシテ未タ実施スルヲ得ス 両師団ノ携行セル折畳ミ輕渡河材料ヲ以テ多少共明日ヨリ水運ヲ行ヒ得ル情態ナリ

自然第十軍部隊ハ殆ト現地ノ物資ニ依リ此処數日ヲ給養セサル可ラサル苦境ニ在リ

是レ參謀本部力不完全ナル智識ト偵察ニヨリ此計畫ヲ定メタル結果ニシテ 幸ニシテ派遣軍ノ蘇州河岸ノ攻撃ノ為メ松江附近ノ敵兵ノ大部上海南方地区ニ移動シ松江附近ノ敵兵微弱ナリシ為メ 軍ハ能ク予期ノ目的ヲ達成シタル次第ナリ

第十軍作戰指導方針ノ變更(欄外)

仍テ予ハ第十軍ノ立場ヲ顧念シ 方面軍ノ從來ノ企圖ヲ變更シ其一部(少クモ一師団)ヲ以テ青浦方面ニ作戰シテ直接派遣軍ニ協力セシメ 主力(二師団)ヲ以テ嘉興方面ニ作戰スヘク区署ヲ改メ之ヲ第十軍司令官ニ命令ス 蓋シ柳川司令官以下ノ面目ヲ保チ將來兩軍ノ精神的団結ヲ鞏カラシメントスル予ノ意中也

◇十一月九日(晴)

上海閉鎖大成ス(欄外)

蘇州河南岸ノ敵ハ昨夜半退却ヲ開始シ 第九、第三師団ハ未明ヨリ全線追撃ニ移リ 正午頃迄ニ第九師団ヲ以テ七宝鎮附近ニ 第三師団ノ主力ヲ以テ龍華鎮ヲ占領シ 此ニ全ク上海ノ閉鎖ヲ完成シ得タリ

但敵ノ一部ハ尚南部、中央部ヲ固守シアリ

此ニ上陸以來二ヶ月半 軍ハ遂ニ能ク上海封鎖ノ目的ヲ達シタルハ 一二稜威ニ依ルモノニテ又第十軍ノ上陸力此動機ヲ与ヘタルハ勿論ナリ 予カ曩ニ二十日間ヲ期シ上海封鎖ヲ予言シタルシカ 恰モ第十日能ク之ヲ達成シ得タルハ欣懷ノ至ナリ

第十軍ノ第六師団ハ此日青浦ニアル小數ノ敵ニ対シ攻撃実行中ニシテ 第十八師団ハ既ニ楓涇ヲ占領シテ嘉善ニ向ヒ前進中 第百十四師団ハ本日ヨリ上陸ヲ開始シ 逐次ニ金山附近ニ集結ノ予定ナリ

◇十一月十日(晴天)

一、派遣軍ノ状況大ナル变化ナシ

第三師団ノ一旅団(第五旅)ハ明來南市ノ殘兵ニ対シ攻撃ヲ開始シ 南市中部クリークノ線ヲ固守スル敵ヲ攻撃ス

尚南市居住民ノ為メ旧城内ヲシテ其避難地区ヲラシメ 戦禍ヲ避ケシムル事ニ仏國側及南市側人民ニ通告セリ

二、第十軍ハ困難ヲ冒シテ上陸続行中

第六師団ハ青浦ヲ占領シ一部ヲ以テ北方ニ向ヒ敵ヲ追撃中ニテ 第十八師団ハ嘉善ニ向ヒ攻撃中ナルモ情况審カナラス

依テ方面軍ハ派遣軍ニ命シテ其重砲一聯隊、兵站自動車一中隊ニ歩工兵若干ヲ附シ 陸路青浦ニ向ヒ派遣シテ第六師団ヲ増援セシムルト共ニ 歩砲彈藥ノ若干ヲ松江ニ向ヒ陸路輸送シテ第十軍ノ急ニ応セシム

六師団に対する補給を担任させた。

C 当時上海(黃浦江)の埠頭全部は揚陸船舶のため充満して閉塞状態であったが、十日夕若干開通したので、十一日第十軍の後方の一部を上海に廻航するように命令した。この命令により第十軍は、未揚陸の船舶全部を一挙に黃浦江に廻航してしまつた。これがため上海の未揚陸船舶の碇泊数は、百數十隻となつた。

D 十一月十二日青浦に向かい、第六師団の彈藥を自動車により道路を開設しつつ送り届けることに成功した。第六師団の上陸後、青浦を経て崑山附近に至る迅速果敢な作戰を可能ならしめたのは現地物資が豊富であつたため、糧食の要求が全然なかつたためである。

自動車輸送した彈藥は同師団の崑山附近の戦間に間に合つた。

E 黃浦江が開通し、海軍の援助もあつて、十七日から五千屯を遡江させた。

F 上海以北の全埠頭を利用し、百數十隻の滞留船中毎日十二、三隻の揚陸を進捗させている。

G 第十軍の全力を推進し得る後方態勢を作るには、今後約二十日

位を要するであろう。彈藥は、四分三會戰分位の余裕ができる見込みである。

(2) 上海派遣軍の後方

A 二ヶ月以上にわたる陣地戦であつたため、多量の彈藥を使用した。大場鎮では比較的少量の消費で済んだが、蘇州河の渡河戦闘では、予想外に多量を使った、特に砲兵彈藥を多く使つた。

南市遮断後においては、第十一師団と重藤支隊は二分一、他の兵団は五分一會戰分で我慢する予定であつた。第九師団が追撃命令に応じて追撃を発起しなかつたのは、彈藥の不足も一つの原因であつた。さらに第十軍(第六師団、國崎支隊)に補給したため、一層不足を感じた(第六師団と第十六師団の輜重は、乗船地「北支方面」に残置している)。

次に内地から届く彈藥を合すれば、十二月初旬において、全軍の半會戰分を持つことができる見込みであるので一応樂觀している。

B 糧食その他、目下全軍に対し約二日分位保有量がある。毎日揚陸しているのは一日分程度であるので、この状況は容易に改善されない。

英国艦隊長官トノ初会見（欄外）

此日 英国艦隊及陸軍司令官ト江湾ノ学校ニテ会見ス 英国長官ハ往日ノ不遜ナル態度ヲ一変シ 態度頗ル懇懇ニシテ屢々英軍力カ日本軍ノ作戦ヲ妨害スル意志ナキコトヲ陳述セシカ 寧ロ可憐ノ態度ニテ仰イテ予ノ顔ヲ見得サル様笑止ナリ 予ハ之ニ対シ一応國際的辭礼ヲ述ヘタル後 軍ハ將來蘇州河、黃浦江及鉄道ヲ軍補給ノ為メニ使用スヘク 之ニ対シ妨碍ヲ加フルモノハ支那人ト外國人ノ別ナク必要ナル自衛手段ヲ取ルヘキコトヲ予告シ置キタリ 英国長官ハ之ニ対シ 総領事等ノ間ニ之ニ関シ何等カノ協定手段ヲ講セラレ度意ヲ述ヘタルニ依リ 予ハ之レヲ必要トス 全然日本軍ノ意志ニヨリテ之ヲ決行スヘク 只附近警備ノ任ニアル英国陸海軍力所要ノ注意ヲ私ヒ 我軍トノ間ニ不幸ナル出来事ノ發生ナカラシムル様努メラレ度旨ヲ希望スルノ意ナル旨ヲ告ケ 英軍ニシテ之ニ関シ地方支那人ノ取締等ニ関シ協力セラル、ヲ得ハ幸ナリト述ヘ置ケリ

右会見後 英米仏伊諸國ノ支那大公使館附武官ト会見 前記英国長官ニ述ヘタルト同様ノコトヲ述ヘ 各國官憲及軍隊ノ善処方ヲ希望シ置キタリ

各國武官ノ態度モ皆謙恭ニシテ日本軍及予ニ対スル深厚ナル敬虔ノ情ヲ表シ 寧ロ日本軍ノ威力ニ畏怖ノ情アルヲ見ル

右終テ川越大使ノ來訪ヲ受ケ 將來上海ニ於ケル支那稅関、銀行、通信機關等ヲ日本軍自ラ占領監視スルノ必要ヲ述ヘ 大使ハ之ニ関シ頗ル難色アルモ更ニ研究ヲ促シ 明後十二日ヲ期シ再会見ノ上之ヲ協議ヲ行フコトニセリ

◇十一月十一日

一、派遣軍ノ情況

大体変化ナシ

第三師團ノ南市掃蕩隊ハ尚微弱ナル敵ト相当ノ戰鬪ヲ交ヘツツアルモ 既ニ其大部ハ仏租界

及舟ニテ浦東上流方面ニ遁避シツツアリ

別ニ第二百一師團ノ一聯隊ニ海軍陸戰隊ニ大隊ヲ合スル一支隊ヲ以テ今未明四時 黃浦江岸川崎ドック附近ニ上陸セシメ浦東ノ掃蕩ニ當ラシム 此部隊ハ若干ノ便衣隊様ノモノヲ驅逐シツツ午頃白蓮涇ノ線ニ進出シ 附近ノ殘敵ヲ掃蕩シツツアリ

第十一師團ハ漸次敵ヲ圧迫シテ南翔西南方地区ニ進出ス

二、第十軍ノ情況

第六師團ハ鋭意敵ヲ追撃シツツ北進シ 夕刻前鶴港鎮ニ主力ヲ以テ到着シ其一部ハ蘇州河ヲ渡リテ北岸ニ地歩ヲ占ム 流石九州健児ノ意氣可賞 軍司令官宛賞詞ヲ電報ス

第十八師團は概ネ嘉善ヲ占領シタルラシク 第四百十四師團ハ尚揚陸ヲ続行中ナルモ 既上陸ノ部隊ヲ以テ青浦ヲ攻撃シ平望鎮ヲ經テ嘉興ニ向ハシムル如ク区署セリ

第十軍諸隊ノ揚陸困難ナルニ鑑ミ 其重砲旅團（第四百十四師〔團〕ノ野砲ヲ含ム）其他ノ部隊ハ上海ニ廻航シ上陸セシムルコトトシ 尚第十軍ノ彈藥ヲ補充スル為メ派遣軍ヨリ陸路松江ニ向ヒ補給セシムルコトトス

此日敵軍全般ニ退却ノ徵アル旨飛行隊ヨリノ報告アリ 尚第六師團ノ蘇州河岸ニ到着セル一軍モ 最早蘇州河西岸ニ於ケル敵軍ノ退却ヲ察知セラルニヨリ軍ハ從來ノ方針ヲ變更シ 一挙常熟―蘇州―嘉興ノ線ニ向ヒ追撃スルニ決シ之ニ関スル命令ヲ午後十時兩軍ニ与フ 其要旨ハ一、第六師團長ノ指揮スル部隊ヲ一時派遣軍司令官ノ隷下ニ入ラシメ 目下上海南西地区ニ集結中ナル第九師團ヲ該師團右方黃渡鎮西南方地区ニ前進セシメ 其二崑山ニ向ヒ突進セシム 二、豫テ計畫中ノ重藤支隊ハ即時上船セシメ 十三日未明ヨリ白茆河口ニ上陸セシメ 常熟ノ占領ヲ企圖ス

尚第十六師團諸隊ハ十四日ヨリ逐次到着セル部隊ヲ以テ同地ニ上陸セシム

三、派遣軍ハ更ニ其一師團ヲ可成早ク抽出シテ第十六師團ニ続キテ許浦鎮附近ニ上陸セシメ

常熟占領ヲ図ル

第十軍の後方百隻が、埠頭のはほとんど全部を占領しているので、派遣軍の糧食はますます困難となつてゐる。派遣軍は強硬な抗議を申し込んでいる。毎日揚陸しているのは一隻分程度で、この状態は暫く改善されそうにない。

船舶を解備することを暫く保留し、方面軍全力の一ヶ月分程度の軍需品を集積するようにされることを希望する。

C 第一線に対する輸送力も少ない。蘇州附近まで、良好な自動車道は一本だけである。馬は瘦せ衰えて役に立たない。

蘇州河利用の研究をしているが、英国との関係で容易に進捗しない。水路が開通すれば、左の如く日量輸送力が出せる見込みである。

黃浦江（金山まで）

..... 約三、〇〇〇屯

蘇州河

..... 約一、〇〇〇屯

劉河鎮―大倉間

..... 約 八〇〇屯

揚子江（許浦鎮まで舟艇で）

..... 約 八〇〇屯

右水路の開通は、十一月一杯で概ねできる見込みである。右に伴

う輸送機関も、本月中には概して集め得るものと見込んでいる。

D 軍の主力を以て常熟、蘇州の線から相当距離進出するためには、三週間位の準備が必要である。一、二ヶ師團の進出ならば今でも可能。

E 兩軍とも後方を十分に整え全力を発揮し得るのは、十二月上旬と判断している。方面軍としては船と鉄道とを持った直轄管区を設け、兩軍に対する後方を統制することが必要である。

F 上海方面軍の状況

第十軍は、金山衛城附近の遠浅に五百メートルの棧橋を構築したが、役に立たなかった。同軍は、百六十六隻の輸送船中九十七隻を上海に廻航した。そのため黃浦江には、合計百二十四隻の輸送船が集まった。

上海には、派遣軍の軍需品を積載した輸送船二十七隻が停泊していたが、右九十七隻の到着でその揚陸は著しく妨害せられてゐる。これをさばくため上海以北の全埠頭を左の如き比率で使用し、ただし実情に応じ彼此融通してゐる。

軍隊のため

五〇%

四、第十軍ノ主力ハ、平望、嘉興ノ線ニ向ヒ敵ヲ追撃ス

此日 AP UP ルウター、ハヴァス其他ノ在上海各国主要通信員ト初度ノ会見ヲナシ 勉メテ角張ラサル態度ヲ以テ軍ノ方針及予ノ将来ニ於ル企図ニ関スルヒントヲ与ヘ 尔後各通信・中正ニシテ世界ヲ誤ラシメサル様特ニ希望シ置ケリ 一同大ニ満悦セル状態今後ノ世界通信ニ好影響アリタルモノト認ム

◇十一月十二日(曇後小雨)

朝来各師団ハ追撃ニ移リ 夕刻迄ニ第九師団ノ一部ヲ以テ黄渡港西方北岸ニ 第十一師団ノ一部ヲ以テ嘉定西方外崗鎮附近ニ進出シ 尚第三、第一百一師団モ稍遅レテ其東方ニ連リ 嘉定西方地域ヲ經テ太倉鎮ニ向ヒ敵ヲ追撃中

又第十三師団ノ主力(歩兵約七大隊)ハ瀏家鎮西南方地区ヨリ太倉東北方地区ニ向ヒ 敵ヲ追撃ノ準備ニアリ

重藤支隊ハ本日上海埠頭ニ於テ上船シ 明未明白茆河口ニ上陸シ常熟ニ向ヒ進撃ノ筈 第十軍ハ逐次嘉興ニ向ヒ攻撃ヲ進メツツアル筈ナルモ 情况不明

大使 海軍長官ト会見(欄外)

此日川越大使、長谷川長官ヲ方面軍司令部ニ参集ヲ得テ 尔後ニ於ケル上海善後処理ニ付協議ス 予ノ希望ノ要旨ハ

一、在共同租界ノ支那税関、国立諸銀行、電信局等ヲ我軍ニ於テ占領警備スルコト

二、共同租界ニ於ル英國軍ノ守備地域ニ若干ノ変更ヲ加ヘ 蘇州河左岸地区ハ我軍ニテ之ヲ守備シ 今後同蘇州河ニ於ケル我軍ノ補給ノ安全ヲ図ルコト

三、不取敢南市 次テ上海県、宝山県一般ニ亘リ支那人ノ自發的自治機關ヲ作ラシメ 我軍ハ作戰上必要ナル緊急 治安ノ維持ニ付指導ヲ与フルコト

四、浦東南市地区ハ陸軍之レヲ清掃シ 今後モ其警備ニ当ルヘキモ 黄浦江面ニ対スル警戒

重要ナル江岸ノ邦人權益物ハ海軍ニテ守備スルコト

右ニツキ大使ハ勿論、海軍長官モ前項ニ付同意ヲ表セス 國際的紛糾ヲ避ケ且ツ從來英國海軍トノ守備關係等ノ経緯ニ基キ 今直ニ其警備地区ノ變更ヲ申出難キ抔述ヘ甚タ消極的態度ヲ持スルヲ以テ 予ハ然ラハ他ノ便宜ノ方法ヲ以テ上記ノ目的ヲ達スルコトヲ得ハ 予ハ敢テ直ニ陸軍部隊ノ租界ニ於ケル守備ヲ主張セサルモ 今後工部局、英國側等ノ態度次第ニテハ遂ニ之ヲ強行スルノ必要アルヘキモ 先ツ大使館其他ニ於テ之レカ方法ニ付研究セラレ度旨ヲ述ヘ之ヲ他日ノ解決ニ俟ツコトトセリ 要之 大使館側ハ勿論、海軍側力作戦上并ニ南京政府ノ降服ヲ促ス為メ 上海ノ行政、財政の根柢ヲ打壞スルノ必要ヲ重視セス 徒ラニ國際關係ヲ云々シテ作戦ノ利ヲ収ムルノ意ヲ欠クハ遺憾ノ至ナリ 此情勢ト今後必要ニ応シテハ予ノ意志ニヨリ強制的手段ヲ執ルノ要アルヘキト思考ス

尚第三、第四項ニ関シテハ海軍、大使共ニ異議ナク 之レカ実行ニ関シテハ両方面ヨリ夫々協力スヘキ旨ヲ約ス

昨日来南市ニ残留セシ敗残兵ハ終日尚抵抗ヲ続ケタリシカ 夕刻ニ至リ殆ト全市ヲ鎮定スルコトヲ得タリ

◇十一月十三日(晴)

白茆江方面ニ上陸シ常熟ヲ攻略スヘキ任務ヲ与ヘタル重藤支隊ハ昨夜呉淞ヲ出發シ 今朝六時頃ヨリ白茆江―徐台涇口間ノ地区ニ上陸ヲ開始シ 近藤海軍少將ノ指揮スル水雷戦隊ハ之ニ協力シ 大ナル抵抗ヲ受クルコトナク夕刻迄ニ江岸堤防ノ線ニ進出スルヲ得タリ

尚之ニ続行シ第十六師団ノ33聯隊ハ其左翼方面ニ上陸ヲ開始セリ

予ハ此日十三掃海艇ニ乗シテ午後七時白茆江錨地ニ至リ 軍艦大井ニ転乗シ上陸部隊ノ状況ヲ視察スルニ 重藤支隊ノ上陸ハ概ネ順調ニ進捗シ 第十六師団ノ部隊ハ訓練氣合不充分ノ為メ揚陸行程意ノ如クナラス

第十軍の後方 二〇%

上海派遣軍の後方 二〇%

その他 一〇%

中支碇泊場監部は、将来必要となるであろう。陸上輸卒隊は、三ヶ月間連続使用でヒヨロヒヨロになっている。

支那苦力を相当使用しているが、現在ではその給養に困っている状況である。

どの船に何が積んであるかさっぱりわからず、これを確かめるのに苦労する。船長も知らず、中支監部は全力をあげて一とおり調べるのに三日間を要した。しかし逐次曙光は見えてくるので、将来は楽観してよい。

G 兵站部隊

(a) 兵站監部は設ける必要があると思う。その一案として、方面軍司令部附の田尻少将(船舶の權威で中支碇泊場監)を兵站監とすることは、有力な方法であると考えられる。いづれにしても方面軍直轄管区を作る場合、しっかりと兵站組織を作ることが必要である。

(b) 自動車不足を強く感じている。水運もあるが、激烈な陣地戦であったため陸運も必要で、補給量は予想外に大きくなった。平時

の数量表による計算通りには行かない。

(c) 地方舟は無限にあるように思われ勝ちであるが、全軍兵站として系統的組織的に使用する程には集まらない。ジャンクを集めたところ、どの船にも避難民が一杯乗っており、その処置に困った。内地から出来るだけ発動艇を送ってもらいたい。

(d) 戦死者の個人装備は膨大な数量に上っているが、縁起をかついで、これを使用することを誰もいやがって、避ける傾向が極めて強い。

*

井本熊男(37則参謀本部作戦課員)『作戦日誌で綴る支那事変』170、174ページによる。

上海西方地区ニ於テハ各師団ハ銳意追撃ヲ実行シ此夕迄ニ右ヨリ第十三、第一百一、第十一、第六師団ヲ以テ概ネ劉河ノ線ニ達シ 第三、第九師団は稍遅レテ之ニ追隨ス

太倉（欄外）

第六師団ハタ刻既ニ崑山ニ近ク進出シ第十一師団ハ太倉ニ近ク進出ス 敵ノ大集團ハ尚太倉両側地区ニアリ相当混乱シテ湖ヲ渡リテ蘇州北方地区ニ向ヒ退却ス

重藤支隊ハタ刻迄ニ上陸ヲ続行シツツアリ

◇十一月十四日（晴）

派遣軍ハ敵ヲ追撃シテ崑山、太倉ヲ占領カ占領ス

重藤支隊ハ漸次敵ヲ圧迫シテ梅李鎮ノ西北方地区ニ進出シ 一部ヲ以テ支塘鎮ニ近ク進出ス 第十六師団ノ33ハタ刻迄ニ支塘鎮ニ進出セルモ尔余ノ上陸涉々シカラス 夕刻迄ニ漸ク第二兵団ノ歩兵一大隊ヲ上陸セシメタルニ過キス 許浦鎮ハ尚タ刻迄敵兵之ヲ固守シアリ

第十軍、第六師団ノ歩兵一大隊ハ水路ニヨリ松江ヨリ西進シ 此日平望ヲ占領セリ 尚第十

八、第一百十四ハ逐次兵力ヲ集結シテ 嘉興ノ攻撃ヲ準備中ナリ

第十軍ノ輜重其他ノ兵站部隊ハ金山衛附近ノ揚陸ヲ断念シ 尽ク上海ニ其揚陸点ヲ変更スル

コトニ決シ 漸次輸送船ヲ上海ニ廻送シ浦東地区及南市附近ニ漸次根拠地ヲ確立セシムルコト

トセリ

方面軍ハ第三、第一百一師団ヲシテ其進出地附近ニ集結セシメ 方面軍ノ直轄タラシムルノ準備ニアラシム

◇十一月十五日（曇）

此朝予ハ白茆江口ニアリテ第十六師団ヲシテ江岸ニ沿フ地区ヲ福山ニ向ヒ攻撃セシムル様命令ヲ与ヘタリシモ 留守中軍司令部ニテ同師団ヲ左翼方面ニ作戰セシムル様命令セシヲ以

テ已ムナク之ヲ事後承認シテ下記ノ如ク区署シタルモ心中遺憾ナリ（欄外）

派遣軍ハ敵ヲ追撃シ 第六師団ハ一部ヲ以テ蘇州方面ニ敵ヲ追撃中

第十一、第十三師団ハ太倉―常熟道及其東方地区ヲ追撃シ 今朝支塘鎮及其東方□地区ニ進出セリ 仍テ軍ハ左翼ヨリ第十六、重藤支隊、第十三師団ヲ並列シテ常熟、福山ノ陣地ヲ突破セシメ 無錫ニ向ヒ敵ヲ追撃スヘキヲ命シ 第十一師団ハ支塘鎮附近ニ其兵力ヲ集結セシム

第十六師団ノ33ハ常熟ニ向ヒ前進中ナルモ 第二兵団ハ許浦鎮ニ向ヒ敵ヲ攻撃シ西方ニ進出中ニテ 尔余ノ兵団ハ今日以後一聯隊位ノ揚陸効程ニ過キス

第九師団ハ第六師団ノ右翼ニ進出シ共ニ崑山西方ノ殘留セル敵ヲ攻撃ス

第十軍ハ依然嘉興ノ攻撃ヲ準備中ナルモ 重砲兵ノ到着ヲ俟テ攻撃ヲ実行スル予定ニテ早クモ兩三日ノ後トナラン

予ハ此日上海方面軍司令部ニ帰還シ右ノ区処ヲナスト共ニ 東京ヨリ来レル影佐大佐、柴山大佐ニ軍今後ノ方針、南京攻略ノ必要ヲ説キ 更ニ方面軍特務機關ノ拡張ニ関スル意見ヲ陳ス 大体其諒解ヲ得タリ

◇十一月十六日

派遣軍方面

一、重藤支隊、第十三師団ハ常熟及其北方地区ノ敵陣地ニ漸次接近シテ攻撃ヲ開始ス

第十六師団ハ漸次上陸スル部隊ヲシテ太倉―常熟道ニ沿ヒ攻撃ヲ開始スルモ 其戦列部隊全

部ノ之ニ参加スルハ尚一兩日ノ後トナルヘシ

第九師団ハ崑山―蘇州道ヲ前進シ此日揚家巷附近ノ敵陣地前ニ進出ス

第十一師団は支塘鎮及其西方地区ニ兵力ヲ集結ス

軍砲兵ハ逐次支塘鎮ニ向ヒ追撃ニ前進中

二、第十軍方面

十一月十四日 中支那方面軍、蘇州―嘉興の線に向かい追撃を始め（19日、この線に進出）

十一月十六日 中国国民政府、重慶遷都を宣言

影佐 禎昭 26期

（参謀本部謀略課長）

柴山 兼四郎 24期

（陸軍省軍務局軍務課長）

〈上海派遣軍司令部訪問〉

*

井本 熊男 37期 『作戦日誌で綴る支那事变』（芙蓉書房）より

*

河辺虎四郎 24期 作戦課長は十一月十七日、上海に連絡のため出張、井本作戦課々員は、これに随行した。

*

翌十一月十八日、上海派遣軍司令部を訪う。大場鎮南方約一キロ、周宅という部落にあった。方面軍司令部の連絡間、受けた印象は、派遣軍司令部は長期の苦しい陣地戦と取り組んだため、かなり気分が沈滞しているらしいことであつた。實際訪れてみると、それは予想をはるかに上まわるものであつた。

河辺大佐は挨拶して来意を告げたが、飯沼参謀長以下六、七名の参謀は、一団となつて話をしつゝ全員ほとんど見向きもしない。それでいて参謀間の話は、来訪者

此日第六師団ハ第十軍司令官ノ隷下ニ復帰セシムヘク命令ヲ与ヘ 同師団ハ明後十八日ヨリ青浦ヲ経テ軍主力方面ニ復帰スル筈

第十八、第百十四師団ハ漸次到着スル上陸部隊ヲ併セ嘉興攻撃ヲ準備中
第六師団ノ歩兵一大隊ヲ基幹トスル部隊ハ平望ヲ占領シ一部ヲ以テ蘇州及湖州方面ニ前進ス

◇十一月十七日（雨）

派遣軍、第十軍方面共ニ大ナル変化ナク折悪ク天候不良ノ為メ攻撃共ニ進捗セズ 殊ニ常熟附近ノ敵陣地ハ相当堅固ナルベトン製既設陣地ニヨリ 守兵ハ常熟―福山間約三師団ニ過キサル如キモ攻撃意ノ如ク進捗セサルヲ虞フ

此日朝十時 英海軍長官リットル大將及陸軍司令官スモウレット少將ヲ旗艦ニ答訪ス
長官以下儀礼ヲ整ヘ頗ル鄭重ニ予ヲ迎フ言動極メテ慇懃ナリ 仍テ予モ前日ノ態度ヲ緩和シ努メテ平和的ニ応対シ 先ツ蘇州河ノ開放ニ関スル英軍ノ協力ヲ謝シ 尚軍力上海附近ノ戦闘ニ関シ極メテ列国軍并其權益ニ損害ナカラシムル様努力シ 自ラ豊田紡績始メ多数ノ日本權益ヲ犠牲ニシテ惜マサリ予ノ苦衷ヲ陳ヘタリシニ 彼等モ相当善意ト敬意ヲ以テ之ヲ聴キ速ニ英國政府ニ之ヲ報告スヘシト述ヘタリ

仍テ最後ニ予ハ兩國政府ノ政策如何ニ係ラス現地ニアル我等軍人ハ 東洋平和ノ為メ努メテ平和友好的ニ言動スヘキ予ノ意中ヲ述ヘ 彼ハ繰返シ英軍力日本軍作戦ヲ妨害セサル意ナルコトヲ述ヘ 撮影ヲ共ニシ平和ニ帰來セリ

此日伊藤公使ヲ司令部ニ召致シ 今後上海租界ノ措置ニ関スル予ノ意中ヲ伝ヘタルニ 彼ハ全然予ノ意見ニ同意シ 今後外務當局ヲ督励シテ予ノ希望ヲ達スル様努力スヘキヲ約シ 尚我海軍ニ対シテモ一般國際情勢ヨリ觀察シテ 敢テ英米列國ニ深ク氣兼スルコトナク現下ノ作戦時力我ノ有利ナル情勢ヲ利用シテ言動シ 今後共同租界ハ勿論他國租界ニ於テモ 努メテ支那政府ハ勿論 支那人其他ノ排日行動ヲ取締ラシメ 支那政府ヲシテ最早上海ノ列國權（益）

ヲ利用スル所謂歐米依存、排日戰続行ノ意志ヲ拋棄セシムルニ至ラシムル様 諸般ノ態度ヲ嚴正明確ニスルノ要ヲ自覺セシムル様 説得方依頼シ彼ハ喜テ之ニ当ルヘキヲ約シ歸ル

伊藤述吏公使ノ意見ハ全然予ノモノト全ク積極的ニシテ 流石ニ多年欧州外交場裡ニ働キタル 海千山千ナルヲ思ヒ欣懷ノ至リ 將來之ニ依テ外ム、海軍側ノ軟弱態度ヲ指導引廻スニ便ナルコト幸ナリ（欄外）

參謀本部川辺大佐情況視察ノ為來着セリ 仍テ先ツ大体今後ノ作戦ニ関スル予ノ意嚮ヲ告ケ尚詳細実地ヲ検分シ広ク各方面ノ意見ヲ聴取シテ自己ノ觀察ヲ遂クヘキヲ告ク

◇十一月十八日（曇又小雨）

此日久振ニ派遣軍司令部ニ至リ諸般ノ報告ヲ聞ク 即
一、常熟附近ノ敵陣地攻撃ハ思フ様ニ進捗セズ 今後共此陣地ノ正面力攻ハ相当困難アルヘキヲ聞ク

二、仍テ昨日既ニ第十一師団ニ命シ 成シ得レハ民船ヲ利用シテ有力ナル一部隊ヲ以テ崑城湖ヲ渡リ 常熟南方地区ニ上陸シテ敵ノ背後ヲ攻撃セシムヘク研究セシメ置キシカ 常二師団ハ其所有渡河材料一部ノ支那民船ヲ利用シ 花谷大佐ノ指揮スル歩兵二大、砲一中隊ヲ以テ明日タヨリ水路ニ依リ常熟南方約二里莫城鎮附近ニ進出スヘキ旨ノ報告アリ 此実行果シテ可能ナレハ常熟附近ノ攻略ヲ大ニ容易ナラシムヘシト欣フ

三、軍ノ追撃ニ伴ヒ補給ハ蘇州河、瀏河及白茆河又ハ潞浦河ヲ利用シ 主トシテ水運ニ依リ一部ノ陸路輸送ト相俟テ概ネ其目的ヲ達成スヘキ見込ナルヲ知ル 最モ米ハ太倉其他所在ノ地ニ相当多量現存セルヲ以テ一時糧食ノ補給ヲ欠クモ糧秣ハ心配スルヲ要セス

四、第九師団ハ此日楊家巷、唯亭鎮附近ノ敵ノ小抵抗ヲ突破シ 陸涇橋附近ノ敵陣ニ近ク進出スルヲ得タリ

第十軍ノ情勢大ナル変化ナシ 第六師団ハ本朝崑山附近ヲ出發シ青浦ニ向ヒ 後水路ニヨリ

（河辺）に聞かせるのが目的であるらしい。

參謀部との触接

西原大佐「重藤支隊は、正面の敵陣地はトーチカを築き堅固で抜くことができないという。こんな意見具申をよこした『軍は第十一師団を以て、福山上流に上陸作戦を遂行せられることが必要である。そうしなければ、正面堅固で抜けない。もし右の作戦を実行せられるならば、当支隊に配属してある軍直部隊は引き抜かれても支障はない』こんな状況であるから、とても戦況は進捗しない。道路を修理して重砲を持って行かねば駄目である」

飯沼參謀長、上村大佐「ウン、ウン」

西原「とにかく敵が陣地を構築している以上、ただで抜くことはできない。どうしても重砲が必要である。特にわが追撃はここ数日渋滞しているので、敵は陣容を立て直したのであろう」
飯沼參謀長、上村大佐ともに西原大佐とは若干見方が違うようであるが、黙している。他の參謀も発言者なし。
飯沼「しかしそれ程頑強ではない

かも知れぬ」

西原「いや、とてもいかぬ」

以上のような内輪話約二十分間。この間河辺大佐は立往生していた。

河辺「何か承ることはありませんか。小言でも何でも」

西原「指示の線（蘇州―嘉興）に止れば何等問題はないが、さらに主力を以て進出するならば、後方に無理がある。ただし江陰・無錫の線ならばこのままで何とか出来ることはできる。最も悲鳴をあげているのは後方である。進出するならば兵站監部を作ることが必要である。現在櫛田少佐が一人で後方を切り盛りしている状態である。今日の情勢においては、無錫にひっかかる公算が相当大きいので、蘇州南北の線から著しく出ることには困難である。ただし目の上の瘤である無錫東方の高地には、爪をかけておかねばならぬ」
飯沼「軍から兵力を抽出する考えがあるか」
河辺「一段落したらその運びとなるであろう」

飯沼「瓦斯の使用を許可せよ。南京はとってしまつてはどうか」（真面目な発言とは受け取れない）

松江ヨリ平望ニ向ヒ進出スル筈ナリ

◇十一月十九日（曇）

常熟、蘇州、嘉興占領（欄外）

一、派遣軍ノ情況

1. 重藤支隊、第十三師団ハ共ニ常熟北方敵陣地線ヲ突破シ芦山及其北方地区ニ進出シ 又第十一師団ノ花谷支隊ハ予定ヲ一日繰上ケ今朝莫城鎮附近ニ水路進出シテ常熟南灣ニ向ヒ攻撃ヲ開始セリ 此クテ本夜中ニハ第十六師団ノ正面攻撃ト相俟テ常熟ヲ占領スルコトナラン
2. 第九師団ハ依然蘇州道上ヨリ蘇州ヲ攻撃中
3. 第三、第一百師団ハ一時方面軍ノ直轄トセシ処 第三師団（片山支隊ヲ欠ク）ヲ派遣軍ニ復帰セシメ太倉東方地区ノ清掃ニ当ラシメ 又第一百師団ハ嘉定、羅店鎮以南ノ地区ヲ清掃シツツ其主力ヲ真茹附近ニ集結セシムル如ク区処ス

二、第十軍ノ情況

第十八師団及第四百十四師団ノ主力ハ 重砲兵旅団ノ來着ヲ以テ昨朝ヨリ嘉興ヲ攻撃シ遂ニ之ヲ占領シ 一部ヲ以テ西方ニ敵ヲ追撃中

三、第六師（團）ノ一部隊及国崎支隊ハ平望ヨリ西方ニ前進シ 本日南潯鎮ヲ占領ス

又第四百十四師団ノ一部ハ平湖ヲ攻撃中

第六師団ハ松江ニ集結中

此日伊太利大使ノ來訪ヲ受ク 別段ノ意ハナク唯我軍ニ好意ノ態度ヲ示シ 將來上海附近ニ於ケル伊國ノ權益獲得ニ資セン為メノ挨拶ナリ

大体当地伊國文武官ノ態度ハ 独乙ニ比シ大ニ明快徹底的ニ我ニ好意ヲ表シオリ 大使ノ南京政府ニ関スル觀察モ大体公正ナリト見受ケタリ

◇十一月二十日（曇）

昨夜半方面軍ハ嘉興、常熟ノ占領ノ下ニ大要左ノ要旨ノ命令ヲ兩軍ニ与フ

一、軍ハ依然蘇州、嘉興ノ線ヲ保持スルト共ニ無錫、湖州ノ占領ヲ企図ス

二、派遣軍ハ常熟、蘇州占領後概ネ蘇州西北方「望平」附近ヨリ 常熟西方揚尖鎮ヨリ其北方陳野鎮、及其西北方華野鎮ノ線ニ進出シ無錫攻撃準備

三、第十軍ハ一部ヲ以テ湖州及吳江ヲ占領シ 尚有力ナル部隊ヲ以テ爾後ノ水上機動ヲ準備一、派遣軍ノ情況

常熟方面各師団ハ敵ヲ追撃シテ右翼ヨリ田庄鎮（第十三）大義橋（重藤支隊）白墓頭（第十六）附近ニ進出セルモ道路ノ不良ト補給ノ困難ニヨリ爾後追撃進捗セス

第十一師団ハ更ニ天谷少將ノ指揮スル歩兵一聯隊ヲ基幹トスル部隊ヲ水路崑城湖西側地区ニ進出セシメ 蘇州及無錫方面ニ追撃ヲ準備中

第九師団ハ昨十九日朝（未明）既ニ其一部ヲ以テ蘇州停車場ヲ占領シ 統テ蘇州城内ニ進入シ殘敵ヲ掃蕩シ 本朝ハ師団長自ラ主力ヲ以テ蘇州周辺ニ到着シ主力ヲ同地ニ集結シ 殘敵ヲ掃蕩スルト共ニ一部（歩兵一聯ヲ基幹トス）ヲ以テ無錫方向ニ敵ヲ追撃セシメ 此部隊ハ今夕望亭停車場附近ニ達シ前面ノ敵部隊ト対峙中ナリ

通行不能ノ為メ二十日朝ニ至リ始メテ之ヲ知ル（欄外）

蘇州附近ニ在リシ敵ハ全ク既ニ戦意ヲ喪失シ 一部ハ到處自ラ武装ヲ解除シテ我軍ニ投降シ一部ハ西方ニ向ヒ潰乱退却ス

此クテ常熟、蘇州ノ所謂吳福障地ハ遂ニ予期スル敵ノ抵抗ヲ受クルコトナク之ヲ占領スルヲ得 派遣軍ハ此ニ其本來ノ任務ヲ完全ニ達スルヲ得タルハ欣幸ニ堪ヘス

二、第十軍ノ情況

第六師団ノ一部、国崎支隊ハ依然敵ヲ追撃シテ此夕南潯鎮西方東遷鎮ニ達シ 更ニ第四百十四

西原「上海戦のような作戦では、特設師団は防禦以外には使用できない。第一百師団は蘆藻浜クリークでへこたれてしまった。第十三師団も戦力は似たりよったり。団結、装備。特に団結は最もよくない。」

第一百師団は、一小部落に二万発の射撃をしたことがある。敵が退却しても、突入することができない。たまたま突入しても、逆襲を受ければ逃げて帰った。歩兵第三百三聯隊の某大隊は夜襲の際、大隊長と二、三名が突入したがあとは続かなかつた。突入した時は敵はおらず、大隊長は部下が来ないので煙草を吸っていたところ、そこで逆襲を受けた。部下に促されて元の陣地へ帰る途中、彼我中間地区で戦死した。部下は翌日までそれを知らない有様であつた。戦死者を見ても顔を知らず、隊長も戦友もあつたものではない。困つたものである。」

上村「今少し訓練すれば、多少よくなるであらう」

西原「①、第一回の補充兵は、会戦前に到着していることが必要である。天谷支隊の歩兵第十二聯隊は上陸後十日間に三千四百名が九

百名になった。補充兵はその後長く来ない状況であつた。

②、歩兵が敵の機関銃をどうして制圧するかを考えて、装備をきめる必要がある。砲弾は、いくら撃つても局部には届かない。掩蓋下の機関銃は、三十七ミリの歩兵砲では制圧できない。突入した歩兵が全滅したことは何回あつたかわからない。第三師団の蘇州河渡河攻撃は、機関銃二挺のために阻止されたといつてもよい。

③、飛行機の整備が必要である。陸軍の飛行機はあまり役に立っていない。海軍は、陸軍のパイロットは機関に対する觀念が乏しい、と評している。『陸軍は飛行機を大事にお使いになりますね』と皮肉を云っている。第十一師団は上陸早々飛行機にやられ（下坂参謀等戦死）、その後飛行機に対して極めて敏感となっている。

④、歩砲の協同についていえば、最後の砲弾に続いて突入することは、精銳な常備師団であつた当初は可能であつたが、補充を以て交代した後はできなくなつた。一方砲兵は前線に出ることをいやがる。配属しても協同はなかなかできない。第一線の歩兵聯隊長

師団ヲ之ニ追及セシメ平望鎮附近ニ進出セシム

第十八師団ハ嘉興占領後兵力ヲ集結シ 一部ヲ以テ杭州方向ニ敵ヲ追撃セシム

此ニ於テ方面軍ハ遂ニ此ニ全ク昨日ヲ以テ常熟、蘇州、嘉興ヲ占領シ 軍ノ第一期会戦ヲ此ニ終結スルヲ得タリ 此追撃戦ニ於ケル全軍ノ敵ニ与ヘタル損傷ハ死者少クモ五万 損傷十五万ヲ下ラス 軍旗数旒各種火炮百余門 其他多数ノ軍需品ヲ鹵獲セリ 捕虜ノ数ハ未タ審カナラサルモ一万ヲ下ラサルヘシ

仍テ軍ハ本追撃戦ヲ「湖東会戦」ト命名シ大要報告ヲ参謀総長ニ呈シ 此夕畏クモ方面軍ニ対シ勅語ヲ賜ヒタリ 曰ク

湖東会戦ト命名

此日第十軍参謀長田辺少将来部 委曲第十軍ノ情况ヲ聞ク 蓋シ第十軍ハ当初独立任務ヲ以テ上陸シタル關係上方面軍トノ意志ノ疎通充分ナラス 予ハ之ニ関シ相当ノ苦心ヲ経来リタルカ 今ヤ第十軍モ予ノ意中ヲ知り不少感謝ノ状ニアルヲ知ル 今後軍ノ統制ハ容易トナラン(欄外)

◇十一月二十一日(曇小雨)

連日ノ悪天候ノ為メ兩軍共戦線ノ行動頗ル困難ヲ極メ 後方補給ノ停滯ト相俟テ一般ニ戦況進捗セサルハ已ムヲ得サル所ナリ

然レトモ第十軍ノ湖州占領部隊ハ鋭意前進ヲ繼續シ 此夕其先頭ヲ以テ既ニ湖州東方十余ノ地ニ進出シ 之ニ後続スル第百十四師団モ主力ヲ以テ南潯鎮附近ニ達シタル如シ

派遣軍諸師団ノ状況ハ不明

此日予ハ原田少将ヲシテ共同租界局及仏国租界当局ニ対シ左ノ要旨ノ要求ヲナサシム

一、軍ハ租界当局力租界内ニ於ケル排日侮日及其産主義ノ諸策動ニ対シ充分ナル取締ヲ行フコトヲ要求ス

二、当局ノ処置ニシテ我軍ノ意ニ満タサルモノアル時ハ 軍ハ作戦ノ要求上所要ノ措置ヲ執ルコトアルヘシ

右ニ関シ共同租界当局ハ大要ヲ要求ヲ容レ機宜ノ措置ヲ執ルヘキヲ約シ 仏国租界当局(仏国総領事)ノ態度ハ明瞭ナラス 保留的回答ヲナシタルモ或程度迄ハ軍ノ要求ニ遵フノ已ムナキヲ自覺シタル如シ

仍テ仏国租界ニ対シテハ更ニ我大使館ヨリ仏国大使ニ軍ノ希望ヲ告ケ 機宜ノ措置ヲ講セシムルコトトセリ

尚岡本総領事ヲシテ共同租界ニ対シ前記要求ニ関シ 具体的ニ諸問題ヲ協議セシムルコトトセリ

◇十一月二十二日(晴)

十日振ニ好天ヲ拝シ氣宇清朗譬フルニ物ナシ 恰モ此日 一昨二十日下賜セラレタル勅語ヲ飛行便ニヨリテ携ヘ來ルアリ 午後五時方面軍司令部員一同ヲ会シテ嚴肅ナル捧読式ヲ行ヒ尚之ニ対スル予ノ奉答文ヲ披露ス 感慨胸ニ迫リ筆舌ヲ以テ到底予ノ此日ノ感情ヲ露ス能ハス 勅語ヲ捧読シ聖慮戦死者及フノ御語ニ至リテ予ハ遂ニ涕泣 声ナク之ヲ捧読スル能ハサリシハ 老ノ身ノ不少感傷の二陷リシ感ナキニハアラサレト亦予ノ胸中何トシテモ包ミ得サル至誠赤心ノ発露ナリ 聞ク司令部員如何ニ之ヲ感得セシヤヲ知ラス

兩軍戦況大ナル変化ナシ 漸次無錫、湖州ノ(二)肉迫シタルモ未タ之ヲ奪取スルニ至ラス 兩軍ノ補給ハ連日ノ追撃前進ニ伴ハス已ムナク飛行機ヲ以テ空中ヨリ糧食彈藥ヲ投下シ 其急ヲ救フノ状ナリシカ 今日ノ晴天御蔭シ今後逐日其状勢ヲ恢復スルコトヲ得ン

軍司令官ノ意見具申(欄外)*

此日 軍今後ノ作戦ニ関スル予ノ意見ヲ参謀総長ニ具申ス 其要領既ニ先日参謀本部、陸軍省ノ派遣員ニ述ヘタル所ノモノニ同シ 要ハ速ニ軍容ヲ整ヘ十二月中旬以降南京ニ向フ攻撃ヲ

が出ると命令しても従わない。むしろ、よくわかった砲兵隊長の指揮する部隊を協力関係とし、砲兵隊長が積極的に進出を命ずるようにした方がよい。

第一線歩兵隊長も配属を欲しないものが多い。

特例として、第三師団の歩兵第六十八聯隊と、野砲兵第三聯隊の某大隊は協同が模範的によく行っている。

⑤、一會戦の弾数は、増加する必要がある。第百一師団は第三師団と交代後、蘆藻浜クリークに出るまでに、一會戦分の弾薬を消費した。弾丸がなくては、大砲がいくらあっても役に立たぬ。第三師団は一時百二十門の砲兵の協力を受けたが、弾薬が不足していたため戦闘は進捗しなかった。

⑥、糧食はハイカラのものはいらぬ。第一線に必要な給養が行きわたることが先決である。疲労回復素など、配給しても意味をなさない。

⑦、手榴弾の曳火時間七秒半は長すぎる。着発は発火しないものが多い。第一線小隊長でこれを憤慨して、軍司令部にどなりこんだ者がいた。手榴弾では支那に負け

た感がある。

⑧、隊長によって部隊の強弱が分かれることは、平素から原則的にいわれているが、實際戦をやってみて、その事実が深刻にわかった。曲折凸凹のある我戦線で、突出部は常に隊長の優れた同一部隊で成形されている。こんな部隊は、文句を絶対に云わない。」

『下村定中将回想答録』

昭和十四年(参謀本部作製)

南京追撃について

さうかうして居る中に二十日にありますと第十軍から斯ういふ電報が来ました。

「一、集団(第十軍)ハ本日正午頃嘉興ヲ占領シタ刻略々掃蕩ヲ完了ス

二、集団ハ十九日朝全力ヲ以テ南京ニ向ツテスル追撃ヲ命令シ概ネ左ノ如ク部署セリ

國崎部隊ハ湖州、広徳ヲ経テ蕪湖ニ向ヒ追撃シ敵ノ退路ヲ遮断ス

第十八師団ハ湖州、広徳、句

開始セントスルニ在リテ 遅クモ二ヶ月以内ニ其目的ヲ達成シ得ルノ見込ナルコトオ附言セリ

◇十一月二十三日(曇)

昨日一日ノ快晴ニ今日ハ早ヤ曇天トナリ 今後ノ天候ヲ危ムモ幸ニ風西北ナレハ間モナク妖雲ヲ払拭スルコトヲ得ン

此日派遣軍司令部ニ至リ 昨日同様ノ勅語捧読式ヲ行ヒ奉答文ヲ読聞カセ 更ニ一同会食シテ 大元帥陛下ノ万歳ヲ三唱セリ 尚此機会ニ於テ予ノ上陸以來ノ感想ヲ述ヘ一同ニ対シ三月間ノ勤勞ヲ感謝シ 今後更ニ將兵一同皇道ノ精神ニ精進シテ出兵ノ最後目的ヲ達成スルニ勉ムルノ緊要ナルヲ訓示セリ 尚明日速ニ全派遣軍ニ対スル訓示ヲ与フヘク其起案ヲ命セリ 派遣軍、第十軍ノ無錫、湖州攻撃ハ漸次ニ進捗シアルモ 無錫ノ陣地ハ敵軍尚容易ニ之ヲ放棄セサルモノノ如ク 今後之ヲ奪取スル為メニハ勉メテ第九師團ノ太湖ヲ利用スル水路機動等ニヨリ正面ニ於ケル力攻ヲ避クヘキヲ可ナリトシ 今後ノ戦況ニ応シ可然措置スヘキヲ命ス

◇十一月二十四日(晴)

第十軍ハ今朝湖州ヲ占領セリ 湖州ヲ占拠スル敵軍ノ兵力多カラス 一時宜興方面ヨリ増加ノ模様アリシモ我軍ノ爆撃ニ妨ケラレ之ヲ中止シタルモノノ如シ

派遣軍ハ統テ無錫ヲ攻撃中ナリ 此方面亦其後敵ノ抵抗力増大ノ模様ナキヲ以テ近ク無錫モ我軍ノ有ニ帰スヘシト判断セラルルモ尚余リ油断セサルヲ可トセン

仏国陸軍司令官トノ初度会見(欄外)

此日仏国陸軍司令官來訪ス其態度懇懇ナリ 予ハ之ニ対シ上海地方ノ治安ヲ維持スル為メニハ列國軍ノ協力ヲ根本原則トシテ必要ナリト認ムルコト 尚且下南市ニアル我陸軍部隊ノ補給、連絡ノ為メ仏租界バンドノ交通ノ必要ナルヲ述ヘ 仏國官憲力能ク前記ノ精神ニ依リ 之ヲ我軍ニ許容センコトヲ勧告シ 仏軍ニシテ我誠意ヲ解セス飽迄仏國租界ノ特權ヲ主張スルニ

於テハ 南市附近ニ現在スル仏國軍ニ対シテモ我方ノ執ルヘキ手段アリト語り 暗ニ其撤去ヲ諷シテ其反省ヲ促シタルニ 司令官ハ能ク予ノ意ヲ諒シ大使ニ可然進言スヘキヲ約シ去レリ

◇十一月二十五日(晴)

無錫占領(欄外)

一、派遣軍ハ此朝第九、第十一師團ノ一部ヲ以テ無錫ヲ占領シ 第十六師團ノ部隊モ之ニ伴ヒ市内ヲ清掃中ナリトノ報アリ 之ニ因テ江陰要塞ノ背面ハ遂ニ我有ニ帰シ 尔後南京方面ニ対スル作戰ヲ容易ナラシムルヲ得タリ

二、第十軍ハ昨日湖州ヲ占領シタル後第十四師團及国崎支隊ヲ以テ西方ニ敵ヲ追撃シ 湖西方約二ギノ高地ニ在ル敵ヲ統テ攻撃中 其兵力多カラス

此日蕪湖方面ヨリ広徳ニ向ヒ敵軍約一万鉄道ニ依リ東進シ来ルヲ知り我陸海飛行機ヲ以テ之ヲ爆撃ス

参謀本部決定ノ不明瞭(欄外)

此日参謀総長ヨリ伝宣電アリ 豫テ方面軍ノ作戰区域ヲ蘇州—嘉興ノ線ニ制限セラレタルヲ解除ストノ意ナリ 尚次長ヨリ参謀長宛電ニ依レハ 軍ハ依然蘇州—嘉興附近ノ線ニ在リテ一部ヲ以テ無錫(或ハ其西方若干地域)湖州ノ線ヲ占領スルモ 尔後更ニ西方ニ作戰ヲ拡大セシメサル中央部ノ意嚮ナルヲ告ケ 又十二月上旬迄ニ重藤支隊及第十一或ハ第十八師團ヲ他ニ転用スルノ予定ナル旨通シ来ル 其意明瞭ナラサルモ 中央部ハ尚南京ニ向フ作戰ヲ決定シアラサルコトハ明瞭ニシテ 其因循姑息誠ニ不可思議ナリ 而カモ豫テ申入レアル軍特務機關ノ拡大ニ付キテハ 何等指示スル処ナシ 其真意何レニ在ルヤ了解シ能ハサル処ナリ 仍テ更ニ此旨参謀長ヨリ次長宛督促セシムルコトトス

再度外交及海軍側ノ上海善後措置ニ対スル態度ヲ激励ス(欄外)

此朝大使館参事官 岡本総領事、海軍代表者ヲ集メ 上海共同租界及仏租界ニ関スル交渉ノ

容ヲ経テ南京ニ追撃

第六師團ハ先ヅ湖州ニ前進

漂陽ヲ経テ南京ニ追撃

要するに南京に向つて手広く追撃するとの報告でありことは中央として未だ考へて居ないのでありますから、(多田)次長も非常に驚かれて「之は直ぐに止めさせなくちゃ不可ん。作戰指導も之では不可ぬ」と言はれました。併し私共の考へでは「第十軍が斯ういふことを言つて居つても方面軍は中央の意図に非常に忠実にやつて居るのであるから当然方面軍が第十軍に対して処置するであらう。それを中央が指示すると云ふやうなことはよくない」と云ふことをお答へしたのであります。が、「兎に角之は急を要するから是非止めさせて呉れ」と再三云はれるので私共も遂に之に負けて電報を打ちました。之は機密作戰日誌にもあると思ひますが、それで方面軍参謀長(塚田攻)より次のやうな電報が二十一日午後三時に参りました。「丁集團ニ対シテハ方面軍トシテ直チニ実行ヲ差止メタリ 尚丁集團参謀長(田邊盛武)ヲ招致シ爾後ノコトニ関シ打合

セヲ為スヘク処置セリ」

右に依つても解りますやうに此の時では方面軍でも南京と云ふ考へは未だ持つて居なかつたのであります。

所が其の中に中支方面軍からも南京追撃を行ふを寧ろ有利とするの意見が(十一月二十二日)、又第十軍からも其の内容は略しますが非常に勢ひのよい電報が来て居ります。斯う云ふ風でありますから兎に角止めると言つて参りましたけれども、第十軍はどんどん行くやうな勢ひでありますので次長は更に心配せられて「之はどうしても止めなければ大変だ」と何度もしめるように督促をされました。そして更に「止める」と云ふことが出来なければ之をもう少し後へ退げるやうにしたらどうだ」といふお話でございましたが、私は「(河辺作戰)課長も折角状況を見に行つたのですしもう直ぐ帰るだらうと思ひますから」と言つて一晩延ばして延ばして居りますと二、三日遅れて河辺大佐が帰つて参りましたので——そこで慎重審議し色々研究の結果、従来の作戰地域——蘇州、嘉興の線を廃止するといふことの御指示が総長殿下から出ましたが、之でも次長は

經過ヲ聞ク 各租界共漸次排日分子ノ清掃、新聞ノ発行停止等多少共我方ノ申入ヲ実行シツツアル如キモ 未タ其誠意ノ見ルヘキモノナク 其実行モ甚タ不満足ナルヲ以テ更ニ我外交官憲ヲ督促シ 一層有効的手段ヲ執ルヘキヲ要求スルト共ニ 要スレハ軍兵力ヲ以テ税関ヲ占領スルハ勿論 共同租界ニ示威的行軍ヲ行フ等ノ準備アルコトヲ告ケ之ヲ激励ス 尚外ム省ヨリハ概ネ予ノ從來ノ措置ニ異存ナキ旨電示来レル由ナルモ 尚國際關係ヲ過度ニ配慮シアルノ状アリ

上海居留民會長以下居留民代表者十余名慰問トシテ来訪ス 依テ予ハ從來軍ノ作戰ニ対スル居留民ノ協力ヲ謝スルト共ニ今後上海方面ニ於ケル我國策ノ遂行ニハ 居留民一同一時的自己ノ權益等ヲ犠牲ニシテ軍ノ行動ニ協力スルノ覚悟アルヲ要スル旨ヲ告ケ 一同ヲ戒飭シ置ケリ 派遣軍司令部ハ此日戰鬪司令処ヲ常熟ニ前進セシムルモ 予ハ今後ノ方針ヲ委曲參謀長ニ示シ 可然善処スルヲ命シ 方面軍司令部ニ止ル 蓋シ目下上海ノ善後措置等國際關係諸問題等ヲ処理スル為メ上海ヲ離レ難ケレハナリ

此日皇太后陛下ヨリ軍ニ綢帶下賜ノ恩命アリ 感泣ス(欄外)

◇十一月二十六日(晴)

仏國海軍長官及總領事トノ會見(欄外)

仏國海軍長官上海總領事来訪ス 其意ハ予ニ挨拶ヲ為スト共ニ今後仏租界ニ対スル我軍ノ行動ニ付穩便ナル態度ヲ希望スルノ意ナリ 仍テ予ハ仏國軍力其租界特ニ南市ノ治安維持ノ為メニハ 日本軍ト協同スルノ必要ヲ述ヘ 之カ為メ南市ニアル我軍ノ補給連絡ノ為メ 仏國租界ノ一部タル河岸ヲ我軍ノ交通ニ使用セシムルコトヲ希望シタルモ 彼等ハ大体ニ於テ我軍トノ協力ニハ勿論異議ナキモ 武装軍人ノ仏租界通過ニハ條約ト仏國ノ權益上承認シ難キヲ述ヘタルニ依リ 予ハ然ラハ南市ニアル仏國軍隊ノ措置等ニ関シテ當方トシテモ考慮セサル可ラサル旨ヲ告ケ 之ヲ威嚇シ置クト共ニ租界内支那國家銀行ノ封鎖ヲ希望シタルニ 彼ハ辞ヲ設ケテ

仲々安心されなかつたのであります。(竹田宮恒徳王大尉と対談)

十一月二十四日 唐生智、南京衛戍司令長官に任命される。

*「日記」十一月二十五日の項「其意明瞭ナラサルモ」について「とくに戦争指導班の発議により新たに第五軍を編成し、南支に作戦し、早期に戦局を收拾しようとしたが、のちバネー号事件等國際問題が起つたため、海軍から異議が出、急に取り止めとなった。」

◇十一月二十七日(鐵道聯隊の項)

鐵道第一聯隊長・工兵大佐

佐藤 實^{22期}

内地から貨物用九六〇〇型機關車二十五台をはじめ貨客車六百台、技術者八十名を急派した。(『華中鐵道沿革史』による) 日記中「内地ニ」は誤記と思われる。

勅語

上海方面ニ作戰セル軍ノ將兵ハ克ク海軍ト協力シ障礙ト抵抗トヲ擠排シテ敵前上陸ヲ敢行シ交錯セル深淺連続セル堅壁ノ間ニ勇奮激闘果敢力ヲ奮力敵ノ大軍ヲ撃破シ以テ皇威ヲ中外ニ宣揚セリ朕深ク其ノ忠烈ヲ嘉ニス其ノ敵彈ニ墮レ病瘡ニ仆レタル者ニ思ヒ及ヘハ惻愴殊ニ深シ

惟フニ派兵ノ目的ヲ達シ東洋長久ノ平和ヲ確立セムコト前途尙遠速ナリ爾等益々志氣ヲ淬厲シ艱難ヲ克服シ以テ朕ノ信倚ニ対ヘヨ

奉答文

中支那方面ニ於ケル作戰ノ成功ハ偏ニ御稜威ノ然ラシムル所ナリ今図ラスモ將兵ノ忠勇ヲ嘉賞セラレ優渥ナル

勅語ヲ辱ウス是ニ感激恐懼ニ堪ヘサル所特ニ戰歿傷病者ニ対スル聖慮ヲ拝シ感泣措ク所ヲ知ラス臣等益々奮發淬厲畏ミテ

聖旨ヲ奉体シ誓テ前途ノ万難ヲ克服シテ皇軍ノ威武ヲ顯揚シ以テ宸襟ヲ安ンシ奉ラムコトヲ期ス右謹ミテ奉答ス

昭和十二年十一月二十二日 中支那方面軍司令官 陸軍大將 松井石根

之ヲ実行スルノ誠意ヲ欠クヲ以テ 委曲更ニ原田少將及岡本總領事トノ間ニ之レカ善後手段ヲ協議決定スヘキヲ希望シ一ト先ツ穩便ニ會見ヲ終ル

大阪住友支店長代理来訪シ 軍慰問トシテ金五万円ヲ寄送ス 仍テ予ハ之ヲ謝スルト共ニ今後ニ於ケル國民ノ犠牲的精神ヲ發揚スルノ要アルヲ説キ 相当感激シテ帰レリ(欄外)

一、派遣軍方面

第十六師團ノ一部ハ常州ニ向ヒ追撃シ 又第九師團ノ約一聯隊ハ蘇州ヨリ地方民船ニヨリ大湖ヲ渡リテ無錫西南方約十里ノ沙塘港附近ニ上陸 無錫―宜興道ヲ遮斷ス

二、第十軍方面

第十六師團ヲ以テ長興附近ヲ國崎支隊ヲ以テ其南方広徳道ヲ広徳ニ向ヒ追撃中 第十八、第十六師團モ逐次湖州ニ向ヒ集結中ナリ

◇十一月二十七日(曇)

派遣軍方面

第十六師團ノ一部ハ常州東方約四里ノ線ニ 第十三師團ハ江陰南方約四^キノ線ニ進出ス

第十一師團、重藤支隊及第九師團ノ主力ハ無錫附近ニ於イテ集結中

第九師團渡湖部隊ノ狀況不審

一、第十軍方面

第十六師團ハ主力ヲ以テ長興附近ニ一部ヲ以テ宜興ニ向ヒ敵ヲ追撃シ

第十八師團ノ一部ハ國崎支隊ニ合シ広徳ニ向ヒ敵ヲ追撃中

第六師團ハ逐次湖州ニ向ヒ集結ス

兩軍ノ後方補給ハ軍ノ追撃ニ伴ハス 一時困難ノ狀態ニアリシカ 天候ノ恢復ト地方舟楫ノ整備ニヨリ漸次ニ補給力ヲ増加シツツアリ 此処旬日ノ間ニハ概ネ兩軍共ニ補給ノ整正ヲ得ルニ至ルヘシ 殊ニ鐵道聯隊(二大隊)昨日其先頭ヲ以テ到着シ 差当リ蘇州、嘉興、平望ヲ目

途トシ鐵路ノ補修、材料ノ蒐集ニ勉メ 尚内地ニ輸送スヘキ運轉材料（機關車約二十輛、貨車二百輛）ヲ以テ輸送ヲ開始スル見込ニテ遅クモ是亦來十二月上旬中ニハ其運輸ヲ開始スヘキ見込ナリ

此日菅野長知ヲ招キ今後ノ謀略ニ付所要ノ注意ヲ与ヘ陳中孚等ノ活動ヲ督励ス

徳川侯、井上清純子爵ヲ招キ内地各方面ノ鞭撻ヲ依頼シ左ノ二詩ヲ贈ル（欄外）

一、湖東戦局直後

梟敵運生日漸窮 旌旗高耀湖東空

休論世俗糊塗策 不拔南京皇道愴

二、勅語拝受即吟

湖東戦局日漸収 聖慮昭々人未酬

遥望妖氛西又北 何時皇道洽亜洲

◇十一月二十八日（晴）

一、派遣軍ノ状況

第十六師団ノ追撃隊ハ近ク常州市街ニ迫ル

第十三師団ノ部隊モ江陰要塞ノ背後ニ逼迫ス

二、第十軍ノ状況

第四百十四師団ノ部隊ハ宜興ヲ占領ス

其他兩軍戦況大ナル変化ナシ

上海租界ニ於ケル工作漸次進展シ 此日共同租界ニアル支那政府ノ電報局、新聞検査所、及

税関等ヲ我官憲ノ手ニテ接收シ又市政府埠頭オモ接收ス

銀行ハ殆ト閉鎖状態ニアルモ之レカ接收取扱ニハ尚幾多ノ手数ヲ要スルヲ以テ漸次之ヲ具体化スルコトトス

侍従武官御差遣（欄外）

此日侍従武官司令部御慰問 優渥ナル聖旨令旨ヲ賜ヒ 又皇后陛下ヨリ特ニ御手製ノ毛糸襪巻ヲ賜フ洵ニ恐懼感激ノ極ナリ 謹テ奉答托奏并言上方侍従武官ニ言上ス 又一般隷下ニ右聖旨及令旨ヲ伝達ス

参謀本部ヨリ南京攻略決定ノ報アリ（欄外）

参謀本部ヨリ南京攻略ニ決定セル旨次長電アリ 是レニテ過日來予ノ熱烈ナル意見具申モ奏功シ欣懷此上ナシ 其後兩軍ノ後方連絡線ノ整齊漸ク順調ニ向ヒツツアレハ 命令一下遅クモ來十二月五日頃ヨリ全軍ノ進撃ヲ命スルヲ得ン

岡田尚ヲ招致シ支那人謀略ニ付注意ヲ与フ

◇十一月二十九日（晴）

一、派遣軍ノ状況

此日正午第十六師団ハ完全ニ常州ヲ占領シ市内ヲ掃蕩ス

又第十三師団モ江陰要塞ヲ占領ストノ報アルモ実況不審

二、第十軍ノ状況変化ナシ

此日原田少將ヲ招致シ 上海善後措置及今後ノ謀略ニ付キ予ノ希望ヲ告ケ 督励ス

又同盟通信ノ松本ヲ召致シ西洋人、支那人ニ対スル側面的工作ヲ指示ス

諸情報ニ依レハ常州、宜興ノ線ニ在リシ敵ハ西（後）方ニ退却シ 又一部ハ広徳、寧徳附近

ヨリ杭州方面ニ退却中ナリ 即敵軍ハ大体ニ南京東方山地線ニ防禦線ヲ退ケ 又浙江方面ニ於

テモ浙江杭州西方山地線ニ防禦線ヲ退ケタルカ如ク 鎮江、江陰附近ニハ多数ノ民船蒐集シア

リテ適時江北地方ニ退却ヲ準備スルモノノ如シ

又江蘇省政府ハ顧祝同 新二任命セラレ江北（徐州附近カ）ニ其位地ヲ退避シツツアルカ如

シ

中方参電第一六七号

中支那方面今後ノ作戰ニ関スル意見具申 十一月二十二日

判 決

「中支那方面軍ハ事變解決ヲ速カナラシムル為現在ノ敵ノ趨勢ニ乗シ南京ヲ攻略スルヲ要ス」

理由

一、南京政府ハ湖東会戦ノ大敗ニヨリ既ニ遷都ノ舉ニ出テ僅ニ統帥機關ノミ殘置シアル状況ニシテ其ノ第一線部隊ノ戦力ハ著シク喪失シ今や敵ノ抵抗ハ各陣地共極メテ微弱ニシテ飽迄南京ヲ確保セントスル意図ヲ認め難シ

此ノ際蘇州、嘉興ノ線ニ軍ヲ留ムル時ハ戦機ヲ逸スルノミナラス敵ヲシテ其ノ志氣ヲ回復セシメ戦力ノ再整備ヲ促ス結果トナリ戦争意志ヲ徹底的ニ挫折セシムルコト困難トナル懼アリ

從ツテ事變解決ハ益々延引スルニ至ルヘク為ニ内地ニ於テ国民モ亦軍ノ作戰意図ヲ諒得セス国論統一害スル惧アリ之カ為ニハ現下ノ情勢ヲ利用シ南京ヲ攻略シ中支方面ニ明瞭ナル作戰ノ終末ヲ結フヲ可トス

二、事變ヲ速カニ解決スル為ニハ西南方面若クハ山東方面ノ新作戦

固ヨリ考案セラルル所ニシテ之等作戰ノ支那政府ニ与フル影響ハ何レモ相当価値アルモ首都南京ヲ攻略シ其ノ心臓ニ迫ルモノニ比スレハ遙カニ第二義のナリ

我力軍ハ此際中支那方面ニ於ケル現在ノ戦況進展ニ乗シ一意湖南作戰ヲ継続シ速カニ南京ヲ攻略スルト共ニ一部ヲ以テ揚子江左岸ニ於テ津浦鉄道ヲ遮断スルヲ得ハ山東、湖北地方ハ自然の解決ヲ望ミ得ヘシ

三、南京攻略ノ為ニハ現ニ方面軍ノ有スル兵力（若干部隊ヲ抽出セラルルモ可ナリ）ヲ以テ十分ニシテ且鉄道、水路ヲ利用セハ後方ノ状態モ何等懸念スル所ナシ 又敵ノ抵抗ハ無錫及湖州ヲ失ヒタル後ニ於テハ地形ノ關係ト平時施設ノ状態ヨリ觀察シ大ナル犠牲ヲ払フコトナク遅クモ二月以内ニ目的ヲ達成シ得ル見込ナリ

第十軍ハ新鋭ノ氣溢レアルヲ以テ後方成立次第二躍進ヲ続ケ得ヘク又上海派遣軍ハ連戦ノ疲勞稍大ナルモノアリト雖モ旬日ノ休養ヲ与フルコトニヨリ戦力ヲ回復シ軍隊ノ整頓ヲ完了シ得ヘク南京ニ向フ追撃ハ可能ナリト判断シアリ但此際專任ノ派遣軍司令官ヲ任命セラルルコト必要ナリト思惟ス

浙江省主席へ黄欽雄新任セラルルモ其政府ノ位地等ハ未審

上海ニアリシ宋子文ハ「マニラ」ニ杜月笙等ハ香港ニ遁避セシトノ報アルモ確カナラス又浦東附近ニハ既ニ小數ナル親日委員会成立シ漸次我軍ニ接近シ来リツツアリ又周作民ハ漢口ヨリ広東ヲ経テ吳震脩モ同様上海仏租界ニ帰来セリトノ報アリ漸次是等ノ連中モ上海ニ集リ来ラン

◇十一月三十日（晴）

江陰陥落未成（欄外）

一、派遣軍方面

第十六師団ノ一部隊ハ常州西方約二里ノ点迄敵ヲ追撃ス

第十三師団ノ江陰陥落ノ報ハ誤ニテ近ク江陰市街ニ迫リアリ敵兵現在守備スルモノ不多モ我海軍ノ江陰ニ接近スル艇ニ対シ砲台ヨリ射撃ヲ行ヒタル由明日ハ全部陥落スルナラン

二、第十軍方面

第六師（団）ノ一部、国崎支隊ハ本日広徳ヲ占領セリ

此日方面軍幕僚ヲ集メ南京攻略ニ関スル軍ノ作戰方針ヲ議シ從來ノ計画ヲ補修シ大体十二月上旬ヨリ（五日頃）全軍ノ攻撃前進ヲ開始スルコトニ定ム

此日倫敦タイムスノフレザア及紐育タイムスノ「アベンド」ヲ召致シ予ノ上海占領及其後ニ於ケル態度ヲ説明シ就中上海ニ於ケル列國ノ權益ヲ保護スル為メ予ノ執リタル苦心ノ程ヲ説明セリ彼等能ク予ノ意ヲ諒シ且ツ我軍ノ公正ナル態度ニ付尊敬感謝ノ意ヲ表シ各本國ニ向ヒ委曲通信スヘキヲ約ス

又在日本各國武官ハ戦線視察終了ニ付此夜原田少将ヲシテ之ヲ晚餐ニ招カシメ予モ出席シテ一言ノ挨拶ヲナス一同感激ス情顯著ナリ

◇十二月一日

一、派遣軍ノ状況

第十三師団ハ江陰市街ヲ確實ニ占領シ同砲台ノ占領ヲ準備ス

第十六師団ハ常州ヲ占領シ一部ヲ以テ西方ニ敵ヲ追撃ス

第九師団ノ部隊ハ常州—金壇道ヲ追撃ス

二、第十軍ノ状況

第四百十四師団ノ一部ハ漂陽ニ向ヒ敵ヲ追撃ス

国崎支隊ハ広徳ヲ占領ス更ニ西方ニ敵ヲ追撃ス

第十八師団ハ長興南方地区ニ第六師団主力ハ湖州附近ニ兵力ヲ集結ス

方面軍ノ新戦闘序列ヲ令セラル（欄外）

南京攻略ノ大命降下（欄外）

此日参謀次長着南京攻撃ノ伝宣命令ヲ携へ来ル又此日新ニ中支那方面軍ノ戦闘序列ヲ令セラル

又広東方面ニ作戰スル為メ第十一師団（一旅欠）及重藤支隊ヲ十二月中旬以降同方面ニ転用セラルル筈ナルコトヲ内命ヲ受ク

次長ノ語ル処ニ依レハ中央部ハ未タ十分軍目下ノ謀略及宣撫ノ重要性ヲ認識セス特務部ノ組織ノ拡大及人員ノ整備ニ付決定ヲ与ヘサルハ甚タ遺憾ニ耐ヘス仍テ更ニ方面軍ヨリ具體的意見ヲ上申シ決定ヲ急クノ要アルヲ認ム

◇十二月二日（晴）

一、派遣軍ノ状況

第十三師団ハ完全ニ江陰要塞ヲ占領シ残敵ヲ掃蕩中

松本重治「當時、同盟通信社・中南支総局長。「西安事件」をスクープした中国通として著名であった。

杜月笙「江蘇省上海県の人。字は月笙・秘密結社青幫の首領、蒋介石の後援者。もと上海フランス租界工部の密偵黄金栄の従弟として頭角をあらわし、アヘン売買の総元締である同興公司を経営、上海フランス租界に青幫を組織した。一九二七年の共産党弾圧を助け、三二年上海事変中の上海の秩序維持に裏面で努力した。陸軍空軍總司令部参謀、上海フランス租界工部局中国人委員、同商會連合會會長中歴銀行董事長のほか、多數の会社銀行の重役をかねた。（東京堂人名辞典）

『下村定中将回答答録』

昭和十四年（参謀本部作製）
南京追撃について

下村 さうかうして居る中に方面軍からは南京に行かなければならないと云ふ電報を再三寄こしまして既に夫々其の準備に着手して居りますし、第十軍もさうであります。

すのに、中央では未だ蘇州、嘉興の線で議論して居ると云ふ状況でございまして、私は何とか前進命令に印を捺して貰はねばどうもならんと考へて居る際に前に申した二十四日の御前會議がありました。それで之はどうしても早晩やらなければならぬことだから何とか切つ懸けをつけてやらうと云ふので前に申し上げたやうに上奏原稿以外のことを御前で申し上げました次第であります。

〈註〉下村定作戦部長は御前會議で、「統帥部ト致シマシテハ今後ノ状況如何ニヨリ該方面軍ヲシテ新ナル準備態勢ヲ整ヘ南京其他ヲ攻撃セシムルコトヲモ慮シテ居リマス」と「南京攻略」を示唆する文言を独断追加し「後で多田次長から叱られ」ている。

其の頃からは是非共南京に行くやうに研究しようと思ふ氣持が大分部内に動いて参りました。次長は未だ承知されませんでした。一方出先からは又何度も督促して参りましたので私は日時は憶えて居りませんが方面軍参謀長に第一部長電を以て、「未タ上司ノ御決裁

第十六、第九師団ノ一部ハ丹陽及金壇ニ迫リ 敵ヲ圧迫中

第三師団ハ数日前ヨリ蘇州以北ノ地区ニ前進シ 但片山支隊ハ此日第百一師団ノ部隊ト交代シ師団主力ニ追及ス

第十一、重藤支隊ハ無錫附近ニ集結

二、第十軍ノ情況

第百十四師ノ一部ハ漂陽ヲ占領ス

寧国方面ノ情況明カナラス

諸情報ニ依レハ敵ハ新二二集團軍ヲ編成シ 鎮江、句容、広徳、蘭谿（浙江）ノ線ヲ守備シ別ニ南京城守備軍ヲ編成シ最後迄抵抗スヘキ命令ヲ与ヘ（十一月廿五日頃）タルモ 其前線ハ既ニ陥落シ全軍ノ志気崩壊シタレハ 尔後ノ抗戦ハ大ナル成果ナキモノト認メラル

南京攻略命令ヲ下ス（欄外）

仍テ今朝新二全軍ニ対シ南京攻略命令ヲ与ヘ 又方面軍司令官ノ訓示ヲ与ヘ 第十軍ハ十二月三日頃ヨリ 派遣軍ハ五日頃ヨリ前進ヲ開始スヘキ命令ス 尚海軍ニ督促シ速ニ江陰附近ニ於ケル封塞ヲ開放シテ揚子江ノ水路ヲ開キ 軍ノ攻撃前進ニ伴ヒ派遣軍ノ一部（約一師団）ヲ江北ニ上陸セシメ 江北運河及津浦鉄道ヲ遮断スルノ準備ヲナサシム

尚此日 原田少将、楠本大佐ヲ召致シ 今後軍特務部ノ編成任務ノ分担及今後ノ軍ノ謀略目標ニ関スル予ノ意見ヲ告ケ具体的立案ヲ命ス 其要旨左ノ如シ

一、特務部ノ編成

原田少将指揮

一、外事部ノ編成

主トシテ上海外国関係、大使館トノ連絡

二、地方宣撫

方面軍直轄、及各軍占拠地域ニ分ケ 特ム部及両軍ニ依テ宣撫ヲ行フ

三、宣伝部

従来ノモノヲ拡大強化ス

四、謀略部

別ニ某少将ヲ主幹トシ所要ノ人員ヲ以テ独立軍司令官ノ意図ヲ受ケ 今後ノ政治、戰場謀略ニ任ス

五、企画研究部

尔後ノ政治、経済、善後措置ヲ研究立案セシムルコトトシ 齊藤良衛ヲ長トシ陸海、外務其他内地、上海ノ専門家、経験家ヲ集ム

尚今後謀略ノ目標ハ先ツ国民政府ヲ駆逐シテ江蘇、浙江、成シ得レハ安徽ヲ併スル独立政權ヲ樹立セシムルニ在リテ 万已ムヲ得サル時ハ南京附近ニ残留スル国民政府要員ヲ以テ国民政府ヲ改造シテ 漢口政府ト分離スル国民政府ヲ建設スルヲ目的トシ 今後南京ノ攻略ニ伴ヒ其工作ヲ進ムルコトトス

◇十二月三日（晴）

一、派遣軍ノ状況

第十六、第九師団ハ敵ヲ追撃シテ既ニ其先登部隊ヲ以テ磨盤山頂ノ線ニ達ス

又第十一師団ノ部隊ハ鎮江ニ向ヒ進撃中 鎮江ハ火災起リ敵軍既ニ退却ニ就キツツアルヲ知ル

二、第十軍ノ状況

第百十四師団ノ部隊モ漂水ニ近ク進出ス

尚第十八師団ノ部隊ハ寧国ニ近ク進出セリ

此日第百一師団工藤少将ノ指揮スル歩百三聯隊、砲兵一大隊ヲ以テ共同租界内ノ示威行軍ヲ実施ス 両租界当局極力租界内ノ警備ニ尽シタルモ 遂ニ一名ノ支那人ノ爆弾事件アリタルモ

ハナイケレトモ兎ニ角部内トシテモ是非南京ヲヤルコトニシテ居ルカラ其ノツモリテ従来ノ行キ懸リヲ捨テヤツテ呉レ」と云ふことを電報しました。

殿下 二十七日に其の親展電報を打って居られますが……下村 其の時に大体無理押しでもやるといふ決心をしたのであります。

殿下 第一部長よりの電報として「当部ニ於テハ南京攻略ヲ実行スル固キ決意ノ下ニ着々審議中ナリ未タ決裁ヲ得ル迄ニハ至ラサルモ取敢スオ含ミマデ」と云ふのを打って居りますね。

下村 はい、さうであります。さうして之に対して向ふから来ました返事は

「今ノ電報ヲ見テ安心シタカラ勇躍サウスル」と云ふことであります。其の後愈々はつきり敵国首都南京攻略をやる大命が渙発せらるるに至つたのであります。それが二十八日か二十九日であつたと思ひます。

そこで一方では其の少し前に有末（次）中佐が作戦指導要綱を起草して来ましたので、それを大急ぎで方々に見せて判を取りました。が、次長には之に就いて色々突込

んで申上げまして到々二十八日だと思ひますが同意されましたので、それからは一瀉千里に事が搬んだのであります。がそこまで行くまでには非常にゴタゴタしたのであります。

殿下 それから其の南京攻撃の命令は次長が直接持つて行かれたのですか。

下村 いや電報であります。

殿下 次長が其の時行つて居るやうですが。

下村 現地からは次長が若くは第一部長に来て呉れといふことを前から言つて来て居りましたので、遣つて頂き度と申しました所、次長、総務部長から「お前は身体が悪いから不可ん」と言はれ「軍医を連れて参ります」と申上げたのですが、「それ迄にしてお前が行く必要はない」と止められて仕舞ひましたので、私は夜逃をしてでも行かうと思ひましたけれどそれも大人気ないと思ひ直して断念し、それで次長が行かれることに定まりました。もつと早く出掛けようと言はれたのですが他の仕事の為仲々出られませんでしたし、私としても次長が出る為にはどうしてもし南京追撃の御決裁を得て置かなければならないと考へ、又次

大事ナク無事示威ノ目的ヲ達成セリ 内外人等シク驚異ノ眼ヲ以テ之ヲ見ル 在留邦人ノ感激此上ナシ 只此事始メ海軍ニ交渉シ陸戦隊ノ協同ヲ希望シタルモ海軍側カ例ノ租界ト列国ヲ氣兼スル心地尙去ラス 遂ニ陸軍ト協同スルヲ辞シタルハ極メテ遺憾ナリ 此本行軍ノ結果 特ム部ヲシテ共同租界警察總監トノ間ニ今後一層租界内排日分子ノ取締ヲ要求シ 必要ト認ムル時ハ 軍ハ自衛上租界内清掃ニ関シ独自の手段ヲ取ルヘキコトヲ約セシメタルハ爆彈事件ノ功名ナリ

尚此日大使及大使館員ニ對シ軍今後ノ作戰ノ大要ヲ告ケ 一層租界及列国ニ對スル治安經濟工作ニ付督勵ス

◇十二月四日（晴）

一、派遣軍ノ状況

第十六、第九師團ハ句容及其南方ノ線ニ達ス

二、第十軍

第百十四師團ハ漂水ニ達ス

南京外郭攻撃命令下付（欄外）

仍テ軍ハ兩軍ヲシテ更ニ南方城外郭ノ線ニ向ヒ攻撃ヲ命シ尔後ノ南京城攻略ヲ準備セシム 蓋シ南京城ノ占領ハ兩軍部隊ノ隨意攻撃ニ放任セス 方面軍ニ於テ之ヲ統制シ 秩序アル占領ヲ遂ケントノ意ナリ 又入城前蔣介石又ハ守城者ニ對シ投降勸告ヲ与ヘ 可成南京城ヲ破壊セス住民ノ損害ヲ避ケテ之ヲ占領セン予ノ意ナリ

朝香宮殿下派遣軍司令官親補（欄外）

此夜東京ヨリ電報アリ 予ノ派遣軍司令官兼任ヲ解キ 新二朝香宮殿下同司令官ニ親補セラ ルルヲ知ル 寔ニ恐懼感激ノ至ナリ 依テ直ニ之ヲ全軍ニ通報スルト共ニ 殿下ノ御在任中ノ 警備并御居住ノ安全ニ付 出来得ル限ノ措置ヲ可講夫々研究ヲ命ス

◇十二月五日（晴）

此朝多田參謀次長前線ヨリ帰來ス 依テ軍今後ノ作戰方針及南京占領後ニ於ケル軍ノ企圖ニ 付予ノ希望ヲ語り 更ニ軍特務機關ノ拡大、今後ノ謀略方針ニ付委細説明シ 中央ノ方針確定 ヲ促ス 其要如次

一、軍今後南京攻略後ノ謀略ハ西山派、政學派、段派及在中支財界中親日者ヲ糾合シテ 獨立 政權ヲ江蘇、浙江、安徽ヲ併セテ設立セシメ漸次北支政權ト連絡セシム

二、能ハサレハ現國民政府ノ不良分子ヲ排除シテ政府ヲ改造セシム 而シ（テ）此際欧米ニ依 存スル浙江財閥ハ必ス之ヲ排斥スルヲ要ス

三、右ノ為メ特ム機關ヲ拡大シ

一、建川又ハ重藤ヲ長トシ

二、重藤又ハ佐々木到一ヲ長トシ 和地、白田等ニ依リ李、白及西山派等ニ對シ謀略ヲ行ハ シム

三、原田ヲ現在ノ儘トシ外事、及宣伝ノ事ニ該ラシム 之レカ為メ松室、楠本等ヲ使用ス

四、古城少將ヲ宣伝部長トス

五、斎藤良衛ヲ長トシ經濟及今後ノ政治、經濟等ノ善後企画ヲ行ハシム

◇十二月六日（晴）

此日萱野、陳中孚、岡田尚ヲ集メ今後ノ謀略ニ関スル指示ヲ与ヘ 之ヲ督勵スルト共ニ 李擇一ヲシテ福州ニ在ル陳毅ノ引出策及杜月笙ノ上海帰還ヲ策セシム（欄外）

此日大使館ニ海軍長官、大使館員等ト会シ 今後ノ軍事、政經政策ニ関シ 予ノ意見ヲ開陳 シ 其同意ヲ得タリ 即

一、軍ハ南京攻略後、南京、蕪湖、寧國、杭州以東ノ地区ヲ占領シ 更ニ江北ノ揚州、滁縣、

長もさういふやうな御考へになられたので出発が延びて居つたのですが、二十八日此の御決裁を得ましたので次長に行つて頂いたのでございます。

斯ういふ風で私は正直に申しますとあの際は少々は上官の御意圖に背きましても思ひ切つて所信を断行する為にもつと暴れた方が宜かつたと思ひます。

それであの時自分が現地に行きますか、或は部内に居つてもつと積極的によつて出先の仕事が遅れないやうにやるべきでありました。（竹田宮恒徳王太尉との対談）

大陸命第七号 *

命令

別紙ノ如ク中支那方面軍戰闘序列ヲ令ス

昭和十二年十二月一日

奉勅伝宣

中支那方面軍司令官 松井石根殿
上海派遣軍司令官 松井石根殿
第十軍司令官 柳川平助殿
別紙

中支那方面軍戰闘序列

中支那方面軍司令官 陸軍大將

松井石根

中支那方面軍司令官

上海派遣軍

第十軍

大陸命第八号 *

命令

一、中支那方面軍司令官ハ海軍ト協同シテ敵國首都南京ヲ攻略スヘシ

二、細項ニ関シテハ參謀總長ヲシテ指示セシム

昭和十二年十二月一日

奉勅伝宣

參謀總長 載仁親王
中支那方面軍司令官

松井石根殿

大陸指第九号 *

指示

大陸命第八号ニ基キ左ノ如ク指示ス

一、中支那方面軍司令官ハ其任務遂行ノ為揚子江左岸ノ要地ニ一部ノ作戰ヲ實施スルコトヲ得

二、中支那方面軍ハ支那方面艦隊ト協同作戰スルモノトス其作戰ニ関シテハ方面軍司令官支那方面艦隊司令官ト直接協定スヘシ

三、宣伝謀略及一般諜報ハ方面軍司令官部附少將ヲシテ實施セシムヘシ

浦口附近ヲ占領ス

尔後ノ行動ハ東京ノ企図ニ俟ツ

二、此クテ専ラ 先ツ上海附近ノ平和運動ヲ促進シ 漸次ニ占領地ニ宣撫工作ヲ進メテ自治機關ヲ作為セシメ 機ヲ見テ江蘇、浙江、安徽ヲ基礎トスル政權ノ樹立ニ努ム
三、上海租界ニ対スル方針ハ

一、一般 排日、抗日空氣ノ清掃ノ外

二、租界ニ於ケル支那國民政府ノ主權ヲ代行シ 政治、經濟的地歩ヲ獲得ス
三、又從來租界ヲ基礎トスル欧米依存關係ヲ打破ス

以上ノ為メ此上軍ハ威嚇又ハ武力行使ヲ当分見合せ 努メテ平和的ニ其目的ヲ達成スルヲ期ス 從テ之レカ実行ハ直接軍ニ必要ナルモノ即治安維持ヲ主トスルモノノ外 主トシテ外交官憲ノ努力ニ俟ツ 海軍ハ租界内ニ於ケル從來ノ守備ヲ繼續シテ陸軍ノ租界外ニ於ケル治安工作ニ協力スルノ外 可成速ニ揚子江上流ニ艦隊ヲ進出セシメ陸軍ノ上記作戰ニ協力ス
右ハ一同異議ナク 海軍モ欣テ之ニ追隨スヘキ意ヲ明ニス

朝香宮殿下 新ニ予ニ代リテ上海派遣軍司令官ニ補セラレ本日着滬セラル 仍テ予ハ之ヲ埠頭ニ迎ヘ 又午後其申告ヲ受ケ委細ノ申繼ヲ行フ 恐懼ノ至ナリ 殿下ハ明日自動車ニテ在無錫軍司令部ニ赴カルル筈(欄外)

◇十二月七日(晴)

此日始テ蘇州、上海間鉄道開通スルニ依リ 予ハ之ニ乗シテ方面軍司令部ヲ蘇州ニ前進ス 沿道漸次平和氣分ヲ見ル 避難農民逐次帰村シツツアルヲ見ル 可欣

蘇州ニハ既ニ自治委員設立セラレ 我副領事モ昨日来当地ニ来リ 治安工作、宣撫ニ着手シアリ
兩軍ノ第一線部隊ハ漸次南京城外廓陣地ニ接近ス 又第十三師団ノ一聯隊ハ江陰ヨリ靖江ニ

渡リ 海軍ト協力シテ全ク江陰水路ノ阻絶ヲ除去スルヲ得タリ

◇十二月八日、九日(晴)

兩軍ノ第一線部隊ハ紫金山ヲ占領シ 又雨花台附近ヲ占領シ 漸次城廓ニ迫ル

此日飛行機ニヨリ予ノ署名スル投降勸告文ヲ城内外ニ散布シ 明十日正午ニ回答ヲ俟ツ
第十八師団ハ蕪湖ヲ占領シ 国崎支隊ハ太平ヲ占領ス

◇十二月十日(晴)

此日正午ニ至ルモ支那軍ノ回答ナシ 依テ午後ヨリ兩軍ニ対シ南京城ノ攻撃ヲ命ス 敵軍ノ頑迷真ニ可惜 已ムナキ事ナリ 然レトモ最早所謂最後ノ氣持丈ノ抵抗ニ過キス 其実効ナキハ勿論ナリ 聞ク 蒋介石ハ昨日既ニ南昌ニ去リ 唐生智守城セル如シ

此日国崎支隊ハ長江対岸ニ渡河ヲ準備シ 第十三師団モ鎮江附近ニ進出シ渡河ヲ準備ス

第一百師団ハ杭州攻撃 前進(欄外)

第一百師団(三大隊欠)ヲ第十軍司令官ノ指揮ニ属シ 本日出発 松江ヲ經テ杭州ニ向ヒ前進シ 第十軍後備隊ト協力シテ之ヲ攻略セシム

第九師団 光華門占領(欄外)

第九師団ハ敵ヲ追撃シテ此日光華門ヲ占領ス

◇十二月十一日、十二日、十三日(晴)

軍ハ右ヨリ第十六、第九、第一百十四、第六師団ヲ以テ今朝ヨリ南京城ノ攻撃ヲ開始ス 城兵ノ抵抗相当強靱ニシテ 我砲兵ノ推進未及ノ為メ 此攻撃ニ二三日ヲ要スル見込ナリシカ 第九師団ハ既ニ敵ヲ追撃シテ光華門ヲ占領シ 屢々敵ノ逆襲ニ遭ヒツツ同門ノ占領ヲ保持ス 国崎支隊ハ烏江附近ニ上陸シ浦口ニ向ヒ 南京ノ退路ヲ遮断スル如ク行動シツツアリ

但報道ハ「報道部発表」ノ形式ニ依ル

謀略ニ関シテハ別ニ指示スル所ニ拠ル

四、瓦斯並催涙筒ノ使用ニ関シテハ更メテ指示ヲ待ツヘシ

昭和十二年十二月一日

十二月七日 蒋介石夫妻、南京を脱出

大陸命第二十四号

命令

一、中支那方面軍司令官ハ南京攻略後海軍ト協同シテ概ネ杭州舊国(宣城)蕪湖ヲ含ム以北揚子江右岸地域内諸要地ノ確保安定ニ任スルト共ニ航空部隊ヲ以テ右地域外敵国内要地ノ攻撃ヲ続行スヘシ
二、状況ノ推移ニ伴ヒ逐次兵力ヲ集結配置シ大本營ノ使用ニ便ナラシムヘシ
三、細項ニ関シテハ參謀總長ヲシテ指示セシム

昭和十二年十二月七日
奉勅伝宣

參謀總長 載仁親王

中支那方面軍司令官

松井石根殿

「飯沼守日記」

十二月九日

昨日三・三〇頃中島師団長負傷腰部軟部貫通銃創ニテ約二週間ニテ治愈見込、殿下ヨリ御見舞ノブドー酒 煙草ヲ持チ小出軍医ヲ派遣サル
同十二月十日

9 Dノ36 iハ城壁外「クリーク」ノ線ニ達シアルモ河幅広ク壁高ク遂ニ昨夜ハ突撃準備出来ス其他ノ正面ハ尚城外ノ陣地攻撃中勸降狀ハ昨日正午頃撤キ本日正午カ期限ナリ

五・〇〇36 i第一中隊城門ニ突入セリ 更ニ電話アリ第四中隊モ突入シ日章旗ヲ振りツツアリ

9 Dノ南京城門ニ日章旗ヲ樹タル御喜ヒヲ殿下ニ申上ケ思ハス感泣ス 西原大佐ヲモ呼ハセラレ祝杯ヲ賜ハル

同十二月十一日

本郷參謀9 Dヨリ三日振リニ歸來其報告スル処ニ依レハ36 iノ淳化鎮ノ突破殊ニ土橋鎮ヨリノ夜間追撃ハ迅速果敢ニシテ敵ノ予備隊等ハ民家ニ竄込ヲ喫ヒ光華門ニ未明達シタル頃ニハ敵兵城門外ニ漫歩シアリ慌テテ之ヲ閉シタルト尚城壁一番乘リハ城門上ヲ山砲ニ

十三日 南京城占領（欄外）

十三日朝 第一百十四、第六ノ兩師団ハ 中華門及水西門ヲ占領入城シ 同日夕迄ニ第十六師団ハ太平門、共和門ヲ占領 第三師団ノ一部ハ通濟門ヲ占領シ 此ニ全ク南京城ヲ攻略ス

英艦船損害事件（欄外）

去ル五日 我航空隊ハ蕪湖附近ニ於ケル敗敵ヲ爆撃中同地ニアリシ英^{*}國船ニ損害ヲ与ヘタル事件アリ 又十三日朝橋本大佐ノ率ユル重砲兵隊カ江ヲ渡リテ退却中ナル敵ヲ砲撃スル際 附近ニアリシ英國商船及英國砲艦乗員ニ小損害ヲ与ヘタル事件アリ 是レ居留民避難保護ニ任シタルモノニテ中ニ英独領事館員、武官等モアリ 将来多少ノ問題ヲ惹起スヘキモ 此ル危險區域ニ残存スル第三國民并其艦船力多少ノ側杖ヲ蒙ルハ已ムナキ事ナリ 況ヤ我方ハ既ニ此方面ニ於ル戰場ノ危險ヲ列國ニ予告シ置キタルオヤ

◇十二月十四日、十五日（晴）

十四日 予ハ湯水鎮ニ前進ノ筈ナリシカ 準備未完了ノ為メ 十五日ニ延期シ 午後一時發 蘇州飛行場ヨリ飛行機ニテ句容飛行場ニ飛翔シ 夫レヨリ自動車ニテ午後三時湯水鎮軍司令部ニ安着ス

南京城入城ノ兩軍師団ハ城内外ノ殘敵ヲ清掃ス 敗殘兵ノ各所ニ彷徨スルモノ數万ニ達ストノ事ナルモ未詳

第十一師団天谷支隊ハ 十四日夕揚州ヲ占領ス（鎮江ヨリ十三日渡江）

又第十三師団ノ主力ハ十四日鎮江ヨリ渡江 十五日揚州ニ入り続テ儀徵ニ向ヒ前進中ナリ

國崎支隊ハ十四日浦口ヲ占領ス

南京占領御語下賜（欄外）*

十四日 大元帥陛下ヨリ參謀總長ヲ經テ 軍將兵南京攻略ニ関シ御語ヲ賜フ 一同感泣 直ニ全軍ニ令達スルト共ニ奉答ノ辞ヲ電奏ス

十五日 蘇州自治委員長陳某ヲ召致シ 皇軍ノ本領及予ノ大亜細亞主義精神ニ付説明シ 公明ナル自治ノ發展ヲ希望ス 此男一昨年天津ニテ予ノ亜細亞運動ニ付知ル処アリ 能ク予ノ意ヲ諒ス 但シ人民尚日本軍ヲ恐怖スルト 地方ノ荒廢ノ為 急遽ナル自治ノ実行困難ナル旨ヲ語ル 聞ク 近時毎日四五千ノ避難民婦宅シアルモ 尚多クハ貧民ニシテ 財アルモノハ未タ帰ラスト

◇十二月十六日（晴）

蕪湖英艦事件

去十二日 蕪湖ニ於ケル英國軍艦、商船被害事件ニ関シ 我政府ハ実相ヲ極メス英國ノ抗議ニ対シ直ニ陳謝ノ措置ヲ取リタル由 聊力周章氣味ナレト 既ニ実行シタル上ハ詮ナク予ハ事実ヲ調査シタル結果 決シテ責任者ヲ処分ナトスル必要ナキ意見ヲ東京ニ電報セシム（欄外）

湯水鎮ニ在リ 此地ハ蔣介石別荘ノアリシ有名ナル温泉場ナリ 同別荘ハ燒失シテ跡ナキモ俱樂部ノ建物殘存シ一同久振ニ入湯シテ気分ヲ能クス

南京城内外掃蕩未了 殊ニ城外ノ紫金山附近ニアルモノ相当ノ數ラシク 捕虜ノ數既ニ二万ヲ超ユ 此クテ明日予定ノ入城式ハ尚時日過早ノ感ナキニアラサルモ 余リ入城ヲ遷延スルモ面白カラサレハ 断然明日入城式ヲ舉行スルコトニ決ス

第十三師団ノ一部ハ鎮江ヨリ幕府山附近ヲ經テ南京城外ニ來着ス

南京攻略後ノ軍ノ態勢ニ関スル命令下達（欄外）

此日南京攻略後ノ全軍ノ態勢并ニ尔後ノ作戰準備ニ関スル命令ヲ下ス 是レ蓋シ直後ノ配置并整理ニシテ 将来ノ情勢ニ応シテハ更ニ浙江省ハ勿論 江北地方ニ軍ノ占領地域ヲ拡大スルコト諸般ノ關係上必要ナリト認ムルモ 曩ニ伝宣命令ニヨリ兎ニ角長江右岸、杭州、蕪湖、南京以東ノ地区ニ集結ヲ命セラレアルニ依リ 不取敢前記ノ如ク処置シタル次第ナリ 今後情勢

テ射撃シ其土砂及土壤ノ崩レタル急坂ヲ驅ケ登リタルモ真ノ壁上ニハ達セス 中腹ニテ敵ハ昨夜ヨリ本日ニカケテ逆襲ヲ行ヒ甚タ危險ナル状態ヲ呈ス 其頃到着セル重砲及山砲ヲ以テ四、五〇メートル離レタル城壁ニ更ニ突撃路ヲ作り且其砲撃ニ依リ逆襲部隊ノ後退セルニ乘シ壁上ニ兵力ヲ増シ且上モ上ケ防戦中ニテ本日午後二ハ約一大隊上リタルモノノ如シ（クリーク）ノ橋ハ敵兵破壊スル暇ナカリキ

英國船ではなく米艦である。パネー号事件、十二日の誤記。

陸軍砲兵大佐 橋本欣五郎²³則の指揮下の野戦重砲兵第十三聯隊。レディバード号事件、十二日の誤記。

大陸指第二十四号

指示

大陸命第二十四号ニ基キ左ノ如ク指示ス

一、中支那方面軍司令官ハ揚子江右岸地区内諸要地ノ安定確保ノ任務達成ノ為揚子江左岸地区ニ一部

ノ作戰ヲ実施スルコトヲ得

二、中支那方面軍ハ支那方面艦隊ト協同作戰スルモノトス其作戰ニ関シテハ方面軍司令官支那方面艦隊軍司令官ト直接協定スヘシ

三、瓦斯竝催涙筒ノ使用ニ関シテハ更メテ指示ヲ待ツヘシ

昭和十二年十二月十二日

參謀總長 載仁親王

中支那方面軍司令官

松井石根殿

十二月十四日陸海軍幕僚長ニ賜ハリタル大元帥陛下御言葉

「中支那方面ノ陸海軍諸部隊カ上海附近ノ作戰ニ引続キ勇猛果敢ナル追撃ヲ行ヒ首都南京ヲ陥レタルコトハ深く満足ニ思フ此旨將兵ニ申伝ヘヨ」

ニ応シ更ニ意見ヲ具申シ所要ノ配置ニ就ク考ナリ

◇十二月十七日（晴朗）

南京入城式（欄外）

此日南京入城式

午後〇時半自動車ニテ出発 一時二十五分中山門外ニ着 兩軍司令官以下幕僚ノ出迎ヲ受ケ一時半乗馬ニテ入城式ヲ施行ス

中山門ヨリ国民政府ニ至ル間兩側ニハ兩軍代表部隊 各師團長ノ指揮ノ下ニ堵列 予ハ之ヲ閱兵シツツ馬ヲ進メ兩軍司令官以下随行ス 未曾有ノ盛事 感慨無量ナリ 午後二時過キ国民政府ニ着 下関ヨリ入城先着セル長谷川海軍長官ト会シ 祝詞ヲ交換シタル後一同前庭ニ集合 国旗掲揚式ニ統テ東方ニ対シ遙拜式ヲ行ヒ 予ノ発声ニテ大元帥陛下ノ万歳ヲ三唱ス 感慨愈々迫リ遂ニ第二声ヲ発スルヲ得ス 更ニ勇氣ヲ鼓舞シテ明朗大声ニ第三声ヲ揚ケ 一同之ニ和シ以テ歴史的式典ヲ終了ス

右終テ師團長以上撮影ノ後 参列各隊長以上一室ニ会堂シ御賜ノ清酒ノ杯ヲ挙ケ 海軍長官ノ発声ニテ再ヒ大元帥陛下ノ万歳ヲ三唱シ 本日ノ式ヲ終ル

此日第十三師團ハ六合ヲ占領シ 更ニ滁縣ニ向ヒ前進中 十二圩ニ於テ塩三十万俵ヲ押入ス（欄外）

朝香軍司令官殿下最モ御健祥ニ御機嫌亦極メテ麗ハシク 殊ニ予ノ部下トシテ軍司令官ノ職ニ励ミ玉フ聖旨ノ程感激ニ堪ヘス

終テ首都飯店ノ宿舍ニ入ル 沿道市中未タ各戸閉門シ 居民ハ未タ城ノ西北部避難地区ニ集合シアリテ路上支那人極メテ稀ナルモ 幸ニ市中公私ノ建物ハ殆ト全ク兵火ニ罹リアラス 旧体ヲ維持シアルハ万幸ナリ

◇十二月十八日（曇）

忠靈祭（欄外）

今曉降雪少許アリ 天氣陰鬱ニシテ恰モ本日ノ忠靈祭ニ適スル天氣ニテ 天モ亦吾等ト共ニ泣ケルモノト思ハル

此朝各軍師團参謀長ヲ会シ 軍参謀長ヨリ詳細ナル指示及打合ヲ行ハシメ 予ハ特ニ一同

ニ対シ

一、軍紀 風紀ノ振肅

二、支那人輕侮思想ノ排除

三、國際關係ノ要領ニ付

訓示ヲ与ヘタリ（欄外）

午後一時宿舍ヲ発シ城内飛行場ニ準備セル忠靈祭ニ参列シ 祭典前参集セル兩軍司令官、師團長ニ対シ訓示ヲ与ヘ 終テ祭典ニ列ス

予ハ祭主トシテ陣没靈前ニ進ミ 祭文ヲ朗読シ万感胸ニ迫リタルモ 往時ノ如ク声詰リ涕泣禁シ能ハサル如キコトナク 何タカ一層ノ勇氣ト發奮心起リ 朗々祭文ヲ読ミ忠靈ニ告グルヲ得タリ 蓋英靈此ク予ヲ激励スルモノカ感亦無量ナリ

参列兩軍及海軍將兵万ヲ超ヘ式ハ簡單ナルモ甚壯嚴々肅以テ聊カ英靈ヲ慰ムルヲ得ン 予ハ此朝大帛ニ左ノ二詩ヲ謹書シ靈前ニ饒ケタリ 曰ク

南京城攻略感（欄外）

奉祝南京攻略

燦矣旭旗紫淦城 江南風色愈清々

貔貅百万旌旂肃 仰見皇威耀八紘

方面軍司令官 松井石根

祭文

昭和十二年十二月十八日、紫金山山麓に祭壇を設け、中支那方面軍最高指揮官松井石根恭しく陣没將士の靈に告ぐ。爰に江南戦火に蔽るるや諸子は勇躍征途に上り、あるひは深壕、堅塁の交錯する間に激戦勇闘して君国に殉じ、あるひは長駆急追して敵首都の攻城に果敢奮戦以て身命を祖国にささげたり。その遺勲は牢固として青史を飾り、その尽忠の至誠は、鬼神を哭かしむるものあり。想ふに一身を軍に奉じ、懸軍万里征旅に赴くもの身を鴻毛の輕きに比し、屍を馬革に包むはもとより男子の本懐なりと雖も凱歌紫金山を圧し、歡喜、揚子江にあふるるのとき、この榮譽を共に頒ち得るのとは、まことに痛嘆おく能はず。さらに遺族の上に思ひを致せば万感胸に迫り惻隱の情禁じ得ず、ここに弔憫の辞を知る能はず。嗚呼悲しいかな。然りと雖も諸子の殉国の至情は凝てここに皇軍の快勝となれり。爰に上海の封鎖完成し、今また南京城はわが掌握に帰し、情勢すでに定まり皇軍の威風東西の天地を

又南京入城式有感

紫金陵在否幽魂 来去妖氛野色昏

徑会沙場感慨切 低徊駐馬中山門

松井大将

之レニテ上陸戦闘以来ノ一段落ヲ終ヘ 此夜ハ早クヨリ安眠ス 万感交々到ル

又此夜軍報[＊]導部長ヲ招キ 南京攻略後ノ軍ノ態度ニ関スル予ノ所感ヲ述ヘ 司令官談トシテ發表セシムルコトトセリ (欄外)

◇十二月十九日 (晴)

休息第一日ナリ 尚今後諸般ノ対策ニ関シ万感禁セサルモ先ツ暫時心神ヲ休メ 徐ロニ尔後ノ方策ヲ練ルヲ可トス

此日午後幕僚数名ヲ從ヘ清涼山及北極閣ニ登リ南京城内外ノ形勢ヲ看望ス 城内数ヶ所ニ尚兵燹ノ揚レルヲ見ルハ遺憾ナレト左シタル大火ニハアラス 概シテ城内ハ殆ト兵火ヲ免レ市民亦安堵ノ色深シ

各処ヨリ祝電来ル 夫々重要ノ人ニハ返電ヲ出スコトトスルモ一々答フルニ違アラス 近衛首相以下各閣僚ノ祝電ニ対シ返電ヲ出ス

◇十二月二十日 (晴)

此日大使館ニ到リ新着ノ領事館員等ト会见シ状況ヲ聞ク 曰ク 去七月大使館引上當時支那側ニ寄托シタル我公使建物ハ一部ノ小奪掠ノ外 概シテ相当ニ保護セラレ 殊ニ大使館建物ハ内容共完ク完全ニ保存セラレアルハ 支那側ノ措置トシテハ寧ロ感服ノ値アリ

又避難区ニ収容セラレアル支那人ハ概シテ細民層ニ属スルモノナルモ 其数十二万余ニ達シ 独、米人宣教師ノ団体ト紅十字会等ノ人共ト協力シテ保護ニ任シアリ 聞ク江蘇省政府ハ其引

庄す。

諸君もつて瞑すべきなり。

顧るに時局の前途はなほ遑遠なり、われら一層奉公の誠を尽くし以て出師の目的完遂をはかり、堅忍持久誓つて諸子の遺志に副はんことを期す。
在天の英靈願はくば之を来り饗けよ。

軍報道部

特務部長 原田熊吉 22期少将

報道班長 深堀遊亀 28期中佐

南京安全区国際委員会委員長・
ジョン・H・D・ラーベ (ジュー
メンス洋行)

担重量百斤 (一斤 600 g) 容積一石

◇十二月二十一日 (晴) *

上ニ際シ 独人[＊]シーメンズ^マノモノニ銀十萬元ト南京現在ノ糧米ヲ托シテ保護ヲ依頼シタルモノナリト云フ 真否明カナラサレト現ニ城内ニ現蓄セラレアル糧米ハ一万担ニ達シ 外ニモ尚隠匿セラレアルモノモアリ 当分ノ間居民ノ糧食ニ事欠クコトナシト云フ
支那人等著名ノモノニ残留セルモノ見当ラサルモ漸次相当資産階級ノモノモ顔ヲ出シ来ル模様ニ付 其内矢張治安維持地方自治ノ支那人団体ヲ形成スルヲ得ヘキ見込ナリ 此南京ノ宣撫ハ最初軍特ム部ヲシテ之ニ当ラシムル積ナリシモ 人不足ノ為メ矢張 上海派遣軍ヲシテ適當ノ人 (隊長) ヲ選シ 特ム機関 領事館ノモノオモ併セ指揮シテ宣撫ニ当ラシムル事トセリ 尚聞ク所 城内残留内外人ハ一時不少恐怖ノ情ナリシカ 我軍ノ漸次落付クト共ニ漸ク安堵シ来レリ 一時我將兵ニヨリ少数ノ奪掠行為 (主トシテ家具等ナリ) 強姦等モアリシ如ク 多少ハ已ムナキ実情ナリ

朝十時発 挹江門附近下関ヲ視察ス 此附近尚 狼藉ノ跡ノママニテ死体ナト其儘ニ遺棄セラレ 今後ノ整理ヲ要スルモ一般ニ家屋等ノ被害ハ不多 人民モ既ニ多少宛帰来セルヲ見ル 躉船[＊]、棧橋等大分焼棄セラレアルモ多少ノ修繕ヲ施セハ六七個ノ棧橋ヲ使用シ得ル見込 現ニ第十三師団ノ渡江部隊、国崎支隊ノ阪南部隊ノ渡河ハ続々実施セラレアリ 但浦口ノ棧橋ハ一個ヲ残ス外尽ク焼棄セラレ 停車場ノ如キモ全ク焼失シテ用ヲ為サスト云フ 今後津浦鉄道ノ北向利用ハ相当ノ困難アルモノト認メラル

◇十二月二十二日 (晴)

午前十時半水雷艇鴻二便乗下江ス 途中烏龍山及鎮江附近砲台ノ残存セルモノ 江陰要塞ノ現状、封鎖ノ有様ナト視察シツツタ刻白茆口附近ニ仮泊ス
鎮江ハ損害少ク電燈ナト既ニ点シアル由 現ニ多少ノ火災アルモ大ナルコトナシ 埠頭モ殆

日記原文には「二十日、二十一日 (晴)」と書かれている。

「躉船」 tuen ch'uan とはハシケのこと。

(諸橋大漢和辞典による)

ト現存スル由ニテ 揚州ニ在ル第十一師団部隊ノ補給連絡等支障ナク実施セラレアリ

江陰要塞モ大破ナク 就中独乙製十五珊高射砲ノ新式ノモノ十数門ハ価値アルモノナリ

上海帰着 (欄外)

朝九時出港 午後一時上海市府埠頭ニ安着ス 上海出発以来恰度二週日ニシテ南京入城ノ大壮挙ヲ完成シ帰来スル氣持ハ格別ナリ 之レヨリ謀略其他ノ善後措置ニ全力ヲ傾注セサルヘカラス

◇十二月二十三日 (晴)

二週間振(リ)ニ帰来ス 上海情勢漸次平静ニ向ヒツツアルモ南市ノ処分未タ終ラヌ 滬西方面ニアル外国人ノ居住モ一応ハ許可セルモ 支那人ノ出入自由ナラサル為メ実行意ノ如クナラス 其後ノ謀略ニ付原田少将、楠本大佐ヲ召致シテ情况ヲ聞ク 是亦多少共進展ノ模様ニテ上海在住実業家ヲ網羅スル和平、救民運動ハ漸ク其緒ニ就カントシツツアルモ未タ十分ノ纏ヲ見ス 一層ノ努力ヲ要スルモノト思ハル

思フニ先日來ノパネー事件、蕪湖事件等英米抗議ニ対スル東西ノ衝撃力兎角ニ上海支那人中ニモ鋭敏ニ影響スルモノアリシ乎

杭州占領 (欄外)

第十軍ハ此日杭州ヲ占領ス 最早何程抵抗ナク第百十四、百一師団ニヨリ易ク占領セラレタルハ可欣 尚在留外国人ノ問題モナク無事ナリシカ幸ナリ 今後風紀問題等モ故障ナカラシコトヲ只管祈ルノミ 錢塘江対岸ニ対スル作戦ハ今後ノ情勢ニ依リ決スル事トシ暫ク蕭山、余杭附近ヲ消極的ニ占領セシムルニ止ム

◇十二月二十四日 (小雨)

米長官訪問 (欄外)

朝十一時 米國海軍長官ヤーネル提督ヲ訪問ス 蓋シ雲ニ英仏等ノ長官ニハ面接ノ機會アリタルモ米長官ニハ未タ其機ヲ得ス 偶パネー号事件モアリ一応訪問シ置クヲ利トスルト認メタルニ依ル 米長官以下能ク接待シ態度可ナリ 上海問題ニ関シ色々注文ヲ出シタルモ大體能ク我軍ノ態度ニ信頼ヲ置クモノノ如シ パネー号事件ニ関シテハ予ヨリ一応遺憾ノ意ヲ述ヘ又犠牲兵ニ対シ弔辞ヲ述ヘタルニ誠意能ク之ヲ容レタリ

要スルニ米海軍ハ我等ニ対シ何等モ感情的惡感ナキモノト認メタリ 尚彼ハ特ニ予ニ写真ヲ贈リタリ

帰途大使館ヲ訪ヒ大使、總領事等ニ會シ上海方面一般ノ情勢ヲ聞ク 別ニ大シタコトナキニ依リ近々上海附近ヲ一般外人、支那人ニ解放スヘキコトヲ申合ス 尚税関問題等ニ就テハ現下ノ英米抗議問題片付キタル後 更ニ強硬ニ我最初ノ主張ヲ貫徹スルヲ利ナリト考ヘ 右様申入置キタリ

◇十二月二十五日 (晴)

米長官來訪 (欄外)

朝米國ヤーネル提督以下多数ノ幕僚、マリントン司令官等ヲ伴ヒ答礼ニ來ル 予モ誠意之ヲ遇シ日米兩國ノ太平洋ノ平和ニ協力スヘキコトヲ述ヘ 尚上海將來ノ治安維持ニ付テハ列國ノ協力ヲ必要トスルコトヲ語リタルニ彼モ亦之ニ賛成シ 尚仏國租界内ニ於ケル排日分子ノ取締ニ付先任司令官ノ立場ヲ以テ彼ヨリ仏國側ニ所要ノ助言アリタキ旨述ヘタルニ彼ハ直ニ之ヲ承認セリ 此ニテ此日ハ毫モパネー事件其他時局問題ニ直接接觸ル、コトナク 頗ル晴蕩ノ氣分ニテ引揚ケタリ

仏國海軍ノ招待 (欄外)

午後仏國旗艦ビツケー号上ニ於ケル仏提督ノ午餐ニ出席ス 仏國大使始メ例ノジャキノウ牧師等迄多数列席頗ル晴蕩タル氣分ノ會食ナリ 助才ナキ仏提督能ク談シ切ニ親和ノ情ニ努ム

國際關係ニ関スル件

軍司令官宛

參謀總長

陸軍大臣 連名

十二月二十八日發

今次事變ヲ繞ル國際關係ハ頗ル機微ナルモノアリテ皇軍ノ一挙一動ハ直ニ列強ノ関心ヲ喚起シ作戰ノ範圍中支ニ波及スルニ至ツテ愈々然ルモノアリ

斯クノ如ク列國ノ動向アルニ乘シ支那國民政府ハ事毎ニ執拗ナル暗躍ヲ續ケテ今尚列強ノ干涉ニ一縷ノ望ヲ囑シ之ヲ誘致シ狂奔シアリ、之ヲ以テ帝國力第三國トノ間ニ事端ヲ發生スル事ハ最モ乘スヘキ機會ヲ彼ニ与フルモノニシテ就中英米兩國ニ於テテ論ノ沸騰ヨリ延イテ対日共同正面ノ作戰ヲ招来シ蘇聯ヲシテ活潑ナル協力ヲ為サシムルコトハ支那ノ最モ念願シアルモノナルコトヲ三思スルノ要アリ

惟フニ帝國作戰ノ成果ハ今ヤ疑ノ余地ナク第三國ノ干涉亦敢ヘテ之ヲ恐ルルノ要ナキモ赫々タル戰果ニ対シ克ク迅速ニ有終ノ美ヲ収メ得ヘキヤ否ヤハ皇軍ノ支那民心把握ノ如何ト今後ニ於ケル列國ノ態度就中英米ノ対日合作ノ成否及

之ニ伴フ蘇聯ノ動向如何トニ関スル事大ナリ

然シ乍ラ英國動カサレハ克ク蘇支ノ策謀ヲ對シ得可ク米國踊ラサレハ英國遂巡スヘキ現下ノ國際情勢ニ鑑ミル時ハ英米ノ合作ハ將來ニ亘リテ帝國ノ最モ戒慎ヲ要スル処ナリ斯クノ如キヲ以テ第三國ニ對スル無用ノ刺激ハ企テニシテ國策ニ反シ却テ帝國ノ企圖ニシテ國策ニ迅速徹底ナル處理ヲ拘束スルニ到ル虞ナシトセス故ニ派遣各軍ハ過去ニ於テ生シタル数次ノ此種事故ニ鑑ミ深く如上ノ國際動向ニ留意シテ克ク軍紀ヲ振作シ軍律ヲ維持シ益々皇軍ノ真価ヲ發揮シ以テ國際關係ヲ刺戟セシムル虞アルカ如キ事ナカラシムル様嚴ニ將兵ニ理解ヲ与ヘテ之ヲ指導ニ過ナカラシメン事ヲ望ム

『上村利道參謀副長日記』

十二月二十六日 快晴

上海派遣軍歌一案成ル、經過ヲ序シ稍長過ギル感アリ

午後宮殿ニテ隨行、下関ニテ海軍内火艇ニテ浦口附近視察、次テ挹江門南側高地ノ防禦施設、太平

予モ之ニ応シテ応酬シ 大使、総領事ニ対シ可成速ニ且ツ完全ニ仏租界内ノ排日分子ノ清掃ヲ要求セルニ 彼ハ努メテ之ニ当ルヘキモ 何分避難民、数多ク其取締ニ困却シアル旨ヲ述ヘタリ 彼等亦相応誠意ナキニ非ルモ仏国側ノ事ナレハ到底其完全ヲ望ム可カラサルハ勿論ナリ 聞ク同提督ハ二十六日発海防ニ向フ由

◇十二月二十六日、二十七日(晴)

二十八日(雨)

東京ト諸般ノ連絡并意見具申ノ為メ塚田参謀長ヲ派遣ス

上海兵站病院ヲ視察ス 設備モ漸次整ヒ現在傷病者約五千名ニ過キス 赤十字看護班ノ協力ニ依リ大体好成績ニ衛生諸設備行ハレアリ安心ス 尚慰藉ノ手段ニ欠クル所アリ研究ヲ促シ置ケリ

パネー号事件解決(欄外)

二十六日パネー号事件解決ノ報アリ 十分ノ出来ニハアラサレト之レニテ一段落トナレハ支那ノ各方面ニ対スル影響相当大ナルヘク 今後上海附近ノ謀略工作ナトモ一層ノ進展ヲ期シ得ヘシ

南京、杭州附近又奪掠、強姦ノ声ヲ聞ク 幕僚ヲ特派シテ敵ニ取締ヲ要求スルト共ニ責任者ノ処罰ナト直ニ惡空氣一掃ヲ要スルモノト認メ 嚴重各軍ニ要求セシム

二十七日 中支那軍濟南ヲ占領ストノ報アリ 今後中支那軍ハ更ニ南方ヘ作戰シ山東ヲ全然孤立セシムルノ要アリ 之レカ為メ我軍ニ於テ江北地方ノ作戰ヲ徐州附近迄進ムルコト更ニ有効ナリト信シ 前述塚田少將ニ対シ右意見ヲ東京ニ具申セシム 浙江方面ニ対スル作戰ハ右作戰ノ關係モアリ暫ク時機ヲ待ツコト有利ナリト考ヘアリ

秩父宮妃殿下ヨリ御手製ノ靴下二足 将校婦人会ヲ経テ下賜セラル 御附武官ニ御礼ノ電報ヲ出ス(欄外)

◇十二月二十九日(雨)

此日市政府区ニ新營セル軍司令官々邸ニ引移ル 此家ハ支那人ノ家ニテ病院ニ充ツヘキ未完成ノモノナリ 之ニ手入ヲ加ヘ相当ノ良官邸トナレリ新築ナルヲ以テ氣持宜シ 此処ニテ緩々新年ヲ迎ヘ今後ノ対策ヲ練ルコトス

南京ニ於テ各国大使館ノ自動車其他ヲ我軍兵卒奪掠セシ事件アリ 軍隊ノ無知乱暴驚クニ耐ヘタリ 折角皇軍ノ声価ヲ此ル事ニテ破壊スルハ残念至極 中山参謀ヲ南京ニ派遣シテ急遽善後策ヲ講スルト共ニ 当事者ノ処罰ハ勿論責任者ヲ処分スヘク命令ス 殊ニ上海派遣軍ハ殿下ノ統率セラルルモノ其御徳ニ関スル儀ニモアリ 嚴重ニ処分方取計フ積ナリ

上海四圍ノ虹口、滬西地区、南市等一帶ニ外人、支那人ノ開放ヲ本日ヨリ施行ス 其結果將來多少ノ不祥事件発生スヘキモ是レ却テ支那人ノ見セシメニ可ナルヘク 軍隊側モ自然緊張味ヲ加フルニ至レハ軍紀、風紀問題ニモ良好ノ結果ヲ得ヘシト思フ

第十軍ノ第十八師団ハ杭州西方富陽方面ニ敵ヲ追撃シ 多少ノ損傷アリタルモ概シテ此方面ノ敵軍ハ最早戰意ナク 逐次退却シツ、アルモ尚錢塘江右岸地区ニ更ニ全般の追撃ヲ実行スル要アリト認ム

◇十二月三十日、三十一日

此日李*、陳*中孚、菅野等ト会シ今後ノ謀略ニ付指示ヲ与ヘ其意見オモ聞ク 上海ニ於ケル平和運動ハ漸ク熟シ来リ近々其声ヲ揚ゲ得ヘシトノ事ナリ

李ハ近ク香港ニ行キ宋子文等ト連絡シ国民政府ノ其後ノ動靜ヲ偵察スヘシト云フニ付 宋子文ハ之ヲ利用スルハ可ナルモ新政權ニハ参与セシム可ラサル意ヲ伝フ

陳ノ言ニヨレハ在漢口居正ノ妻來滬 我方ノ意嚮ヲ知り度トノ事ニ付 大体差当リ防共、亜細亞主義ノ外特ニ注文ナキ旨ヲ告ケ置キタリ 尚居正其他国民政府ノ一部ニハ蔣ノ下野ヲ前提

門ノ戦蹟、富貴山砲台等ヲ視察ス 地下掩蔽部ノ設備実ニ規模大仕懸ニテ真正銘ノ要塞施設ナリ 未ダ十分完全ト云フ迄ニハ行カサル由ナルカ、費用ト日数ニ大分費シタルナランニ之ヲ利用スル抵抗案外少カリシハ作戰指導ノ拙劣ト軍隊ノ訓練不十分ナリシ結果ナラシカ、何レニシテモ 一兩年ヲ過セバ大シタコトニナツタモノダロト云フ感深シ

日本軍力英國大使館ノ自動車九台、米大使館ノ自動車六台強奪、尚南京自治委員ノ某及自動車一台掠奪サレ調査中トノ会報アリ 十二月二十七日 晴後曇 軍司令官支那傷兵ヲ見舞フコトヲ発意セラル 実ニ結構ナル思ヒ付キナルモ警戒上尚ホ注意要スルモノアリ 派遣軍車歌稍々完了、自信アル迄ニハ行カズ

十二月二十八日 曇後微雨小雪 軍隊ノ非違愈々多キカ如シ 第二課ヲシテ各隊將校会報ヲ招集シ参謀長ヨリ嚴戒スル如ク手続キナサシム——来ル三十日午前十時カラ実施スルコトニ定ム

中支那方面軍参謀・航空兵少佐

中山寧人 33期

【飯沼守日記】

十二月三十日

晴後曇

午前一〇・三〇ヨリ16D慰靈祭ニ殿下御親拜 午後一・三〇ヨリ南京及附近宿營部隊副官等ヲ集メ軍紀風紀殊ニ外国公館ニ対スル非違ニ就キ敵ニ注意ヲナス 佐々木少將(參謀司令官)又注意及要望アリ

方面軍中山参謀來リ参謀長一人ニ対シ、今回ノ外国公館ニ対スル非違其他ノ不軍紀行為誠ニ遺憾ナリトノ意味ノ傳達アリ恐縮ノ外ナシ 陸軍大臣参謀總長連名ニテ方面軍ニ対シ各國ノ動向極メテ機微ナルモノアル際十分注意スベキ旨ノ電報來リ披見ス 広東方面作戰モ之ノ關係上中止セラレタルヤノ口吻モアリ、何レカ是カ何レカ否カ皇軍ノ真価低落セル今日、正ヲ踏ンデ恐レスト邁進スルコトモ出來ス遺憾ト云フノ外ナシ、然シナカラヤハ大局ヨリ見テ堂堂々ト強ク押ササルヘカラルサルニアラスヤ

トシテ日本トノ平和交渉ニ入り度希望アル由ニ付 彼等ニ蔣下野後現国民政府ヲ解体シ新政権ヲ組織スルヲ先決要件トスル旨オモ伝ヘタリ

三十一日(欄外)

温宋堯、唐紹儀ノ代理トシテ来訪鮑廷蔭ノ下野外遊ヲ必要トスルコトヲ述ヘ 尚両広(広東・広西)ヲ独立セシメテ英國トノ關係ヲ遮断スルノ必要ヲ述フルニヨリ同意ヲ与ヘタリ 尚温ハ来春勿々唐ノ意ヲ承ケテ広東ニ至ルヘキ旨ヲ語レルニヨリ 当方モ和知大佐ヲ派遣シテ協力セシムル様談シ置ケリ 尚我軍ハ広東ヲ攻撃スルノ態度ヲ取ルコト両広工作上必要ナリト語レリ 此儀ハ研究ノ価値アリト認ム

昭和十三年(二五九八年)

◇一日元旦

陣中元旦 感無量 況ヤ予本年還暦寅年ニ会ス 此良年ヲ以テ宿志ヲ遂行セサル可ラス 朝屠蘇ヲ祝ヒ 十一時方面軍司令部ニ至リ一同ノ祝賀ヲ受ケタル後 東方ニ向ヒ遙拝式ヲ行ヒ了テ正午司令部員一同ト祝宴ヲ張り 兩陛下ノ万歳ヲ三唱ス 帰邸ノ後 各官ノ祝賀ヲ受ケ良元日ヲ祝福ス

昭和戊寅年頭所感

北馬南船幾十秋 興亜宿念顧多羞
更年軍旅人還曆 壯志無成死不休

◇一月二日

朝来長谷川長官、川越大使等ノ来訪ヲ受ケ諸般ノ問題ヲ語ル 塚田參謀長東京ヨリ帰来ス 其報告ニ依レハ

一、軍ノ作戰ニ関シ參謀本部ハ極メテ消極ニシテ 今後作戰範圍ヲ拡大スルヲ欲セス
二、今後ノ善後措置ニ関シテハ政府ハ未タ何等ノ決意ナク 或ハ国民政府トノ妥協モ意ヲ囑シ又ハ新政權ノ設立ヲ希望スルナト其腹ノ定ラサルコト予想ノ外ナリ
三、而カモ軍今後ノ謀略ニ就テ深キ熱意ヲ有セス 自然予ノ希望シ遣シタル人間ノ派遣ニ同意セス 殊ニ予カ直接大臣ニ書信ヲ与ヘタルニ係ハラス 之ニ返答スルコトナク次官トノ交渉スヘキヲ塚田少將ニ答ヘタルナト 其優柔不斷驚クニ耐ヘタリ
要之政府ヲシテ此際国民政府ニ見切ヲ附ケシムルコトカ今後ノ作戰并謀略ヲ実行スルノ要ヲ認メシムルノ先決要件ナルヲ感セシム 依テ大使館側及海軍トノ間ニ先ツ当地ノ意見ヲ纏ムルコト必要ナリト考ヘ 之レカ交渉方ヲ命ス
此日新年ノ書初ヲ行ヒ多数ノ旧詩ヲ録シ部下ニ分配ス

◇一月三日(曇、寒シ)

第十軍ニ命シ第百一師團ヲ上海附近ニ復帰セシムヘク命令ス
又冀二軍ノ直轄トスル国崎支隊ヲ奉勅命令ニ依リ北支那軍ニ復帰セシムヘク命令ス 本支隊ハ南京及上海ニテ乗船シ十二日乃至十六日出発ノ予定ナリ
午後海軍長官ヲ答訪シ上記政府ノ態度ニ付通報スルト共ニ 軍ノ作戰ハ今後小範圍ノ必要ナルモノニ限り其拡大ヲ行フコト能ハサル旨ヲ告ゲ セメテ桃中山(銅陵)、鉄砧位ノ占領ヲ行ヒ度意嚮ナルヲ告ゲ該地附近ノ情況ノ偵察ヲ依頼ス
又虹口地区ニ於ケル支那人ノ復帰ヲ海軍側力遅滞シアルハ 一般ノ情勢上面白カラサル旨ヲ告ケ努メテ速ニ復帰ヲ希望スルト共ニ 之カ為メ警備上兵力ヲ要スルナレハ 陸軍ニ於テ之カ援助ヲ各マサルコトヲ述ヘ来ル 蓋シ之ニ関スル海軍ノ真意不明 或ハ居留新民ノ甘心(一部ノモノ寧口不良ナル独占的思想者)ヲ買フ為ナラスヤ 考究ノ価値アリト認ム

李擇一日本慶応大卒、河北政務委員會最高顧問。松井大将の命により中支那方面軍囑託岡田尚と同行し、香港で宋子文と会談。(極東軍事裁判資料)

陳中孚一八八二年生 日本法政大卒。青島市長、広東国民政府が成立するとその政務委員にあげられた。吳佩孚と好し。(最新支那要人伝)朝日新聞社・昭16)

居正一八七六—一九五一 法政大学留學。国民政府司法院長など要職を歴任。(コンサイス人名辞典)

温宗堯 Wōn Tung-yao (一八七五—?) 政治家、広東の人、字は欽甫・香港香仁学院卒・米國留學一九〇三年帰国後外交部長補佐、一二年革命起るや、革命側に奔って岑春煊の国民公党の副会長として袁世凱の陣営と対抗、その帝制運動に激しく反対した、のち広東政府の外交部長となり、ついで同政府總裁となつて活躍、陳炯明の広東占拠後上海に退去、三八年維

新政府法制院長、四〇年国民政府立法院長に就任。(東京堂人名辞典)

唐紹儀一八六一—一九三八 広東省の人。コロンビア大・ニューヨーク大に学び、帰国後は外交官として活躍。辛亥革命で、北方代表として革命派と講和。民国最初の國務總理に就任し、袁世凱と対立して辞職。袁の帝制問題で第三革命に参加、外交專使として北方と交渉。以後、広東政府財政總長・国民政府委員・西南軍事委員など歴任。上海で暗殺された。(コンサイス人名辞典)

支那方面艦隊司令官海軍中將 特命全權大使 長谷川 清海兵31期 川越 茂

◇一月四日(晴)

河相*外務書記官來訪 東京ノ情勢ヲ聞ク 尚今夜大使始(メ) 外務省側一同ト会食ノ予定ナレハ其上重ネテ意見ヲ交換スル筈ナルモ 彼力意嚮ハ大体大亜細亞主義ノ実行ニ賛成シアルハ頼モシ

此夜川越大使以下大使館員并河相局長ヲ合セ時局善後談ヲ試ミ 先ツ

一、政府ヲシテ国民政府ヲ否認スル旨何等ノ形式ニ於テ声明セシムルコト

二、上海税関及塩税収入ハ其幾分ヲ英米銀行ニ委管セシメ 残部ヲ正金銀行ニ保管セシメ将来

南京政權ノ財源ニ使用セシムルコト

三、上海共同租界ノ行政及警察ニ日本ノ有力者採用ヲ強要スルコト

四、虹口租界ニ支那人ヲ自由ニシ 其繁栄ヲ謀ルコト

五、軍ノ占領セル虹口一吳淞間ノ地区ニ速ニ水道、電気、電話ノ施設ヲ完成スルコト

六、上海以外軍占領区域ニ逐次ニ外國人ノ居住往來ヲ自由ニスルコト

等ヲ協議シ 孰レモ意見ノ一致ヲ見タルニ依リ更ニ海軍トノ間ニ意見ヲ取纏メ 一面之ヲ東京ニ上申スルト共ニ現地ニ於テ実行スヘキモノヲ着々勵行スルコトニ打合セタリ

◇一月五日(晴)

陸海軍幕僚特務部ノ者共ヲ会合セシメ 昨日大使ト協議セル今後國策々定ニ關スル意見中國民政府否認ノ声明ヲ發表スルノ可否ニ付協議セシム 大体海軍モ予ノ意見ニ同意ニ付此ニ陸海、外務三方面ヨリ右意見ヲ夫々東京ニ具申スルコトニ談ヲ纏ム

此日船津辰一郎ヲ召致シ 時局ニ關スル意見ヲ聞ク 大体是亦予ノ意見ニ同意ナリ

◇一月六日(晴)

溫宗堯來訪 兩広獨立運動ニ關シ打合ヲナス 溫ハ八日 上海出發香港ニ向ヒ同地ニテ同志協議ノ筈ニ付 当方ヨリモ和地大佐ヲ能ハサレハ中井中佐ヲ香港ニ派遣シ 連絡ノ上協力セシムルコトニ約ス

兩軍參謀長ヲ召致シ情勢ヲ聞キ今後ノ諸件ニ付指示ヲ与フ 兩軍ノ軍紀風紀モ漸次取締ラレ緊肅ニ勉メツアルニヨリ今後最早大ナル憂慮ナキモノト認ム 尚今後軍作戦擴張ノ件ニ付テハ 東京トノ諒解ヲ得次第江北及浙江ヲ兩方面ニ向ヒ一部ノ作戦ヲ実行シ度予ノ意嚮ヲ告ケ夫々準備ニ怠リナキ様要求ス

其後ノ謀略漸次進行中ナルモ陸海外務ノ連絡充分ナラス 又各自夫々自己ノ意ニ從ヒ活動シ統一ヲ欠クノ憾アリ 市民協會ノ設立ノ如キハ全然陸軍ノ与リ知ラサリシ処ナルカ如キ其一例ナリ コンナ事テハ將來ノ事思ヒ遣ラレ 何トシテモ速ニ予ノ直轄ノ下ニ一大謀略機關ヲ置キ海軍、外務ノ人々オモ一団トナリ働ク様組織スルノ要ヲ痛感ス

三菱銀行上海支店長吉田氏來訪ス 今後ノ經濟問題ニ關スル意見ヲ聞ク 格別ノコトナキモ大体予ノ意見ニ反セス 是等ノ人モ將來特務機關中ニ包容 共ニ研究セシムルヲ可ナリト認ム

◇一月七日(晴)

島田俊雄、岡田忠彦、大口、原口等ノ政友議員團慰問ニ來訪スル 阿南人事局長各地ノ視察ヲ了り歸來ス 其報告ニ依レハ各軍共軍紀風紀其他ノ諸問題漸次振肅シ 作戰準備モ亦怠リナシトノ事 安心ス

先日來大使館、海軍トノ連絡ノ結果 此際我政府ヲシテ國民政府否認ヲ決定シ 何等カノ形式ニヨリ之ヲ内外ニ声明スルハ今後ノ作戦及謀略上重要ナリトノ意見ニ一致シ 之レカ意見具申ヲ大臣、総長ニ呈出スルト共ニ海軍及大使館ヲシテ各々夫々上申セシムルニ取計フ 尚之二關シ人事局長ニ托シ 近衛首相、広田外相、杉山陸相ノ連名ニテ私信ヲ認メ 右大方針ニ伴フ爾後ノ作戦及政策ニ關スル意見及之レカ実行機關トシテ上海ニ予ノ統轄ノ下ニ特ム機關ヲ設立

外務省情報部長 河相達夫
(敗戦時の外務次官)

顧ミレハ皇軍ノ奮闘ハ半歳ニ過シ其行(征)ク所(トコロ)常ニ必ス赫々タル(赫々ノ)戦果ヲ収メ我(カ)將兵ノ忠誠勇武ハ中外齊シク之ヲ絶讃シテ止マス。皇軍ノ真価愈々加ルヲ知ル。

然レ共一度深く(省ミテ)軍内部ノ実相ニ及ヘハ、未タ瑕瑾ノ渺カラサルモノアルヲ認ム。

就中、軍紀風紀ニ於テ忌(ハ)シキ事態ノ發生、近時漸ク繁(キ)ヲ見(耳ニシ)信ゼザラン

(ム)ト欲スルモ尚疑ハサルヘカラル(転)然タル(モ)アリ。惟

フニ、一人ノ失態モ全軍ノ真価ヲ左右シ、一隊ノ過誤モ遂ニ全軍ノ

聖業ヲ傷クニ至ラン。(中略)

或ハ沍寒ニ苦シミ或ハ極風雨ノ天苦ヲ嘗メテ、日夜健闘シアル

外征將士ノ心勞ヲ深ク思ヒツツ

モ、断シテ事変ノ完美ナル成果ヲ期センカ為、茲ニ改メテ、軍紀ノ振作ニ關シテ切ニ(切々)要望ス。

本職ノ真意ヲ諒セヨ。

昭和十三年一月四日

大本營陸軍部幕僚長 載仁親王

中支那方面軍司令官宛

歩兵第四十四聯隊長(高知)

歩兵大佐 和知應二 26期

歩兵中佐 中井増太郎 29期と思われ(後に昭14・9・12支那派遣軍附)

島田俊雄 衆議院議員立憲政友会代行委員、敗戦時の衆議院議長、「議會の白鬼」と言われ、その弁舌は反対党をふるえあがせた(平凡社日本人名大辞典)

岡田忠彦 内務省警保局長当時、虎ノ門事件で退官、政界に出馬、昭和十一年衆議院副議長、十四年政友会久原派幹事長、十七年衆議院議長、二十年鈴木内閣の厚相

大口喜六 田中義一内閣の大蔵政務次官、豊橋市の発展に尽くし、昭和十三年豊橋市名誉市長

人事局長 陸軍少将 阿南惟幾 18期

シ海、外、大蔵及商工省等ノ人員オモ網羅シ 今後ノ軍事、政治、經濟諸問題ヲ研究立案セシムルノ要アルヲ申遣ス

尚之レカ特務機關要員トシテ佐々木到一、和地大佐ノ兩人ハ是非必要ニ付速ニ之ヲ軍司令部付ニ任命スルコト 及成シ得レハ塚田少將ヲ第一部長ニ任命シ 其後任トシテ佐々木少將ヲ充當スルモ可ナルヘク 能ハサレハ佐々木ハ特ム要員ニ 參謀長ハ天津ニ在ル川辺少將ヲ充當スルモ可ナル旨申遣ス 又之レト共ニ今後軍ノ作戰及兵力減少ノ時機ニ関シ三月迄現情維持ノ必要ナル旨ヲ次長ニ伝言ス

第十師団ト連絡シ 徐州附近隴海鐵道ヲ占領シ 塩ノ運輸ヲ斷ツト共ニ 浙江ニ於ケル今後政權ノ範圍ヲ擴張スル為メ 今後或ハ江北、浙江ニ對シ小規模ノ作戰ヲ行フノ必要ナルコトオモ言付タリ(欄外)

◇一月八日(晴)

賀陽宮殿下大學教官ノ御資格ニテ戰場視察ノ為メ御來着 軍司令部ニ於テ一応主任者ヨリ戰況經過其他ノ所感ニ付御説明ス 殿下頗ル御元氣ニ且ツ熱心ニ御研究ノ状恐懼ノ至ナリ

◇一月九日(晴)

此夜島田俊雄一行ヲ晚餐ニ招キ 種々時局問題ニ付予ノ意見ヲ開陳ス 彼等大体ニ予ノ意見ニ同意 帰國後大ニ尽力スヘキ旨申述フ

先日來上海租界内ニテ兵ト外國巡查ノ衝突日仏兵ノ小衝突等アリ 大事ニハ至ラサルモ彼我感情上ノ阻隔ヲ免レス 先般バネー事件以來歐米等ノ態度稍強氣トナレルヤノ感アリ 自然支那人ニモ影響スルコトナレハ適時所要ノ手段ヲ講スルノ要アルニ至ルヤモ知レス 然レトモ此上諸外國ノ神經ヲ尖ラセルコトモ妙ナリ サレハ尚隱忍スルヲ可トス

◇一月十日(晴)

内地新聞ノ報ニ依レハ 昨日來東京ニ於テ閣議、内閣ト大本營トノ打合 參議トノ談合等行ハレ今後ノ對支政策ニ付一層具體的決定ヲ見タルヤノ模様 内容不明ナレトマア此ノ如キ漸次我政府ノ旗色明朗トナルコトハ 軍ノ作戰、謀略ノ上ニモ明快ナルノミナラス支那側ニ与フル感興モ不淺ト信ス 今後其結果ヲ知ルニ及ヒテ夫々積極的ニ行動スルヲ得ヘシト樂ム

◇一月十一日(曇)

此日南市初度視察ヲ行ヒ 第十軍兵站部砲工兵廠等ヲ視察シ 警備狀態ヲ見 兵站病院ヲ慰問ス

南市ノ破壊ハ予想外ニシテ大部分火災ノ為メ荒レ果テアリ 此模様ニテハ居留民ノ復歸モ涉々シク行カサルハ勿論ニ付 兵站司令官及警備隊長ニ旨ヲ授ケ 可成早ク多数ノ支那人ヲ復歸セシメ 我軍ニ懷カシムル様十分ノ考慮ト工作ヲ行フ様申付タリ 殊ニ警備隊ノ態度ハ矢張支那人ヲ寄付ケサル方便宜ニテ面倒ナシト云氣持ラシク 之レテハ到底南市ノ復活モ何時ニナルヤモ不計ニ付 是亦十分ノ注意ヲ与ヘタリ

兎ニ角軍隊ハ矢張飽迄軍隊ニテ 其氣持到底吾等ノ思フ様ニ行カサルハ当然ナルモ 其所謂支那膺懲、支那人蔑視ノ思想カ今後共善後措置ニ寧口障礙ヲ与フヘキコト想像セラル 何トカ方法ヲ考ヘサル可ラス

兵站病院ハ元中山病院ヲ利用シアリテ 其設備建物等完全ナレトモ水道、電氣未タ一部シカ通セサル為メ諸般ノ施設ニ不便多シ 然レトモ現在患者十五百名相當ニ看護セラレアリ 殊ニ最近赤十字救護班三班ヲ配屬スルコトナリ 既ニ其一班ハ來着シアレハ今後ノ看護其他ニ不都合ナシト安心ス

此夜谷元第六師(團)長ヲ晚餐ニ招キ色々ノ實戰談ヲ聞ク

歩兵第三十旅団長陸軍少將

佐々木到一 18期

北支方面軍參謀副長陸軍少將

河辺正三 32期

陸軍大學校教官騎兵中佐

賀陽宮恒憲王 32期

一月十一日 大本營、政府首腦による御前會議、支那事變處理根本方針を決定(國民政府が和を求めて來ない場合は、以後これを相手にせず、新政權の成立を助けるなど)

陸軍中將 谷 寿夫 15期(前第六師團長) 12・12・28 中部防衛司令官となる。

◇一月十二日（晴）

原田少将ヨリ政權樹立并政治、經濟^マ策ニ付既往研究ノ実況ヲ聞ク 大体最近順調ニ向ヒツツアルハ可ナレトモ尚肝緊（腎）ノ中心人物ニ唐紹儀力乗出スヤ否不明ニ付 是等ニ付更ニ外務、海軍ト密接ニ連絡シツツ工作ヲ進ムル様注意ヲ与フ 尚是等工作聊力不安ノ点アルヲ以テ南京ヨリ佐々木少将ヲ招致シ協同研究セシム

広西代表トノ連絡出来 不日王紀文香港ニ来ルトノ事ニ付 之ヲ連絡ノ為何文運ヲ香港ニ派遣シ当方ノ意嚮ヲ伝ヘシメ両広ノ懷柔ニ努メシム

◇一月十三日（曇）

軍占領地ニ於ケル各部隊カ地方物資ヲ占領保管シ 地方自治ノ復活上障礙トナリツ、アル旨大西派遣軍參謀表視ノ報告ヲ受ク 依テ豫テ各軍ニ訓示セル既徴発物資ノ処分等ニ付 軍ノ意図ヲ各部隊ニ徹底セシムルノ要ヲ感シ 參謀長ニ命シ各軍經理部長ヲ召集シ 状況ヲ確ムルト共ニ所要ノ指示ヲ与フルノ要ヲ述ヘ研究ヲ促ス

楠本大佐ヲ召致シ南市自治機關ノ設立其他ノ模様ヲ聞ク 大体緩徐ナカラ予ノ希望ニ向ヒツツアルコトヲ知リ一ト通安心スルモ 尚以後ノ指導ニ附注意ヲ与フ

全般的謀略ニ付テモ昨日原田少将ニ与ヘタルト同様ノ注意ヲ与ヘ 各方面トノ意志疎通ト連絡ニ努ムル様要求ス

◇一月十四日（晴）

賀陽宮殿下ノ戰跡御視察ニ同行シ 蘇州河ニ於ケル第九師團渡河戰鬪ノ跡ヲ見 Ⅲ／36（i）長清水少佐ノ戰歴談ヲ聞ク 見レハ戰場ハ左シタルモノニ非ス 当時敵ノ兵力ニ鑑ミ其渡河ノ差シタルモノニ非ルヲ知ルト共ニ 当時ニ於ケル我軍ノ志氣ノ程度モ回想スルニ足ル 殊ニ其

攻撃ニ昼間ヲ択ヒタルハ我砲兵威力ノ發揮ヲ欲シタルモノナルヘク 兎角ニ當時我軍ニ夜襲的企圖心ノ萎靡シアリシヲ察スルニ足ル

沿道 蘇州河南岸 殊ニ右岸地区ニハ大分支那人婦来シ 大道政府ノ巡查ナトモ配置セラレ漸次明瞭氣分トナリタルヲ悦フ

◇一月十五日（曇）

伊藤公使来訪 政府ノ態度 殊ニ独乙大使仲介運動今尚不熄 政府之ニ捉ハレテ逡巡シアルノ情報ヲ伝ヘ 政府ノ処決ヲ促スヘク策動ノ要アルヲ述フ 吃驚ス 依テ原田少将ヲ招キ再度目下ノ情勢ニ応スル軍ノ意見具申ヲ行フト共ニ 原田少将ヲ一応帰京セシメ当局ヲ鞭撻スルノ要アリトシ 之レカ熟議ヲ重ヌルト共ニ再度ノ意見具申ノ起案ヲ命ス

◇一月十六日（晴）

此日政府ハ国民政府ヲ今後對手トセサル旨ノ声明ヲ発シタリ 其真意審カナラサルモ一步吾等ノ主張ニ近ツキタルハ疑フノ余地ナシ 只何タカ未タ政府ノ決意ニ不安アルヲ以テ 矢張此際當地各方面ノ意見ヲ政府ニ進言シ 今後ノ覚悟ヲ鞏固ナラシムルト共ニ 今後之ニ応スル謀略ハ勿論 作戰ニモ一段ノ進境ニ進ムノ必要ヲ具申スルノ必要ナルヲ感知シ 伊藤公使、塚田、原田両少将ト熟議ノ上 右様決定シ 之ニ応スル當地ノ諸方針ヲ至急取纏ムヘク命ス

◇一月十七日（晴）

賀陽宮殿下昨日台湾ヨリ再度當地ニ着セラレタルニ依リ 午後御宿舍ニ伺候シ方面軍編成當時ノ経緯并丁集団上陸作戰ニ関スル當時ノ予ノ意見等ヲ御説明スルト共ニ 尚本作戦間予ノ経験ニ基ク所感ノ二三ヲ御説明ス 終テ会食ノ榮ヲ賜ヒ 朝日新聞社ヨリ寄贈ノ映画、万歳等ヲ見 一タノ歡ヲ尽ス

「夏（何は誤記）文運君は広島高師京大卒、夫人は日本人、香港、両広で反蔣工作に奔走した和知（應二）武官を助け、その黒幕的役割を演じた。その著書『黄塵万丈』は彼の行動の跡をつまびらかに述べている。幸い非運に遭うことなく、戦後来日して新宿で中華料理店を経営と聞き、深く安堵した」（宇都宮直賢32期回想録「黄河・揚子江・珠江」65ページ）

宇都宮少（中）佐は、当時、上海陸軍武官室勤務、のち陸軍省兵務局防謀班長を経て、昭和14、16中支那派遣軍（ついで支那派遣軍）渉外部長であった。

第二課參謀歩兵大尉 大西 一 36期

一月十五日 大本營、中支那作戰終了に伴い北支那要域確保のため第十六師團を上海派遣軍から除き、北支那方面軍編入を発令

一月十六日 政府、駐華独大使トラウトマンを通じて中国に和平交渉打切りを通告、近衛首相「爾後国民政府を對手とせず」との對華声明を発表

伊藤^{のぶみち}述史Ⅱ國際連盟日本事務局次長、ポーランド公使等を歴任。のち、三国同盟問題でドイツに派遣された。昭和十五年十二月新設された内閣情報局総裁となる。

告別の辞

第十六師團が將に本職の隷下を脱し重大なる新任務に就かんとするに方り忠勇なる將兵に告ぐ。回顧すれば師團は眞に江南の一角に上陸以來困難なる追撃戰を敢行し、連戰二閱月。

其の間常に軍主力戦斗の中核となり、善戦健斗常熟・無錫の堅陣を突破して、南京近くに進出し、敵國の首都の死命を制する東方高地帯、就中紫金山の要衝を攻陥し、遂に南京攻略の壮挙を完成し、赫々たる武勲を樹てたり。

本職深く其の勞を多とすると共に、陣没將兵の英靈に對し衷心敬弔の意を表す。今や戦局愈々多事ならんとするの秋、英氣横溢せる師團と戰場を異にするに至りたる

◇一月十八日(曇)

賀陽宮殿下午後二時発御帰朝セラルルニ付 王寶飛行場ニ御見送シ 終テ月浦鎮、楊行鎮ニ於ケルバラツク建設予定地等ヲ視察ス

附近支那人ノ一部ハ廢墟トナレル家屋ヲ仮修繕シ多少宛帰郷シアルヲ見ル 尚之等ニ生活ノ途ヲ与ヘ之ヲ帰服セシムルノ手段ヲ講スルノ必要ヲ痛感ス

本日ノ飛行便ニ托シ參謀次長宛謀略ニ要スル人事ノ速決ヲ促シ 尚今後軍力江北及浙江、安徽ニ向ヒ小基模ノ作戰ヲ行ヒ 寧波オモ攻略スルノ意図ナルコトヲ申遣ス

◇一月十九日(雨)

原田、塚田、武藤、公平ヲ集メ今後ノ謀略、作戰ニ関スル研究ヲ遂ケ 委曲明二十日飛行便ニテ原田少将ヲ帰朝セシムルニ取計フト共ニ 之ニ関スル当地ノ計画意見ヲ筆記具申スルコトトシ 同時ニ伊藤公使、岡崎外ム書記官ノ外 海軍側ヨリ一名ヲ帰朝セシメ海軍側ニ対シ同様説明セシムルコトトス

七夫、藤岡同道視察慰問ノ為メ着ス 依テ此夜会食久振ニ内地ノ便ヲ色々聞ク 尚寧波及浙江省ニ対スル今後ノ攻撃ニ就キ幕僚側ノ研究ヲ促ス

◇一月二十日(小雨)

東京市会議員及鐘紡代表者慰問ニ来訪ニ付 今後ノ対中支政策ニ関スル予ノ意見ノ一斑ヲ申聞ス

宮地貫道来訪 日々新聞ヲ軍ニテ買収ノ件ニ付希望ヲ申入ル 依テ金子少佐ヲ召致シ可成便宜取計フ様申遣ス

◇一月二十一日(曇後小雪)

此朝八時 北停車場発汽車ニテ杭州ニ行ク 尚清水書記官ヲシテ支那人数名ヲ伴ハシメ杭州治安維持会ト連絡セシムルコトヲ取計フ

滬杭鉄道ハ嘉興以西ノ破壊大ナリシ為メ漸ク去十七日杭州ニ開通スルニ至リタルモ 一同ノ努力ニ依リ今後毎日二百五十噸位ヲ輸送シ得ル程度トナレルハ可喜 沿道都市ハ相当ノ被害アリ 殊ニ嘉興ハ大部分破壊シ自然人民ノ帰来意ノ如クナラサルモ 概シテ滬寧鉄道沿線ニ比シ良好ニテ其恢復モ速カナルヘシト思ハレ 只沿線守備ノ後備大隊ノ一般地方安撫ノ意氣足ラサルハ遺憾ニ付 夫々激励ヲ与ヘタリ

杭州ハ予想以外ニ破壊セラレス一般ニ平穩ノ氣運漸ク漲リアルハ可喜モ 支那軍力退却ニ充分ノ準備時間ヲ有シタル為メ 殆ト官公私宅テノ物資ヲ持去リタル為メ 現情頗ル振ハス 治安自治ノ人々モ亦無力ニシテ 将来何等ノ方法ヲ講セサレハ自治復興困難ナリト認メタリ

(欄外)

◇一月二十二日(晴)

軍司令部 師団司令部ヲ訪ヒ野戦、予備ノ両病院ヲ慰問シ 更ニ靈隱寺附近ノ狀勢ヲ視察ス 軍司令官ノ態度可ナリ 殊ニ軍紀風紀ノ取締ニ努力セル形跡アルハ可ナリ 水嶋師団長ハ真劍ニ諸般ノ事ヲ処理シ最モ良好ナリ

軍司令部力軍隊ノ休養ニ重キヲ置キ新配備ニ就キタルハ既往ノ作戰直後トシテ已ムナキ事情アルハ諒トスルモ 為メニ一般ノ志氣ニ悪影響ヲ与ヘタル感アルハ遺憾ナリ

即予ノ希望セル錢塘江右岸ノ攻撃ヲ実行スル為メニハ 今後二十日ノ準備時日ヲ要ストノコトナルカ 此クテハ百十四師団ノ引上關係等ヨリ其攻撃実行不可能ト思ハレ 何等カノ便法ヲ講スルノ要アリ 研究ヲ促シ置ケリ

は、意に惜別の情に堪へざるものありと雖も、更に師団の重大なる使命を惟ひ、有終の美を確信し、万里の船行を送つて、其の武運を祝福せんとす。将兵夫れ自重自愛せよ。

昭和十三年一月十七日

上海派遣軍司令官 鳩彦王

一月十七日

グルー米国外使ハ広田外務大臣ヲ来訪シ南京、杭州及其他ノ地点ニ於ケル軍事行動中日本兵ハ米國權益ヲ無視シ又米國国旗ニ対シ穩当ナラサル行為ヲ為シタトノ報道ニ接シタトテ右報道ニ基キ米國政府ノ正式抗議ヲ申入ルル所カアツタ。

△二月十二日 外務省情報部長談△

『木戸幸一日記』當時、厚生大臣

一月二十日(木)雨

午前九時、首相官邸に於ける地方長官會議に參列す。

會議後、近衛公と懇談す。公爵

の話しに石原(莞爾)が來訪せり一時局については極度の悲觀論なり鮮満をも失ふに至らん云々。

一月二十一日(金)晴

午後四時半參内、五時拝謁、約三十六分に亘り地方統後施設につき奏上す。

最も戦死傷の多かりし第三及第十一師団管下の遺家族の氣持につき、特に御下問を拝したり。

『飯沼守日記』

一月二十一日 曇晴レ氣味

次長ヨリ次ノ電報來ル 在南京米國領事ノ報告ニ依レハ、一月十五日ヨリ十八日ニ米權下ヨリ日本兵カ婦女八名ヲツレ出シ、金陵大學ヨリ「ピアノ」ヲ壁ヲ破リテ持出シタリ 在南京外交官ハ無力、軍ハ其統制取レスト、在東京米大使ヨリ抗議アリト 今日尚如此兵アリトハ実ニ残念、然シ現ニ本日モ米國旗ノ在ル家ニ兵力掠奪ニ入り込ミ居ル処ヲ米書記官ト同行ノ憲兵取り押ヘタリト言ヘリ 米ノ抗議モ真実ラシ 然シナカラ当方トシテハ領事ニ如此電報ヲ中央ニ打ツハ最初ノ約束ト異リ怪シカラヌ旨抗議シ、彼ハ絶対的ニ打電ヲ否定セリ

在杭州宣撫ノ情況ハ上記杭州ノ実況上先ツ上海トノ交通ヲ容易ニスルコト必要ニテ 更ニ上海又ハ対岸ヨリ有力ナル人及物資ヲ入ルルコトモ緊要ト思ハレ 夫々当局者ニ注意ヲ与ヘ置ケリ(欄外)

◇一月二十三日(晴)

朝十時飛行機ニテ出発 湖州、平望等ヲ上空ヨリ視察シツツ龍華ニ帰着ス 湖州ハ殷盛ニテ宣撫ノ工作モ最モ可ナリ

当地方農村ハ一般ニ兵燹ニ罹レルモノ少ナク既ニ安穩ノ状態ニアルハ可喜

龍華附近及滬西地区警備及宣撫ノ状態ニ関シ佐藤少将等ヨリ報告ヲ聞ク 一般ノ状態漸次安穩ニ赴クモ尚住民家ナク帰来スルモノ極メテ稀ニシテ 我軍隊ノ宿泊スヘキ家屋モ充分ナラスト 宣撫ノ効果未タ緒ニ就カス 滬西地区既ニ解放スルモ外人共帰来スルモノ極メテ少数ニ過キス 要スルニ是等ノ状態ハ深く考慮スヘキモノニテ 各所避難所ノ措置等ト併セ研究スヘキモノト思ハル

◇一月二十四日(曇)

参謀次長ヨリ第百十四師団ヲ二月十七日ヨリ輸送スヘク 第十一師団ノ天谷支隊ハ南京附近ニ集結シテ速ニ海路出発ノ用意アルヘキ旨内報アリ

恰モ浙江方面作戰ノ必要ヲ痛感シアル際 百十四師(団)ノ帰還ハ大ナル故障ヲ生シ其実行殆ト不可能ニ陥ルヲ以テ之レカ善後策ニ就キ幕僚ノ研究ヲ促ス 思フニ参謀本部力数度ニ亘ル我意見具申ヲ無視シ 当地方政略關係ヲ顧ミス徒ラニ軍隊ノ転用ヲ計画スルノ妄ヲ歎セサルヲ得ス

曩ニ香港ニ差遣セル岡田尚帰来ス 其報告ニ依レハ宋子文ハ蒋介石ト離レテ当方面政權ニ合流スルノ意多少動キツアルモノノ如ク 日本ニシテ真ニ支那ヲ救済スルノ意ヲ以テ動くナレ

ハ彼ニモ浙江財閥ヲ掌握シテ国民政府ト分離スルモ避ケス 進テ我方ト此間ノ接衝ヲ試ムルノ意アリトノ事 右ハ宋美齡、宋子安等トモ協議ノ結果ナリト云ヘリ 此間ノ真意ニ多少ノ疑ナキニアラサレハ篤ト研究ヲ重ネタル上何分ノ措置ヲ講スルヲ要スト認ム 又福建陳毅ハ目下国民党部ノ軟禁ニ遭ヒ 進退自由ナラサレハ何トカシテ福州ノ現状ニ処シ或ハ福州ヲ離脱シテ後図ヲ図ラントスルノ意アリト云フ 是亦遽ニ信ヲ措キ難ク更ニ調査ノ要アリ

第十六師団長北支ニ転進ノ為メ着滬ス 其云フ所言動例ニ依リ面白カラス殊ニ奪掠等ノコトニ関シ甚タ平氣ノ言アルハ遺憾トスル所 由テ敵ニ命シテ転送荷物ヲ再検査セシメ鹵獲、奪掠品ノ輸送ヲ禁スルコトニ取計フ(欄外)

◇一月二十五日(晴)

此日羅店鎮、嘉定、南翔附近ノ戦跡ヲ視察シ地方ノ状態ヲ觀察スルニ 兎ニ角各所人家ノ大部破壊セラレ人民帰ルニ家ナキ様ニテ 嘉定県内ニ從來二十余万ノ人口アリシモノ今帰来セルモノ約二万二過キス 大部ハ春期ニ入ラサレハ復帰覚束ナキ状態ナリ但嘉定県城ニハ毎日尚百余名ノ帰来者アリ 地方治安ノ恢復ト共ニ漸次一部ノ復興ヲ見ツツアリ

瀏家鎮ハ尚帰来者三百余名ニ過キス最モ不成績ナリ 軍ノ宣撫工作ハ漸次成果ヲ挙ケツツアルハ事実ナルモ尚々研究ノ要アリ

◇一月二十六日(晴 寒シ)

川越大使帰朝ノ下命 不日出発ニ付来訪意見ヲ交換ス 大体予ノ意見ニ同シ 尚原田少将本日帰来ノ筈ナリシモ不着ニ付 明日其帰任ヲ待チ東京ノ情況ヲ確メタル上 更ニ今後ノ政治工作并作戰ニ関スル腹ヲ定メ 同大使ニモ伝言シテ当局ノ再考ヲ促スヘク決定シ幕僚ニモ研究ヲ命スルモ幕僚共モ一般ニ最早更ニ積極的ニ軍ノ最後ヲ全フスルノ熱意ト誠意足

岡田 尚^ル中支那方面軍囑託 松井大將の命を受け李樺一と香港に潜行、宋子文と接触。(極東軍事裁判資料)

陳毅^ル一九〇一—一九七二 一九三一年中華ソヴィエト臨時政府中央執行委員、長征の際、残留して華南で遊撃。一九三七年新四軍第一支隊司令。(のち中華人民共和國政府外交部長。人民解放軍元帥の称号を受けた) <コンサイス人名辞典>

『中島師団長日記』一月二十三日

一、午後六時ヨリ方面軍司令官邸ニ於テ会食ヲ催サル、此夜ノ御馳走ハサスガ上海ガ長崎ニ近イ丈アリテ料理人モ相当ノモノ材料モ中々珍シキモノアリ 鰯ノ生ノ塩焼ト瀬戸ノ鯛ノチリトハ極メテ美味ニシテ 南京ノ朝香閣ノ処ガ御氣ノ毒ニ感ジタリ

一、話中^ルかっぱらいの話あり 予ガ輕重機ノ分捕品ト小銃ヲ以テ裝備強化ノコトヲ語リタルニ對シ、大將ハ其ハ軍ニ差出シテ呉レネバ困ルトイフ様ナコトヲ述ベタリ、此男案外ツマラヌ杓子定規ノコトヲ氣ニスル人物ト見エタリ 次ニ国民政府ノ中ノかっぱらいノ主人ハ方面軍ノ幕僚ナリト突込ミタルニ、是ハサスガニしらばくれテ居リタリ 家具ノ問題モ何ダカケケケシタコトヲ愚須愚須言イ居リタレバ、國ヲ取リ人命ヲ取ルノニ家具位ヲ師団ガ持チ帰ル位ガ何カアラン、之ヲ残シテ置キタリトテ何人カ喜ブモノアラント突パネテ置キタリ

ラサルモノノ如ク 兎角ニ自重消極ニ陥ラントスルノ状ニアルハ遺憾ナリ
派遣軍ヨリ鳳陽攻撃ノ意見具申アリ 依テ攻撃後現配置ニ復帰スル条件ノ下ニ之ヲ認可ス
蓋シ津浦線ニ於ケル我軍ノ積極行動ハ目下ノ情勢上緊急ナリト認ムルモ何分參謀本部之ヲ認メ
ス 既ニ兵力ノ転用ヲ内命シ来リアル現状ニ於テ 妄リニ派遣軍ノ稟申ヲ認容シ難ク 殊ニ浙
江方面ニ対スル今後ノ作戰モ考慮スル時ハ 此際軍ハ全般の二今後ノ作戰方針ヲ定ムルノ要ア
ルヲ以テ一時右ノ如ク措置スルノ外ナキナリ

◇一月二十七日(晴)

原田少将帰任ス 其報告ニ依レハ東京政府ハ大体ニ於テ当方此後ノ政治、經濟方策ニ異存ナ
キモ 陸軍省ハ将来飽迄北京臨時政府ヲシテ支那ヲ統一セシメントノ意ナル由ニハ一驚セリ
外務、海軍ハ然ラスト「ノ」コトナレト陸軍側ハ主トシテ北京方面軍ノ意見ニ動カサレアルモ
ノノ如ク 參謀本部ハ必スシモ然ラストノコト 此ル思想カ從來当方面ニ於ケル謀略、作戰ヲ
掣肘シ来タレコト今ヤ殆ト明瞭ナリ 此妄ヲ啓クニ非レハ将来ニ於ケル中支方面ノ策動ハ凡
テノ困難ニ遭遇スヘク深憂ヲ禁セス 既ニ先般來当方面ハ一方日本側ノ消極ニ反シテ漢口政
府ノ軍事、政治兩方面ニ於ケル積極的工作及宣傳ト相俟チテ漸次ニ形勢悪化シツツアル際 此
際当方トシテハ之ニ対抗スヘキ積極的態度ヲ要スヘキハ勿論ナリ

而カモ東京陸軍側ノ態度如此ニテハ到底謀略、作戰共ニ予ノ欲スル底ノ工作ヲ実行スル能ハ
ス 何トカシテ此難境ヲ突破セサレハ 予ハ一万有余ノ忠靈ニ対シ地下ニ見ユルコト能ハス篤
ト思案ヲ要スヘシト覺悟セルモ 尚明日來着ノ筈ノ本間少将ノ意見オモ聴取シタル上決心スヘ
ク 不取敢明日帰朝ノ途ニ就ク川越大使ニ対シ 充分此間ノ事情ト予ノ意中ヲ説明シ 帰京後
一段ノ尽力ヲ頼ムコトトセリ

尚李思浩ハ一兩日来行衛不明トナリ当地ノ政治工作ニ一頓挫ヲ來セリ 是亦篤ト研究後図ヲ
策セサル可ラス

而カモ一昨日ハ敵飛行機ハ蕪湖、南京及杭州ノ各地ニ來襲シ 我軍ニモ損害アリシノミナラ
ス 江北滌湖ニ於テモ蕪湖ノ前面ニ於テモ千余ノ敵軍攻撃シ来リ 勿論之ヲ擊攘シテ相当ノ損
害ヲ与ヘタルモ 如此我方依然消極守勢ノ地位ニアリ反テ敵軍ヨリ空陸ノ攻撃ヲ受ケアル様
ニテハ 中々当方面政權樹立ナト思ヒモ寄ラサル次第ナリ 李思浩ノ遁亡ナトモ此間ノ消息ヲ
明ニスルモノナレハ此度ハ是非共何等カノ覺悟ヲ定メサル可ラス 尚当地財界要人昨今ノ態
度ハ却テ日々消極傍觀の二陥リアルハ上海ニ於ケル「テロ」団ノ脅迫等ニモ原由スヘク 併セ
テ何等カノ手段ヲ講スルノ要アリト認ム

◇一月二十八日

川越大使今朝出發帰朝ニ付 大使館ニ訣別シ目下ノ狀勢ニ関スル所見ヲ伝ヘ中央當局ノ鞭撻
ヲ托ス

軍今後ノ謀略并ニ作戰ニ関シ中央部ト意見ノ阻隔 之ニ対スル感想(欄外)

本間少将來着ス 其言ニ依レハ江南方面ニ対スル中央政府及軍部ノ態度尚明確ヲ欠クモノ多
キヲ感ス 政治工作、作戰方針共ニ然リ 殊ニ政策ト作戰トノ連繫ニ関スル參謀本部ノ態度充
分ノ一致ヲ見サルヤノ觀アルハ遺憾ナリ 蓋シ參謀本部ハ將來各方面ニ対スル責任感上 兎角
ニ尚支那方面ノ作戰ヲ努メテ短期内ニ終局セシメントノ希望已マス 自然北支、中支共ニ作戰
ノ不徹底ヲ免レサルニ至レルカ如シ 殊ニ陸軍省側力北支軍ノ意見ニ誘惑セラレテ全支那ノ將
來政局ニ関スル判断ヲ誤ラントスルノ感アルハ憂慮スヘキモノナリ 統率部ノ不斷ハ出先軍ニ
自然独断の措置ヲ必要トスルコトアルヘク 政策部ノ誤認ハ適宜ノ独断ト指導ニ依リ事實の二
其妄ヲ覺ラシメサル可ラス 何レニシテモ今後予ノ責任ハ重大ナリト痛感シ 要スレハ一身
ヲ犠牲ニスルノ覺悟スラ要スルコトアルヘキト覺悟セサルヲ得ス 一身ノ安ニ就クハ安シ 身
ヲ捨テテ國難ニ殉スル固トヨリ覺悟セル処ナレトモ 全軍統率ノ責任ナト考フレハ唯々一身ノ
腹切ル丈ニテハ全軍統率ノ責務ヲ完フスル所以ニモアラス 篤ト熟慮ヲ要スヘキノ秋ナリト自

中華民國臨時政府(昭和十二年十
二月十四日成立式舉行)大總統
は空席とし、政府委員長・王克
敏。

參謀本部第二部長陸軍少将

本間雅晴 19 期

『真崎甚三郎日記』

一月二十八日 金 晴

十一時江藤(源九郎)備役1期少
将)來訪、北支及上海方面ノ視察
談ヲ聞ク同君ハ自ラ日露戰爭ノ苦
キ実験アリ、今回モ主ナル責任者
ノ談ヲ交ヘテ研究セリ、從テ同君
ノ意見ハ相当ニ權威アルモノト云
ハザルベカラズ。之ニヨレバ一言
ニシテ云ハバ軍紀風紀頹廢シ之ヲ
建テ直サザレバ真面目ノ戰闘ニ耐
ヘズト云フコトニ歸着セリ。強
盜、強姦、掠奪聞クニ忍ビザルモ
ノアリタリ。

*

〔註〕江藤は当時、衆議院議員・
第一議員俱樂部所屬。『飯沼上
海派遣軍參謀長日記』によれば
一月六日、上海派遣軍司令部を
視察している。

戒ス

◇一月二十九日、三十日

參謀次長ヨリノ來電ニ依レハ 大本營ハ予ノ前後數回ニ亘ル公私意見ヲ採用セス 江北及西
浙地方ニ對スル軍ノ作戦行動ヲ行ハサルコトニ決定セリトノコト憤懣限リナシ 要之我陸軍ノ
大勢ニ通セサル作戦部ノ腹ナキニ因スルモノナレト 此クテハ到底當地ノ政權成立ニ大ナル支
障アルハ勿論ナリ 殊ニ昨今支那側ノ宣伝ト各方面ニ於ケル積極的作戦行動ニ對シ ドウシテ
モ其出鼻ヲ挫クコト緊要ナルニ係ハ「ラ」ス 軍力折角容易ニ此目的ヲ達成スルニ足ル兵力ヲ
徒ラニ擁シツツ無理ニ消極的態度ヲ固守スルコトハ 自然將來江南地方ニ對スル我軍部ノ熱意
ヲ表明スルコト能ハス 折角動キツツアル反蔣政客ノ決心ヲ鈍ラスコト明ナレハナリ
現ニ各方面ノ情勢ヲ見ルニ當地ノ政權運動ハ一頓挫ノ体ニアリ 而カモ數日前來着セル佐藤
安之助、高木陸郎等ヲシテ側面ヨリ支那側ノ空氣ヲ打診セシメタル結果 支那人間ニハ相當蹶
起ノ覺悟アリテ時機ノ到來ヲ待チツツアルハ事實ナルカ如シ 我方ノ態度今ニ於テ如此ハ真ニ
遺憾ニ禁セス 依テ更ニ各方面ノ研究ヲ促シ 万ノ場合ニハ予自ラモ決心セサルヘカラサル
コトアルヲ期ス

◇一月三十一日(旧暦元旦)

先日來來遊中ノ七夫、好春明後日帰國 佐藤、高木モ今日北支ニ向ケ出發ニ付 此夜會食
訣別シ 尚今後ノ諸問題ニ付協議ス

結局予ノ現任中此地ニ完全ナル政權ヲ樹立スルコト難ク 尚此様ノ政府殊ニ陸軍ノ態度ニテ
ハ今後仮令當地ニ政權ヲ設立スルモ其指導其他ニ許多ノ困難ヲ生スヘキニ付 予ハ此際強テ此
地ニ政權樹立迄ハ行カス 地方自治会程度ニ止メテ寧ロ一応内地ニ引上ケ 政府ヲ鞭撻シテ尔
後ノ諸政策ヲ立直スコトニ尽力スル方良カルヘシトノ意見ニ一同同意ス

仍テ七夫帰朝後 篤ト当地ノ状況ニ関スル予ノ意見ヲ陸相及多田次長ニ委曲傳達シテ其
再考ヲ促スト共ニ 佐藤、高木ハ一応北支ノ情勢ヲ觀察シ來リ更ニ當地ノ現況ニ即シテ援助ス
ルコトニ談合ス 勿論今後ノ情勢ニ應ジ更ニ考慮スヘキハ勿論ナレト 大体右様ノ覺悟ヲ定メ
置ケハ余リ心痛モナク一時ヲ糊塗シ得ヘク 予ハ心中極メテ遺憾ニシテ又忠靈ニ對シテモ申訳
ナキ次第ナレト 兎ニ角一時的措置トシテハ最早此位ニ思止ル外ナク 帰朝後更ニ政府ヲ鞭撻
シ陸海軍當局ノ妄ヲ啓キタル上 再渡支シテ最後ノ努力ヲ為スコトスルノ覺悟ヲ定メタル次
第ナリ

◇二月一日

今朝塚田參謀長ヲ召致シ大体上述ノ如キ予ノ意見ヲ述ヘタルニ彼等幕僚ノ欲スル処又如此
勿論之ニ同意ヲ表シタルニ依リ更ニ帰朝後 臼田、長ノ兩人ヲ召致シ意見ヲ叩キタルニ彼等ハ
飽迄之ニ同意セス 予ノ在任中如何ニモシテ政權樹立ニ遭キ付ケントノ決意硬ク 又其後支那
人トノ接衝ノ模様相當目的達成ノ見込アリトノコトニテ 李擇一等モ今後專ラ此運動ニ專念尽
力スルコトトナレル等申シ 予ノ決意ヲ促スコト頻リナリ

仍テ予ハ然ラハ兎ニ角其方針ニテ依然運動ヲ繼續シ 一面傳筱庵等ヲシテ上海自治機關ノ設
立運動オモ併行促進スルコトニ同意ヲ与ヘタリ

蓋シ其成否ハ勿論疑シキモ 矢張是迄ノ努力ヲ依然繼續スルコト固トヨリ予ノ本意ナレハ
暫ク彼等ノ意ニ從ヒ其成行ヲ見ルコトトスヘシ 但之レカ為メニハ要スレハ今後軍ノ作戦ヲ或
程度迄斷行スルノ必要アルヘク 之ニ関シテハ篤ト研究覺悟セサル可カラス 先ツ一応本間少
將帰國前幕僚會議ヲ開キテ 本間少將ヲ説得シテ當局ニ決意ヲ促スコトトシ 更ニ今後其情勢
ニ應ジテ臨機ノ措置ヲ講スルノ覺悟ヲ定メタリ 即本月五、六日頃ヨリ自ラ南京ニ至リ派遣軍
ノ情勢ヲ觀察シ 所要ノ措置ヲ執ルノ必要ヲモ感シ尚研究考慮スルコトトス

「戦面不拡大方針」。北支那方面
軍ノ作戦行動ヲ行ハサルコトニ決
定ニ軍には二月三日電報してい
る。

「畑俊六日記」(当時、教育総監)
一月二十九日 本日より二月六
日まで第七師団、第八師団留守隊
の教育状況視察の爲北海道、弘前
地方に出張。

支那派遣軍も作戦一段落と共に
軍紀風紀漸く頹廢、掠奪、強姦類
の誠に忌はしき行為も少からざる
様なれば、此際召集予備役者を
内地に帰らしめ現役兵と交代せし
め、又上海方面にある松井大將も
現役を以て代らしめ、又軍司令
官、師団長等の召集者も逐次現役
者を以て交代せしむるの必要あ
る。此意見を大臣に進言致しをき
たるが、出張前大臣に面会、西尾
(寿造)、梅津兩中將を南北軍司
令官たらしむるを可とする意見を
申述べ出張したる処、意外にも二
月五日夕青森に到着したる処本部
長より特使あり書状携帯、それ
によれば次官、軍務局長は余を松井
の後任に推薦し、余の後任は西尾
を可とする意見なりとの内報に接

し聊か面喰ひたる次第なるが、と
にかく帰京の上とし六日朝上野に
帰着したる処、大臣より面会した
しとのことにその足にて官邸に至
り大臣に面会したるに、大臣より
上述の如き申出あり。上海は方面
軍と二軍司令部との折合兎角面白
からず、此際現役者を以て交代せ
しむるを適當とすべく(以下略)

航空兵大佐 臼田寛三(25期)上海
方面軍特務部員として維新政府
の樹立工作に当たった。(宇都
宮直賢32期回想録)

中支那方面軍參謀歩兵中佐
長 勇 28期

傳筱庵ニ寧波出身。北伐前には上
海總商會會長、戦前上海通商銀
行總經理。上海戦後、浦東地区
の治安維持会は軍特務部楠本大
佐指導の下に親日和平を標榜す
る大同市政府となり、發展解消
して上海特別市となり、傳筱庵
が新市長に就任した。昭和十四
年双十節の翌日、十月十一日暗
殺される。(宇都宮直賢「黄河
・揚子江・珠江」による)

◇二月二日

曩二帰朝ノ途ニ上リ昨日帰来セル伊藤述史公使来訪 東京各方面ノ情况ヲ聞ク大体從來各方面ヨリ聞知セル所ニ異ナラス 要ハ政府殊ニ外務陸海軍ノ決意甚タ未タ心細ク 今後大ニ鞭撻ヲ加フルノ要アルトノ判断ニテ 唯近衛首相丈力相当ノ決意アルノミニテ 末次内相、風見書記官「長」等力唯一ノ後援者タル有様ナリトノ事ニテ 伊藤自身モ多分近ク帰朝ヲ命セラルヘク 今後寧ろ東京ニ於ケル画策ニ重要性アリトノ談ニ付 尚奮励尽力ヲ勧告ス

大川周明博士数日前来滬セルニ付 召致シテ予ノ意見ヲ色々開陳ス 彼ノ考フル所全然予ト同シキニ依リ寧ろ至急帰京シテ東京ニ於ケル尽力ヲ希望シ 彼亦之ヲ快諾セリ

尚今後当方面ニ於ケル思想、文化運動ニ付 大川氏ノ尽力ヲ希望セルニ是亦快諾シ 帰京後人選ト組織ニ付 攻究スヘキヲ約セルニ依リ 是亦近エ、末次兩人ト熟議シ東方文化事業部ヨリ出資セシメ 同文書院ノ組織等ヲ利用スルモ一案ナリト研究ヲ促シ置ケリ 尚当地ニ既ニ計畫中ノ「興亜会」ニ支那ノ学者等ヲ收容シ 彼等ヲシテ活動セシムルヲ可トスルノ意見ヲ述ヘタリ 之レ最モ適切ノ考察ナリト考ヘ研究ヲ進ムルコトヲ約ス

第十三師団ハ昨日鳳陽、臨淮関、定遠ヲ占領セリ 敵ノ抵抗ハ予想ノ如ク頑強ナラス自然当方ノ犠牲モ少シ マア之レニテ徐州方面ニ於ケル支那ノ宣伝的作戰ニ一蹴ヲ与ヘ得タルハ幸ナルモ 尚モ当方面ニ一層ノ強圧ヲ加フルノ要アルヘシト考フ(欄外)

◇二月三日

特務部謀略関係ノモノヲ集メ 政權樹立地方自治工作ニ関スル状況ヲ聞ク 其大要ニ曰ク

一、政權樹立運動ハ昨今漸ク本筋ニ入り来ルヤノ感アリ 李思浩ハ一時香港ニ遁レタルモ近ク帰滬スヘク 既ニ同人ノ各地ニ連絡セルモノ北支ヨリ二名来着セルアリ 温宗堯、梁鴻志、

陳群、張簫林等ヲ中心トシテ 二月中旬南京ニ華中政府籌備委員会ヲ組織シ 月内ニ政權樹立迄到達スルノ覚悟ヲ以テ画策ヲ進メツツアリ 其見込可ナリト

二、地方自治機關ハ蘇州、湖州等ハ既ニ相当ノ成績ヲ挙げツツアリ 最近周鳳岐自ラ杭州ニ到リ同地ニ自治委員会ヲ設立スル筈ナレハ 是等ノ諸機關ト前記政權ト連絡シテ地方自治ノ実績ヲ挙クルコトニ努ムヘク 上海ニ政權樹立後ニハ傳篋庵立チテ市政会、大道政府ヲ合同シテ上海市機關ヲ設立スルノ準備ニアリ

トノ事ニテ 大体是等ノ運動力具体化シアルハ可歎 殊ニ李擇一モ奮起シテ是等首腦者ノ連絡ニ当ルコトナレリト云フハ是亦相当ノ仕事ヲナシ得ヘシト考ヘラル

仍テ更ニ是等運動ノ妨害タル上海テロ団ノ清掃、新聞ノ取締等ニ一層ノ努力ヲ払ヒ 安シテ彼等ノ運動ヲ行ヒ得ル様 一般ノ情勢ヲ作為スルノ要ヲ述ヘ其注意ヲ促セリ

◇二月四日

豫テ上海派遣軍ニ於テ大場鎮西端ニ地ヲトシ表忠塔建設ノ計画アリ 本日其地鎮祭ヲ行フニ依リ列席ス 地ハ大場鎮西端旧陣地ノ一部ニシテ恰適ノ処ニテ 五百—三百米ノ地ヲ画シテ適宜地形ノ改造等ヲ行ヒ公園式様ノモノヲ設立スル計画ナリ 經費ハ派遣軍將兵一同ヨリ約四万円ヲ繰出シ兵力ヲ以テ土工ヲ為サシメ 記念碑ハ上海請負商ヲシテ三万円ニテ請負ハシムルコトニ定マレル由 大体ノ計画適當ナリト認メタリ 尚當日各師団參謀長等会同シ懷旧談ヲ交ヘテ会食シ 意義深キ地鎮祭ナリシ

本間少将南京、杭州ヲ視察シ帰来セルニ依リ 其後謀略ノ情况ヲ説明スルト共ニ一般支那人ハ少クモ徐州占領力政權ノ発達ニ必要ナリトスル感想多キ旨ヲ説キ 參謀本部力少クモ此際徐州攻撃ヲ決行スルノ決心ヲ定ムルノ要ヲ説キ 百十四師団ヲ江北ノ運河ヲ經テ陸路北支ニ転用スルノ利ナルコトヲ説明シ 參謀本部ノ研究ヲ促シタリ

尚将来軍力浙江、安徽方面ニ対シテモ其占領地域ヲ拡大スルヲ要スルトノ予ノ從來ノ意見ヲ

李思浩一八七九年浙江省生。安福派要人、財政総長、中国銀行総裁を歴任。(支那問題辞典)中央公論社・昭17)当初、新政権に参加の意思を示していたが、香港に逃れたため、新政権樹立工作は頓挫した。(日華事変をめぐる軍事・外交戦略の分裂と錯誤)防衛研究所戦史部部員・高橋久志論文による)

梁鴻志一八八二—一九四六 安福派の領袖として段祺瑞政權下で活躍。一九三八以降、日本の傀儡(汪)政権の行政院長などをとめる。一九四六銃殺。(コンサイス人名辞典)

陳群福建の人、胡漢民直系の反蔣派。維新政府内政部長。(前出)宇都宮直賢回想録による)

張簫林青幫の巨頭・阿片商人。一九四〇年八月、汪精衛の和平陣営に加担したというので重慶側のテロ団に暗殺された。(みずす書房・現代史資料「阿片問題」解説による)

図示シテ与へ 研究ヲ依頼ス

又軍編制ノ改変ニ就テハ敢テ異見ナキモ 軍司令官、參謀長ノ人選ニ付希望ヲ述へ 要スレハ予自ラ殘留スルコトオモ避ケサルコトヲ申含メタリ

◇二月五日(小雪)

田辺輝雄上海商務總會決議ノ意見具申案ヲ携帶シ来ル 由テ之ヲ披受スルト共ニ將來上海居留民ヲシテ真ニ大局の見地ニ立チ日支提携ニ努力スル様指導方依頼スルト共ニ 今後ニ於テモ進テ適時意見ヲ特務部ニ向テ開陳セラレ度キ旨申含ム

◇二月六日

朝八時出發汽車ニテ南京行

沿道ノ状況凡テ著ク鎮靜ニ動キ各地避難民モ漸次帰来シ 各地自治組織ノ成立シツツアルハ可欣モ 未タ一般ノ状況中々容易ナラス 支那人民ノ我軍ニ対スル恐怖心去ラス寒氣ト家ナキ為メ帰来ノ遅ルルコト固トヨリ其主因ナルモ 我軍ニ対スル反抗ト云フヨリモ恐怖 不安ノ念ノ去ラサルコト其重要ナル原因ナルヘシト察セラル 即各地守備隊ニ付其心持ヲ聞クニ到底予ノ精神ハ軍隊ニ徹底シアラサルハ勿論 本事件ニ付根本ノ理解ト覚悟ナキニ因ルモノ多ク一面軍紀風紀ノ弛緩力完全ニ恢復セス 各幹部亦兎角ニ情実ニ流レ又ハ姑息ニ陥リ 軍自ラヲシテ地方宣撫ニ当ラシムルコトノ寧口有害無益ナルヲ感シ浩歎ノ至ナリ

六時南京着 直ニ大使館ニ投シ夜朝香殿下ノ御招宴ニ列ス 殿下ハ切ニ江北方面ニ於ケル作戰ノ必要ヲ述ヘラレ 又現兵力ヲ以テ裕ニ宿県辺迄ハ守備スルニ足ルコトヲ以テセラル御同感ノ次第二ニ此以上積極的行動ハ 中央ノ考ノ変ル迄ハ可慎モ現状ヲ保持スル丈ハ異存ナキ旨申入レタリ 尚軍紀風紀問題ニ就テハ矢張第十六師團長以下ノ言動宜シカラサルニ起因スルモノ多キ旨語ラレ 全ク從來予ノ觀察ト同様ナリ

◇二月七日

朝軍司令部ニ至リ軍司令官及參謀長ノ報告ヲ受ケ尚幕僚ト懇談ス 各課長ノ意見モ矢張江北作戰ノ必需性ト容易性ヲ説キ多少後方守備ノ兵力ヲ増加セハ 現第十三師團ノ兵力ヲ以テ広ク宿県ヨリ芦州(合肥)ノ線ヲ占領スルニ適スヘク 後方補給モ亦現機關ヲ以テ実行シ得ル見込充分ナル旨ヲ聞ク

午後慰靈祭ニ参列ス 予ハ去年南京入城翌日最初ノ慰靈祭ヲ自ラ祭主トシテ営ミ 今日亦五日祭トモ云フヘキ此祭事ニ遭フモノナレト 曩ノモノハ戰勝ノ誇ト気分ニテ寧口忠靈ニ対シ悲哀ノ情少カリシモ 今日ハ只々悲哀其物ニ捉ハレ責任感ノ太ク胸中ニ迫ルヲ覺エタリ 蓋シ南京占領後ノ軍ノ諸不始末ト其後地方自治、政權工作等ノ進捗セサルニ起因スルモノナリ 仍テ式後參集各隊長ヲ集メ予ノ此所感ヲ披露シテ一般ノ戒飭ヲ促セリ

忠靈(病死共) 一八、〇〇〇〇余

斃馬 一一、〇〇〇〇頭(欄外)

終テ宣撫委員ヲ集メ其後ノ状況ヲ聞クニ 目下南京城内居住三十万ノ人民中十万余ハ城内ノ旧所ニ復歸シテ概ネ我軍ニツツアルモ 尚半ハ不安ト外人側ノ庇護トニ因リ復歸セサルハ遺憾ナルモ 漸次著敷好況ニ進ミアリ 只自治委員ノ顔振レ如何ニモ貧弱ナルハ 財源ナキ為メ其施設ノ見ルヘキモノナキモ其一因ナリ 將來交通ノ恢復ト物資ノ出入ノ便ヲ講スルコト目下ノ急務ナリト意見ナリ 尤モノコトナリト思惟シ夫々機關ニ其旨ヲ伝ヘ今後ノ活動ヲ要求ス

支那側ノ自治委員ノ各員ト会見ス 彼等モ頌德ノ意ヲ表スルニヨリ 予モ其奮勵協力ヲ希望シ置ケリ(欄外)

◇二月八日

『飯沼守日記』

二月七日 曇夜晴

一・三〇ヨリ派遣軍慰靈祭、終テ松井軍司令官ヨリ隊長全部ニ対シ次ノ要旨ヲ訓示アリ 南京入城ノ時ハ誇ラシキ氣持ニテ其翌日ノ慰靈祭亦其氣分ナリシモ本日ハ悲シミノ氣持ノミナリ 其レハ此五十日間ニ幾多ノ忌ハシキ事件ヲ起シ、戦没將士ノ樹テタル功ヲ半減スルニ至リタレハナリ、何ヲ以テ此英靈ニ見ヘンヤト言フニ在リ(朝香宮)殿下亦御列席ニ殿ニ対シ奉リ誠ニ申訳ナキ氣持ニテ歸来早速御断ヲ申上ク(式後松井司令官ノ訓示ハ凱旋氣分相当ニ横溢シアルハ怪シカラヌトノコトモアリ)

松井將軍軍紀引締めを命令
日本軍兵士の行為についての非難に直面して厳命(南京・二月七日)同盟・松本重治電報)

戦死した日本軍將兵追悼式後の厳肅な雰囲気の中で派遣軍総司令官松井石根大將は、本日、部下指揮官に対し「帝國陸軍の威信を高めるために」各自の指揮下部隊における軍紀を引き締めるよう訓示した。

風吹きさらす南京練兵場で訓示を受けた高級士官の中には、皇族の朝香鳩彦王中将宮殿下も列席していた。

戦争状態の長期化が予想されるため、日本軍部隊の決意に関して長い時間をかけて語った松井將軍は、部下將兵に対し、日本軍の威信に影響を与えている種々の報道に終止符を打たせる必要性について注意を喚起した。

日本陸軍の歴史上未曾有と言われる將軍のこの訓示は、日本軍の報道された軍紀違反について不利なコメントが繰り返される事態に直面して行われたものである。

*二月八日付「ノースチャイナ・デیلی・ニュース」掲載(上海)
原文英文は「南京戦史」に掲載

朝兵站病院ヲ慰問ス 目下ノ患者數六百二過キス其過半ハ平病ナリ 近ク窒扶斯^{チフス}多少増加ノ状ニアルモコハ主トシテ第十六師團ノモノニ屬シ 其後病源地方モ明瞭トナリタレハ今後蔓延ノ患ナシトノ事ナリ 只病院ノ施設ハ未タ充分ナラス 數日前赤十字救護班(約五十名)ノ來着ニヨリ大ニ病院氣分ヲ更メタルモ 尚設備其他ニ改良ヲ加ヘルノ要アリト認メ右要求シタリ 午大使館員等ト会食ス 宣撫工作ニ就キ予ノ意圖ヲ伝ヘ一同満足セリ 尚外國關係ハ其後各方面ノ尽力ニ依リ感情融和シ 此以上面倒起ラサル見込ナル旨承知シ安心セリ

昨夜軍司令官ノ会食アリ 各隊長等五十余名來会盛會ナリ 予ハ宣撫ニ付希望ヲ述ヘ兎ニ角支那人ヲ懷カシメ 之ヲ可愛カリ憐ム丈ニテ足ルヲ以テ 各隊將兵ニ此氣持ヲ持タシムル様希望セリ(欄外)

午後二時飛行機ニテ出發 揚州、江陰上ヲ過キ五時上海帰着ス

機上ヨリ見タル処ニテハ各農村ハ格別ノ被害ナキモノノ如ク 揚州附近モ極メテ安寧ナリ

但地方ノ船舶ハ極メテ少ク恰モ北方ニ牽致セラレタルモノノ如ク 今後江北運河、湖水等ノ作戰利用ニハ船舶ノ徵用殆ト不能ナリト認メラル

鎮江ハ一般秩序ノ恢復比較的可良ナルモ 常州、丹陽、常熟等ハ最モ不良ニテ無錫之二次キ蘇州ハ最モ好成績ナリ 戰鬪ノ被害程度ト地方自治機關ノ作用ニ依リ異ルモノノ如ク 丹陽附近ハ最モ人氣惡シキトノ事ナリ 其原因不明ナリ

◇二月九日

不在中第四百十四師團及其他ノ兵站諸隊北支転用ニ付指示アリ 未タ正式命令ナキモ逐次処理スルノ要アリ 數回二巨ル公私意見具申ト其他ノ方面ヨリノ運動ノ結果 去五日ノ政府ト大本營トノ連絡會議ニ望ヲ囑シ居タルモ 此模様ニテハ是モ最早望ナシト認メ 断念シテ百十四師團ニ鐵道ニ依リ上海附近ニ集結ヲ命令ス 南京占領後浙江ニ對スル予ノ作戰計畫ハ之レニテ全然放棄スルコトトナリタル次第 遺憾限ナキモ已ムナキ次第ナリ 但シ江北作戰丈ハ当分差止

メ命令ノ來ル迄少クモ現情ヲ維持スル考ヲ棄テス

松室少將ヲ召致シ其後ノ謀略狀勢ヲ聞クニ 全般的ニ多少進展シツツアルトノ事ナルモ政權籌備委員會迄漕キ付クルコトハ 目下ノ狀勢上尙各方面ノ遲疑ニヨリ成立ノ見込少キニヨリ先ツ「自治聯合會」位ノ名義ニテ 全般的自治機關ノ結束ト今後ノ政治策動ノ基礎ヲ作ル方針ノ下ニ進ミツツアリト「ノ」コト 万已ムナキ次第ナリト諦ムル外ナシ 最早予ノ歸朝ノ期モ迫リ居レハ何トカシテ予ノ在任中ニ一応ノ階段的基礎ヲ作ラント 一同ノ尽力ハ多トスル所ナルモ矢張昨今ノ形勢力思フ様ニ進展セサルハ遺憾ノ至ナリ

◇二月十日

本日ヨリ司令部ヲ上海日本女學校ニ移ス 現在ノモノ手狭ニシテ將來司令部ノ編成替等ニ応シ難キ力故ナリ 勿論一時過渡的ノモノニテ將來ノ為メニハ更ニ工夫セサル可カラス

東京ヨリ使者來着 新中支那派遣軍司令部編成要領并ニ人事ノ書類ヲ持チ來ル 畑大將^{マサヒロ}新司令官ニ川辺少將參謀長ニ予定セラレ 其他ハ現在方面軍及兩軍ノモノヲ適宜充當セルモノナリ 予ノ離任ハ實際自負ニ非ルモ時機尙早ナルコトハ万人ノ認ムル処ナルヘキモ 中央陸軍部ノ妄 如此テハ予力徒ラニ留任スルモ其効果少ク 寧ロ歸朝シテ各方面ト接衝シテ今後ノ對支那政治并軍事政策ヲ根本的ニ立直スコト緊要ナリト考ヘ 寧ロ喜テ離任ノ覚悟ヲ定メタリ 然レトモ何トカシテ出發前占領地域ニ於ケル政治的工作ノ基礎ヲ作り置クコトハ 予個人ノ名譽ト忠靈ニ對スル責任ヲ別ニスルモ 今後後任者ノ仕事ヲ容易ニシ國策ヲ進行ニ便スル為メ最後ノ努力ヲ要スルモノト考ヘ 夫々研究ヲ促スト共ニ 明日位一同ヲ会シテ今後ノ方針ト予自ラノ活動ヲ試ムル様指示スル考ナリ 然レトモ余ス時日ハ僅二十日ニ達セサレハ此成功モ甚タ心元ナク痛心ノ至ナリ

◇二月十一日

『上村利道參謀副長日記』 二月八日 晴

首都飯店玄関ニ於テ松井軍司令官、朝香宮軍司令官殿下ト共ニ記念撮影 松井軍司令官兵站病院見舞 挹江門脇ニ於テ支那軍戰死者ノ慰靈祭ヲ取り行フ 「敵ニハアレト亡キガラニ花ヲ手向ケタル武士道ノ情ケナリ」自治委員會ノ一行、日支ノ僧侶參列ス

『畑俊六日記』

二月八日 本日午前十時大臣より来てくれとのことに往訪、大臣は今北方が近く作戰するに南方が整理するは適當ならずと思考するも、中支方面の三司令部は各異なるイデオロギーにて勝手なることを云ひをり、松井は初めは此の如き大軍はいらぬと云ひ居たるに、近來は元來余は作戰より戦後の經營の爲に出されたるものなりとの処見を述べ、中支にも北支よりも更に大なる政權を樹立し寧ろ南主北従の如き考へを有し、柳川司令部は政權など思ひもよらず此方面の兵力を三師團位とし其他は北方に備ふべしとの意見を吐き、殿下の司令部は尚作戰を継続すべしとの意見にて各思ひ思ひの意見を吐き其間の統制面白からず、兵力は次として司令部は一日も早く取換ふるを可とする參謀本部の意見なれば速に出發せられたしとのことなり。余は其件ヲ承したるも少尉中尉ではあるまじ、そんなに急ぐに當らずと申述べ(以下略)

今日ハ紀元節日 朝来日本晴ナリ 上海居留民団ニテ建国祭ノ催アリ 依テ予ハ朝司令部ニ於ケル遙拝式及内宴ヲ済マセタル後 幕僚ヲ伴ヒ先ツ上陸以來初メテノ上海神社及招魂社ニ参拝シタル後 同建國祭ニ参列シ居留民一同ト共ニ大日本帝國萬歳ヲ三唱ス 感無量ナリ 蓋シ上海居留民団ニ対スル予ノ直接奉仕ノ初メニテ而カモ終リナリト考フル時 惜別ノ情ト責任感トハ予ノ胸中ヲ左右スルノモ少カラサレハナリ 神威冀クハ上海ノ皇運發展ニ幸アレト祈念スルノミ

奉祝紀元節

征戰不憂歲月遷

妖氛輶晦北西邊

陣中奉祝紀元節

寄思二千六百年

原田少將、臼田大佐ヲ召致シ其後政權工作ノ推移ヲ聞クニ 李擇一等ノ尽力ニ依リ梁鴻志、溫宗堯、陳群ノ聯絡モ略々成リタレハ 之レニ既ニ杭州ニテ活動中ノ周鳳岐ト蘇州ノ陳則民等ヲ中心トシ 之レニ王士惠等ノ集メアル青年組ヲ合シ二十日頃迄ニ「聯合自治委員會」様ノモノヲ設立スルノ運ニアリト云 マア此程度ニテ新政權ノ基礎トシ徐々ニ各地人オヲ集合シ 今後ノ形勢ニ応シ國民大会、南北政權合流等ノ工作ヲ經テ 對國民政府反政權ヲ南京又ハ北京ニ設立スルノ計画ニテ進ムコトニ決意セリ 尚之レカ為メニハ此等ニ財源ヲ与フル為メ税関、塩税等ノ処理ト對租界問題ニ一進展ヲ劃スルノ必要アリ研究ヲ促ス

二月十二日

李擇一ヲ召致シ政權運動ノ経緯ヲ聞ク 彼亦大体近々自治聯合挙旗ノ成算アル旨ヲ語ルモ 果シテ予ノ出發迄ニ間ニ合フヤ否ヤ確カナラサル如キヲ以テ之ヲ激勵シテ尽力ヲ促ス 岡田尚モ同様 又清モ此度臼田ノ部下トシテ働クコトトナレリ 船津辰一郎ヲ召致シ周作民及袁良引出ニ付尽力ヲ頼ム 周ハ意アルモ直ニ政治的方面ニ乗出ノ決意ナキ如シ

二月十三日

日高参事官、岡本総領事ヲ召致シ 税関問題ノ速決ヲ促シ已ムヲ得サレハ強硬手段オモ辞セサル予ノ決意ヲ告ケ之ヲ激励ス 尚共同租界問題モ先ツ警視總監問題ノミヲ先決トシテ 片付ケル方目下ノ情勢上緊要ナル旨ヲ告ケ 更ニ其工作ノ促進ヲ希望ス 又仏租界問題ニ付テモ更ニ同租界内ノ取締 殊ニ新聞ノ取締法ニ付考慮ヲ促スモ 特別ノ案モナキニ依リ原田少將ヲ促シ セメテ惡新聞ノ共同租界ニ於ケル発売禁止等ノ方法ヲ講シ惡新聞ノ流布ヲ止ムルコトニ努力ヲ要求ス

午後萱野長知ヲ召致シ政權運動ノ側面觀ヲ聞ク 大体其見ル処前記ノ如ク寧口此際強制的ニモ挙旗ノ緊急ニシテ有効ナルヘシトノ意見ナリ 仍テ兎ニ角今後モ臼田大佐等ヲ補佐シ 殊ニ今後同盟會、國民黨出身者ノ操縦利用ニ付尽力ヲ依頼ス 又陳中孚ヲシテ惡感ヲ抱カス暫ク辛抱シテ適時共同協力スル様伝達方依頼ス

北支ニ転進スル第百十四師團長以下其一部上海ニ着ス 十六日より二十四日ニ亘リ逐次大連ニ向フコトニ船繰セル旨報告ヲ受ク 万已ムナキコトナリ

二月十四日

此朝十時 吳淞元砲台跡ニ建設ノ計画中ノ「聖戰記念塔」ノ地鎮祭ヲ営ミ 海軍長官等ト共ニ参拝 無滞式典ヲ終ル 此地ハ最初ノ上陸作戰當時苦戰ノ跡ニテ吳淞港ヲ望ミ記念塔ナト建設ニ適合ノ地ナレハ 此ヲ挾ミ尚附近約三十万坪ヲ公園トシテ設計シ將來ニ於ケル吳淞区特別市区ノ遊覽所タラシムル計画ニテ 經費ハ豫テ各方面ヨリ軍ニ寄贈セラレタル慰問金ヲ基礎トシ海軍ト協同出資トシ 不足ハ陸海軍省恤兵金ヨリ補ヒ約十萬円ノ予算ヲ以テ完成ノ計画ニテ外ニ上海居留民団又ハ今後編成セラルル中支派遣軍等ノ協力ニ依リ 公園地内ノ設備及上海神社等ノ設立ヲ行ハシメ度希望也

王士惠ハ早稲田大学卒、福建の人。當時、上海武官室在勤。のち汪精衛政府顧問・岡田西次（主計少將）の回想録「日中戦争裏方記」によれば、方面軍司令部部員・臼田寛三大佐の知遇を得ていたという。維新政府実業部長となる。

「畑俊六日記」

二月十四日 本日午前十一時より昭和十二年度教育上奏をなす。引続き十一時五十分親補式を行はせられ中支那派遣軍司令官に補せらる（陛下は中支那と詔せられたり）。

リ近ク章士釗、勇毓萬、湖南ヨリ□□来集スルノ予定ニシテ 李思浩モ其内帰還スヘシトノコトナリ 但袁良ハ蔣介石ノ招電ニ応シ数日前香港ニ行キタル由 事実不明ナルモ或ハ一身ノ危険ヲ虞レ隱遁シタルニ非サトモ思ハル 又揚州ノ警務員 吳孝侯ナルモノ江北二十八県ヲ代表スト称シ 江南地方政權運動ニ参加ノ希望ヲ以テ来訪セルニ依リ 臼田大佐ニ紹介シ今後ノ指導ヲ托ス

陳中孚ノ措置（欄外）

此日宇野海作、山田純三郎ト共ニ来訪セルニ依リ会食シ 山田ニ托シ過般来陳中孚トノ臼田等ノ感情阻隔ニツキ慰メ 今後協力時局ニ貢献スヘキ旨伝言ス

◇二月十六日

軍司令部ノ訣別（欄外）

朝軍司令部ニ到リ 方面軍幕僚其他部付將校一同ニ対シ訣別シ 左ノ要旨ノ訓示ヲナス
一、今後内外ノ情勢ヲ察スルニ今後軍ノ作戰ハ少クモ北徐州ヲ陥落セシメ南錢塘江対岸ノ殘敵ヲ掃蕩スルヲ必要ナリト認ムルコト

二、支那人ノ宣撫及軍將兵今後ノ言動ノ時局解決上極メテ重要性アルコトヲ説キ 軍紀、風紀ノ振肅等亦緊要ナルモ 更ニ軍ニシテ支那人ニ対スル宣撫宜シキヲ得サレハ北支那駐屯軍多年ノ努力ノ如ク却テ日支ノ提携ニ惡影響ヲ与フル虞アルコト

三、軍ハ今後ノ情勢ニ応シテハ或ハ大本營ノ意圖ヲ超越シテ行動セサルヘカラサル場合ナキヲ保セス 此場合ニ於テハ幕僚以下一団トナリ能ク司令官ヲ補佐シテ一意其司令官ノ意圖達成ニ努力スルノ覚悟アルヘキコト

尚南京占領後二ヶ月間ニ於ケル大本營及政府ト予ノ意見ニ相違アリテ 遂ニ予ノ欲スル処ヲ実行シ得サリシ苦衷ヲ述ヘ 今頃万事ヲ中途ノ儘ニ帰還スル予ノ胸中ノ苦悶ト感慨トヲ述ヘタリ 右ハ方面軍幕僚以下力真ニ予ト一心同体トナリ 作戰ニ謀略ニ努力スルノ誠意十分ナラサ

リシト認ムル予ノ意中ノ一端ヲ諷示シタル意ナルカ 一同果シテ之ヲ如何ニ解セシヤハ不明ナリ

正午 岡本総領事ノ催ニヨリ日本俱樂部ニ於ケル送別会ニ列ス 岡本総領事ヨリ一同ヲ代表シ感謝の挨拶アリタルニ対シ 予ハ出征間予ノ強硬ナル言動ニ対シ相当ニ大使館側力努力シテ呉レタルコトヲ感謝スルト共ニ 予個人ハ其責任ト從來ノ抱負トニ鑑ミ誓テ再来シテ時局ニ尽力シ度 今後共協力ヲ希望セリ

◇二月十七日

臼田、長兩人ヲ召致シ其後政權運動ノ経緯ヲ聞キ 努メテ梁、陳等ノ意見ヲ採リ 温宗堯ノ理想的考案ヲ避ケ漸進主義ニ指導スヘキコトヲ論ス

唐紹儀ニ返書ヲ認メ時局柄是非発奮 万難ヲ排シテ東亜百年ノ為メニ尽力センコトヲ依囑ス 此日蛙埠ニ来襲セル敵機数機アリ 我陸軍機之ヲ迎撃シテ其二機ヲ撃墜ス 蓋シ事変以来我陸機ノ最初ノ成功ナリ 敵機ノ操縦者、機ノ種類等未タ明カナラサルモ 多分蘇国人ノ蘇機ヲ使用セルモノト察セラル

◇二月十八日

此朝大場鎮ニ建設スヘキ「表忠塔」ノ題字及其下ニ刻記スル為メ 予ノ大場鎮陥落即吟ヲ書ス即

惡戦力闘三閏月

包夷拔墨斃不已

神威敵陣旭旗翻

欲饒忠靈幽寂裏

昼長谷川長官以下幕僚及日高、岡本、田尾、岡崎ノ外務書記官ヲ招待シ訣別ノ会食ヲナス 軍ノ編合整理ハ決シテ兵力ヲ著シク減少セス 将来要スレハ漢口ニ対スル攻撃ニ要スル兵力ヲ保存スルモノナルコトヲ語り 内外人ノ誤解ヲ惹起スルコトナキ様希望ス

章士釗 Zhang Shi-zhao 一八八一—一九七三 英國に留學、北京大學校長。一九一三第二次革命に参加、敗れて、日本に亡命。イギリスの自由主義を主張、妥協的な政治路線を歩む。第二次大戦後の国共和平会議の国民政府側代表となる。（コンサイス人名辞典）

「畑俊六日記」

二月十六日 午前十一時参内、拝謁仰付けられ優渥なる勅語を賜ふ。恐懼に堪へず。之に對し、優渥なる勅語を賜はり誠に恐懼に堪へませぬ。微力を尽して以て聖旨に副ひ奉らむことを期します。

と奉答す。次でどうするつもりかと御下問に、

軍は新たに受けましたる任務を努めて無理をせぬ様に、特に第三国とは極力摩擦を避けて達成致したいと存じます。又隷下団隊に對しては軍紀の確立、次期作戰準備の訓練を二つの指導方針と致したいと存じます。

と申上げたる処大にうなづかれ、更に「中支の政權はどうするか」と御下問ありたるを以て、努めて無理を致しませぬ様指導致しますと奉答し、「第一の満洲国とする

様なことはあるまいな」との御下問に、御座りませぬと奉答したるに、御声高らかに「宜ろしい」と仰せられ之を以て拝謁を終りへ以下略

岡本季正（のち、スウェーデン公使、オランダ大使）

政權樹立工作の模様について上海駐在の田尻（愛義）一等書記官は上村（伸一）東亜一課長に「政治工作の裏面には臼田、長の活動あり。ことに臼田は熱情漢にて松井將軍を送る際、將軍在滬中に政府をでかさざりしは自分の不徳なりとて涙をポロポロ出しておるほどなれば、將軍参内の日まで一切の準備を整え発表すべしといきまき（おり）」と報告している。

（三月一日付）（朝日新聞社「太平洋戦争への道」による）

「畑俊六日記」

二月十八日 本日午前六時半頃上海より出迎へる為上京せる池谷少佐、参謀名越（透）少佐を帶同、安藤（利吉）中将以下総監部の幹部、陸軍省今村（均）、木村（兵太郎）兩少将等に見送られて飛行機にて出発赴任す。昨日の雨

朝香殿下本夕御帰着ニ付停車場ニ迎フ

◇二月十九日

畑司令官着 申継（欄外）

畑司令官昨日来着ニ付 今朝軍司令部ニ於テ詳細申継ヲナス 其要領別帛ノ如ク要ハ江北及錢塘江右岸ニ対スル作戰ノ必要ト 軍紀、風紀ノ維持ノ為メ軍隊ヲ可成集團屯在セシメテ直接人民トノ接触ヲ減スルノ要アルヲ述ヘ 尚宣撫工作、政權其他ノ政治工作ニ就キ軍隊直接ノ言動ハ却テ有害ナルヘキヲ述フ

尚今後ノ國際關係、上海租界措置ニ就テハ充分外交当局ヲ鞭撻スルノ要アルコト 海軍トノ關係協調ニ就キ特ニ考慮ヲ要スヘキ点ナト 一々詳細ニ説明ヲ与ヘタリ

午後 昨日御着ノ朝香殿下ニ參邸 御告別ヲ為スト共ニ殿下ノ御意ニ從ヒ江北作戰ヲ実行シ能ハサリシコトニ付御託ヲ述ヘタリ 終テ海軍長官、外務省側ニ告別シ 更ニ居留民団長始主要邦人約二十五名ヲ軍司令部ニ集メ 訣別ノ辞ヲナスト共ニ軍今後ノ兵力態勢力常ニ漢口迄攻勢ヲ取ル二十分ナル用意アルコトヲ告ケ 内外人ノ誤解ナキ様邦人ノ志氣ノ緊張ト活躍ヲ希望ス

此夜 新旧四軍司令官及同參謀長ノ会食ヲ行ヒ最後ノ留送別ノ意ヲ表ス 兩軍司令官ノ今後ノ作戰ニ關スル意見ハ概ネ予ト同シク夫々兩軍司令官ヨリモ申継ヲナセリ

◇二月二十日

終日在邸 出発準備ヲ整フ

先日東京帰着井上奏ノコト杯參謀本部ト交渉中ノ処 結局陸軍当局ハ予等各司令部ノ帰還カ内外ニ影響アルコトヲ慮レ 秘密ニ之ヲ行ヒ凱旋ノ形式ヲ避ケ 東京ニテノ出迎へ上奏ノ手順等従来ノ先例ヲ破リテ凡テ内輪ニ實施セントシ 各司令部モ日本ニ帰着ノ上可成地方ニ宿泊

セス 直路東京ニ帰着ノコトニ取計ハントシ輸送等ニ付何乎ト干渉ヲ試ミ來ル 当局ノ意嚮笑フニ耐フヘク何ノ意ナルヤヲ測リ難シ 如此姑息の当局ノ態度力決シテ國民ヲ挙ケテ時局ニ奮迅セシムルノ所以ニアサルハ論ナク 慨歎ノ至リナリ 此夕李擇一、岑德廣始メ臼田、長、中井、岡田等先日來謀略ニ尽力中ノ者ヲ集メ離別ノ会食ヲナス 一同熱誠ヲ示シ歸任ヲ惜ミ熱情真ニ謝スヘキノ辞ナシ 予ハ一同ヲ慰メ飽迄今後ノ奮闘ヲ勵シ 尚唐紹儀出テサル間温宗堯ヲシテ大總統又ハ總理代理ニ該ラシムルハ政權ノ怙券ニ係リ尔後ノ政權ノ声望ニ影響スヘキヲ以テ 可成温ヲ慰惜シツツ飽迄唐、吳出馬ノ位地ヲ存シ且ツ可成其出馬ヲ促ス様取計フヘキヲ論ス 尚可成速ニ天津ヨリ章士釗ヲ召致シ梁、温ノ間ヲ善処セシムルノ利アルヲ推奨ス

◇二月二十一日

上海出発 凱旋ノ途ニ就ク（欄外）

朝来出発ノ準備ヲ整ヘ 午後一時塚田少将、中山、白木兩參謀、角副官ヲ隨ヘ 尚小川法務部長、河野軍医中佐ヲ同行シ瑞穂丸ニ乗船ス

上海所在ノ各司令部軍隊ノ將校多数埠頭ニ送ル 殊ニ朝香殿下親ク御見送ノ榮ヲ賜ヒ且ツ永ク埠頭ニ御立チナサレ 最後船影ノ没スル迄御見送り被下タル其御懇情感激ニ耐ヘス 猶殿下ニハ曩ニ予ノ帰還ニ際スル扈從者ノ数少キヲ思ハセラレ 要スレハ派遣軍司令部全員予ト同行スルモ可ナリナト有難キ御詫ヲ示サレ 其予ニ対スル御思召ノ深キ何トモ申上ケ様ナシ謹ミテ深ク御礼申上ケ御告別ス

臼田大佐ハ泣キテ予ヲ送り 其他將校一同深ク惜別ノ情ヲ表スルハ欣懷ニ禁セス 海軍長官始メ大使館、海軍、居留民側等モ多数誠意ヲ披瀝シテ送ル 仍テ畑大将ノ発声ニテ一同三鞭ノ杯ヲ挙ケ訣別ス

瑞穂丸ハ曩ニ上陸當時軍艦由良ヨリ此ニ移シ 一週日船ヲ埠頭ニ横付ケシテ上陸ノ期ヲ待チ

霽れて天氣は晴朗なるも西風頗強く飛行機は大分動揺して聊か閉口したるも、一時間余り后に福岡に約十五分許り休憩の後、后二時半少し前吳淞飛行場に到着、自動車にて仮の宿舎アスターハウスに入る。沿道劇戦の迹傷ありて全然廢墟なり。唯見るものは軍人と租界内に少許りの内地人を見るのみ。復興は頗前途遠なるべし。

二月十九日 午前九時軍司令部に登庁、伺候を受けそれより殿下に拝謁す。昨日南京より后六時着滬せられたるに余が出迎に出ざりしとて御機嫌ならず。上海派遣軍の戦場にあり、今派遣軍が之を繼承することなれば出迎を予期したるに誰も出ざるは何故かと參謀副長武藤（章）大佐に尋ねられたるを以て、副長は昨日四時半頃到着せられまだ申告も受けて司令官にも入られざるを以て出迎にせざるなりと弁明したるにより了解せられたりとのことなり（実は司令部々員は出迎たりとのことなり）。この如きことありたることなれば殿下に拝謁、親補の挨拶をなし御戦下を御祝申上げ、昨日は四時半頃到着、今日初めて登庁したることなれば昨日御出迎をなさざりしは申訳なし、御勘弁を乞ふ

と御託申上げたり。

十一時半より松井前軍司令官より申送を受く。大分今更未練がある様なり。大臣にも兵力を整理し現役を以て軍司令官を更迭するが可なりと手紙にて申送り、次長にも視察の際申居たる由なるがその後未練が出たるものと見ゆ。

角副官 歩兵少佐 角 良晴 32期

方面軍司令部附法務官

小川関次郎（前第十軍法務部長）

『畑俊六日記』

二月二十一日 本日は二時松井大将、參謀長塚田（攻）少将其他二、三旧幕僚瑞穂丸にて出帆凱旋、見送る。

二月二十二日 本日は柳川第十軍司令官午后三時東京京にて出帆凱旋、見送る。

二月二十三日 本日は朝香宮殿下午後三時吉野丸にて御出帆凱旋遊され見送る。身体を大切にといふ有難き言葉なり。本日より松井大将の住居せし官邸に入る。新任者を一時ホテル住ひにし、自分が現在の処におるといふのは一寸変なるも、松井大将も未練も出で、

シモノ 因縁極メテ深ク船長以下大ニ喜ヒ船ヲ盛装シテ迎フ
折能ク近來稀ナル好日寄ニテ一天ノ雲ナク 海波極メテ穏静ニ半ケ年ノ出征ノ終ヲ芽出度遂
ケテ埠頭ヲ出発ス 感慨無量
又支那側温、梁、陳、李等使ヲ以テ送り 唐紹儀ハ特ニ写真ヲ送り訣別ノ意ヲ表ス

◇二月二十二日 船中

朝同船ニテ東京ニ還送中ノ戦傷患者三百余名ヲ慰問ス 就レモ相当ノ重傷ニテ予後相当ノ措
置ヲ要スル者ノミ哀憐ノ情ニ不禁 若干ノ慰問品ヲ贈ル 赤十字看護婦六十余名アリ能ク看護
シ 聞ク本船ニテ既ニ還送セル総患者数四千余名ニ及フト云
午後日記ヲ認メ 又船員、赤十字員ノ囑ニ応シテ揮毫ナト試ム 平穩ナル航海ナリ

◇二月二十三日

朝十時門司入港 十時半陸軍大臣、教育総監、参謀総長代理、福岡県知事、門司要塞司令官
其他官民多数ノ出迎ヲ受ケ上陸 山陽ホテルニ投ス
出征以來方ニ半年宿志未タ其半途ニ不達 此ニ生還スル自責ノ念軋タ深ク感慨無量ナリ 終
日ホテル内ニ空居 勉メテ訪客ヲ避ケテ思ニ耽ル 詩未成

懸軍奉節半星霜 聖業未成戰血腥
何貌生還老瘦骨 殘骸誓欲報英靈

◇二月二十四日

朝赤間神社及乃木神社ヲ参拝ス
訪客ヲ避ケ軍司令部員其他ニ約セル揮毫ナト試ム
久振ニ大吉ノ料理ヲ味ヒ美酒ニ酔フ

夜八時半 富士号列車ニ搭シ帰京ノ途ニ就ク

◇二月二十五日

朝姫路、神戸、大阪、京都等ヲ過ク歡迎者不鮮 名古屋ニ於テハ多数旧知及牧野小学校生徒
等歡迎 豊橋、浜松、静岡等亦相当ノ出迎アリ沿道小駅亦然リ 文子等横浜駅ニ迎フ
午後三時半東京駅着 三長官代理、次官、次長其他官民多数ノ出迎ヲ受ケ 直チニ参謀本部
ニ至リ玄關前ニテ秩父宮殿下及各皇族御使ヲ始メ大臣及部員一同ノ歡迎ヲ受ク 直ニ総長殿下
ニ拝謁ノ上歡迎祝賀ノ杯及御言葉ヲ賜ヒタル後辞シテ偕行社宿舍ニ至リ旅装ヲ解ク 駅頭市民
ノ歡呼ハ軍部ノ取扱ニ比シ頗ル熱狂、感謝のナルヲ認ム

◇二月二十六日

朝東京駅頭ニ朝香殿下及柳川中将ノ司令部ヲ迎ヘタル後 一時、一同 同道塚田参謀長等ヲ
随ヘ 葉山御用邸ニ伺候出征以來ノ情况ヲ上奏 復命ス
陛下ニハ特ニ予ニ対シ優渥ナル勅語ヲ賜ヒ感激恐懼ニ堪ヘス 又銀製花瓶一對及金七千円ヲ
賜ヒ 宮内大臣、内大臣ニ依リテ賜餐アリ 此日皇后陛下ハ御服喪中ノ為メ拝謁ノコトナク皇
后宮大夫ヨリ篤キ御令旨ヲ賜ヒ 又大銀製杯及金千円ヲ賜フ 即天恩ノ厚キニ感激シツツ御用
邸ヲ退去シ東京駅ヨリ始メテ半歳振ニ大森ノ宅ニ還ル
親族知己等数十名宅ニテ歡迎シ賑カナル晩餐ニ祝盃ヲ挙ク

◇二月二十七日

終日宅ニ在リテ休養ス 各新聞、通信員、雜誌記者等來訪撮影等夥シ 即有感
懸軍奉節半星霜 聖業未成萬恨長
天龍無邊土有責 春宵夢惑旧沙場

又殿下ももう少しといふ御氣持ら
しく、余が着任したる時はあまり
よい顔をせられざりしことだけは
事実なり。

勅語

卿前ニ上海派遣軍司令官ニ任シ次
テ中支那方面軍司令官トシテ關外
ノ重任ヲ荷ヒ錯綜セル國際關係ト
困難ナル戦局トノ間ニ処シ克ク皇
軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚セリ朕親シ
ク復命ヲ聴キ更ニ卿ノ勲績ト將兵
ノ忠烈トヲ惟ヒ深ク之ヲ嘉ス

『真崎甚三郎日記』

二月二十二日 土 晴
上海方面ニテハ新司令官畑(俊
六)ニ帰京ヲ迫リ、松井、柳川、
橋本(欣五郎)ハ帰ルヲ欲セズト
云フ説伝ハリ其ノ真偽ハ兎モ角憂
慮スベキ状ナルコトヲ聞ク。

二月二十六日 土 晴
〔午後〕七時ヨリ出デテ松井大將
及柳川中将ニ祝意ヲ表シ、九時ニ
帰宅ス。松井ハ軍ノ建直シヲ必要
トスル旨ヲ述ベタリ。

〔註〕松井と真崎は同期生(陸士
九期)である。真崎は、二・二
六事件に連坐し十一年七月六日

東京衛戍刑務所に収容されてい
たが、十二年九月二十五日、無
罪となり、世田谷の自宅に帰っ
た。

三月一日参謀本部次長、第一、
第二部長に松井大將が述べた意見

*

松井大將 中支派遣軍ノ現在
ノ任務達成上モ嶺南及钱塘江対岸
ヲ占領スルハ最少限ノ必要事項ナ
リ 江北要地ノ占領ハ江南確保上
必要ナルコトナリ 政略的ニ見ル
モ中支軍ノ占領地ヲ拡大スルコト
ハ必要ニテ、新政權樹立ノ為ニモ
徐州攻略ハ緊要事ナリ、此事ハ支
那要人ノ皆述ヘアルトコロナリ
李宋仁ハ自分ノ見ルトコロニテハ
反蔣人物ナリ
安慶占領ハ漢口ヲ脅威スル為ニ
非必要ナリ、支那機ハ現ニ台湾ニ
来リシカニ、三月スレハ内地ヲモ
襲フヘシ、然ラスストスルモ上海カ
再ヒ敵機ノ脅威下ニ置カルニ至
ラハ全般ニ及ボス影響果シテ如
何、之カ為安慶ハ是非我手ニ収メ
サルヘカラズ 蔣最後ノ逃場ハ四
川ニアラスシテ西南方ナルヘシ
之ヲ脅威スル為安慶対岸ニ地歩ヲ
占メ必要トアラハ直ニ広西ニ進撃

◇二月二十八日

此朝參謀本部ニ至リ 大臣、次官等立会ノ下ニ參謀總長殿下ニ出征以來ノ情况 殊ニ目下ノ情勢并之ニ関スル意見等ヲ報告シ 軍ハ作戰上速ニ徐州、廬州ヲ占領シ更ニ西浙方面ニモ占領地域ヲ拡大スルコトニヨリ 敵軍ノ抗戰意圖ヲ覆滅スルノ要アルヲ具申スルト共ニ 今後軍ノ政治經濟工作ノ実行ヲ北支ト相關聯セシムルノ必要上 速ニ中央及出先ニ統制アル一元の機關ノ設立ヲ緊要トスルコトヲ上申ス

終テ大宮御所ニ伺候 皇太后陛下ニ拝謁御懇篤ナル御言葉アリ 又銀製煙草入ト金五百円ヲ賜ヒ 賜饌アリ

終テ明治神宮、靖國神社ニ參拜復命シ 靖國神社ニハ南京入城當日國民政府門上ニ立テタル大國旗ヲ奉獻ス

此夕大臣官邸ニ於テ三長官ノ歡迎宴アリ

各皇族邸ニ伺候 帰任ノ御挨拶ヲ記シ 総理、海軍大臣、軍令部長、外務大臣等ヲ歴訪同様挨拶ス 生憎近衛首相病氣引籠中ナルヲ以テ報告ハ次ノ機会ニ讓ル

スルノ勢ヲ示スノ要アリ 浙江ノ中枢部ハ寧波、紹興方面ナルヲ以テ此方面迄ハ占領スルヲ有利トス之カ爲ニハ則チDヲ掃蕩セシムル以前ニ攻勢ヲ取り其後ノ守備兵力ハ現在ノマニニテ可ナリ(五師團)今後ノ政治工作進展ノ爲ニハ某程度ノ作戰ヲ進ムルコト必要ナリ、多大ノ犠牲ヲ払ヒタル者トシテハ言語ニ絶スル苦衷アリ之ヲ諒察サレタシ 北、中、南支ヲ統一ハスル政治經濟指導機關ヲ設ケ軍ハ本然ノ作戰ニ直往スル如クスルヲ可ナリト信ス。此点重要ナル研究問題ナリ

新政權ヲ指導スルコトカ軍ノ任務ナリヤ否ヤヲモ速ニ決定スルノ必要アリ

海軍トハ作戰上ハ緊密ニ連繫シタルモ政治特ニ經濟のニハ協調困難ナリ 理想トシテハ陸軍ノ在ル処ノ陸戰隊ハ引キ揚ケ他ノ任務ニ向フヲ可トス 先日海軍ニハ陸戰隊ニテ海南島ヲ占領スルヲ可トスル旨述ヘ置キタリ

次長等ノ返事

中央ハ決シテ消極案ニアラス今ヤ準備時期ナリ 但懷工台モ考ヘサルヘカラス

『飯沼守日記』記載

松井大将「支那事變日誌抜粹」

一、大命拝受

昭和十二年八月富士山中静養中、同月十四日陸軍大臣ノ召電ヲ受ク、上京、翌十五日宮中ニ於テ上海派遣軍司令官親補ノ勅ヲ拝ス。翌十六日、參謀總長ヨリ派遣軍ニ関スル奉勅命令并參謀總長ノ指示ヲ受ク。

即派遣軍ノ任務ハ

上海附近ノ敵軍ヲ掃蕩シ、其西方要地ヲ占領シテ上海居留民ノ生命ヲ保護スルニアリ。

蓋シ當時ニ於ケル我政府ノ政策ハ、中支ハ勿論北支ニ於テモ努メテ時局ヲ局地的ニ解決シ、事件ノ不拡大ヲ根本主義トセルヲ以テ、上海附近ニ於テモ可成昭和七年列國ノ間ニ協定セル(一九三二年)停戰協定ノ精神并其取極ニ遵ヒ、時局ノ一時の解決ヲ企圖セシモノナリ。從テ派遣軍ノ任務ハ上記ノ如ク極メテ消極的ニ上海附近ノ防衛ト我居留民ノ消極的保護ヲ其目的トシ、派遣軍ノ兵力モ第三、第十一師團(二聯隊欠)ノ二個師團弱ノ微弱ナルモノナリシナリ。

二、詔勅拝受並奉答

八月十七日午前一〇・〇〇、予ハ宮中ニ於テ謁ヲ賜ヒ、左ノ勅語ヲ拝ス。

朕卿ニ委スルニ上海派遣軍ノ統率ヲ以テス。宜シク宇内ノ大勢

ニ鑑ミ速ニ敵軍ヲ戡定シ、皇軍ノ威武ヲ中外ニ顯揚シ以テ朕ノ倚信ニ応ヘヨ。

仍テ左ノ如ク奉答ス。

巨石根

上海派遣軍司令官ノ大命ヲ拝シ優渥ナル勅語ヲ賜ヒ恐懼感激ノ至ニ堪ヘス、畏ミテ聖旨ヲ奉戴シ、惟レ仁惟レ威克ク皇軍ノ本領ヲ發揮宣揚シ、以テ宸襟ヲ安シ奉ラムコトヲ期ス。

次テ陛下ヨリ、今後派遣軍ノ任務ヲ達成スル爲メノ方針如何、ト御下問アリタルニ依リ予ハ直ニ

派遣軍ハ其任務上密接ニ我海軍ト協同シ、所在我官憲特ニ列國外交団并列國軍トノ連絡ヲ密ニ協力以テ速ニ上海附近ノ治安ヲ恢復センコトヲ期ス。

ト奉答セルニ、陛下ハ御満足氣ニ之ヲ嘉納セラレタリ。

三、上海附近ノ戦斗ノ経緯

以上ノ我政府及統率部ノ方針ニ遵ヒ、予ハ上海附近ノ戦斗ニ際シ特ニ左記方針ヲ採リ、部下各隊ニ対シテモ常時此方針ノ徹底ニ努力セリ。即

一、上海附近ノ戦斗ハ専ラ我ニ挑戰スル敵軍ノ戡定ヲ旨トシ、所在支那官民ニ対シテハ努メテ之ヲ宜撫愛護ス可キコト。

二、上海附近ノ戦斗ニ依リ、列國居留民及其軍隊ニ累ヲ及ホサ、ルコトニ專念シ、特ニ列國官憲及其軍隊ト連絡ヲ密接ニシ彼我ノ誤解ナキヲ期スルコト。

然ルニ上海附近ノ支那官民ハ蔣介石多年ノ抗日毎日ノ精神相当ニ徹底セルニヤ、到ル処我軍ニ対シ強キ敵愾心ヲ抱キ、直接間接居留民カ敵軍ノ爲メニ我軍ニ不利ナル諸般ノ行動ニ出テタルノミナラ

ス、婦女子スラモ自ラ義勇軍員トナリ又ハ密偵の任務ニ当レルモノアリ、自然作戰地域ハ極メテ一般ニ不安ナル状態ニ陥リ、我作戰ノ進捗ヲ阻害セシコト尠カラス。殊ニ蔣介石ハ漸次支那各地ヨリ其軍隊ヲ江南地方ニ集結シ、我軍ノ作戰初期ニ於テ之ヲ擊攘スルノ計画ヲ有セシ如ク、所在支那軍ハ屢々夜襲其他ノ方法ヲ以テ我軍ニ向ヒ攻勢ヲ採ルニ努メタリ。

「因ニ九月十七日頃ニ於ケル支那軍ノ江南地方ニ集中セル兵力ハ既ニ四十三師ニ及ヒ尚西支那各地ヨリ約二十師ヲ集結シツ、アリタリ。」(欄外)

斯クテ上海附近ノ我居留民ヲ保護セントスル当初ノ消極の方針ハ容易ニ之ヲ達成スルコト難ク、速ニ我陸海兵力ヲ増強シテ江南附近一帯ヲ掃蕩スルニ非レハ、我軍派遣ノ目的ヲ達成スルコト能ハサルニ至リ、自然作戰ハ漸次ニ其局面ヲ展開シ、遂ニ第十軍ノ派遣トナリ、更ニ上海方面軍ノ編組トナリ、進テ敵ヲ江南以西ニ驅逐スルノ必要ヲ認メ、遂ニ南京攻略ニ進展スルニ至レリ。

而カモ最モ遺憾ナリシコトハ本作戦ニ対スル列國軍ノ態度ナリ。蓋シ支那ニ權益ヲ有スル列國カ本作戦ニ對シテ冷然ナル態度ヲ有スルハ勿論ナリト雖彼等ハ一九三二年(欄外)「昭和七年協定」ニ於ケル列國ノ停戰協定ヲ協力支持シテ事件ノ發展ヲ阻シスルノ方針ニ出テスシテ、支那政府及其軍隊ニ對シ同情ヲ有スルノ余リ直接間接ニ支那軍ノ作戰ニ便宜ヲ与ヘ、時ニハ之ヲ援助スルノ行動モ尠カラス。殊ニ英、仏軍隊ノ行動ハ我軍ノ作戰ニ許多ノ不便ヲ与ヘタリ。而カモ我軍ハ隱忍只々列國官憲及其軍隊トノ諒解ヲ得ルニ努メ、我作戰ヲシテ列國官民ニ被害ナカラシメン為メ、有ラニル不便ヲ忍ビヒテ事態ノ國際的紛糾ヲ招クニ至ラサルコトヲ期シタリ。

メ、皇軍一過所在官民ヲシテ皇軍ノ威徳ヲ仰キ、欣テ我ニ帰服セシムルノ概アルヲ要ス。

加之南京攻撃戦ハ自然同地官民ニ許多ノ犠牲ヲ来スヘク、尚孫中山陵、明ノ高陵其他南京城内外ノ文化的史跡等ノ損害ヲ招クコトアルヘキヲ慮リ、各軍ニ令シテ先ツ南京城外ニ於テ其隊伍ヲ整ヘ正々堂々秩序アル入城ヲ行ハシメント欲シ、夫々懇切ナル諭示ヲ与フルト共ニ、南京敵軍ニ對シ懇切ナル勸降文ヲ散布シ、努メテ平和の手段ニ依リ南京攻略ノ目的ヲ達センコトヲ欲シタルモ敵軍ノ態度ニ適ハス、飽迄南京城ノ防衛ヲ行ヒタルヲ以テ、遂ニ南京城内外ニ於テ相当熾烈ナル戦斗ヲ惹起シ、自然戦禍ノ及フ処甚大ナルニ至リシハ遺憾ノ至ナリ。尚敗走セル支那兵力其武装ヲ棄テ、所謂「便衣隊」トナリ、執拗ナル抵抗ヲ試ムルモノ尠カラサリシ為メ、我軍ノ之ニ對スル軍民ノ別ヲ明カニスルコト難ク、自然其一般良民ニ累ヲ及ホスモノ尠カラサリシヲ認ム。

五、我軍ノ暴行、奪掠事件

上海附近作戰ノ經過ニ鑑ミ南京攻略戦開始ニ當リ、我軍ノ軍紀風紀ヲ嚴肅ナラシメン為メ各部隊ニ對シ再三ノ留意ヲ促セシコト前記ノ如シ。因ラサリキ、我軍ノ南京入城ニ當リ幾多我軍ノ暴行奪掠事件ヲ惹起シ、皇軍ノ威徳ヲ傷クルコト尠ナラサルニ至レルヤ。

是レ思フニ

一、上海上陸以來ノ惡戦苦闘カ著ク我將兵ノ敵愾心ヲ強烈ナラシメタルコト。

二、急劇迅速ナル追撃戦ニ當リ、我軍ノ給養其他ニ於ケル補給ノ不完全ナリシコト。

四、南京攻略ニ至ル作戰

我軍ノ上海附近作戰ハ派遣軍兵力ノ増派ニヨリ頑強ナル敵ノ抵抗ヲ排除シツ、多大ノ困難ト犠牲ヲ冒シテ十月二十五日漸ク大場鎮附近ノ敵ヲ驅逐シテ上海市及其東南方地域ヲ占領シ、上海在住我居留民及海軍ヲ救フヲ得タリ。然レトモ上海西南地域ニハ尚相當ノ敵軍抵抗ヲ持續スルノミナラス、浙江省方面ヨリ新ニ其兵力ヲ上海方面ニ派遣増強シツ、アリ、又蘇州、常熟附近ニハ予テ準備セル陣地アリ、南京トノ間ニ三重ノ陣地ヲ構築シテ江南地方ノ防備ヲ急ギ、更ニ其兵力ヲ増強シツ、アルノ模様ナルヲ以テ、我統率部ハ江南地方ヲ確守シテ同地方ノ治安ヲ保持スルノ必要ナルヲ認メ、遂ニ十一月下旬ニ至リ上海方面軍ヲシテ南京攻略ヲ決行スルニ決ス。

曩ニ浙江東北岸ニ上陸中ナリシ第十軍(柳川中将ノ率ユル三師團)及元上海派遣軍(朝香宮中將ノ率ユル五個師團)ヲ上海方面軍司令官タル予ノ統率ニ屬シ、十一月上旬ヨリ江南及東浙地方ニ現在セル敵軍ヲ驅逐シテ南京ヲ攻略スルコトナレリ。

於此予ハ直ニ部下兩軍ニ命令シ、各々当面ノ敵ヲ驅逐シテ南京東方紫金山ノ線ニ進出スルニ決シテ夫々追撃ヲ電署セリ。然レトモ本作戦ハ固ヨリ我政府本来ノ政策ヲ脱逸スルノミナラス、上海附近作戰ノ経緯ニ鑑ミ今後江南地方ニ於ケル大規模ナル作戰ノ実行カ、今後ニ於ケル日支兩國ノ關係ニ大ナル影響ヲ及ホスヘキヲ憂慮シ、右追撃命令ニ對シ充分ナル考慮ヲ払ヒ、特ニ我軍ノ軍紀風紀ヲ嚴肅ナラシメン為メ懇切ナル訓示ヲ与ヘタリ。本訓示中特ニ予自ラ加筆セル末文左ノ如シ。

敵軍ト雖既ニ抗戰意志ヲ失ヒタルモノニ對シテハ最モ寛容慈悲ノ態度ヲ採リ、尚一般官民ニ對シテハ常ニ之ヲ宣撫愛護スルニ努

等ニ起因スルモ亦予始メ各部隊長ノ監督到ラサリシ責ヲ免ル能ハス。因テ予ハ南京入城翌日(十二月十七日)特ニ部下將校ヲ集メテ敵ニ之ヲ叱責シテ善後ノ措置ヲ要求シ、犯罪者ニ對シテハ嚴格ナル処断ノ法ヲ執ルヘキ旨ヲ嚴命セリ。然レトモ戦闘ノ混雜中惹起セル是等ノ不祥事件ヲ尽ク充分ニ処断シ能ハサリシ実情ハ已ムナキコトナリ。

因ニ本件ニ関シ各部隊將兵中軍法會議ノ処断ヲ受ケタルモノ將校以下數十名ニ達セリ。又上海上陸以來南京占領迄ニ於ケル我軍ノ戦死者ハ実ニ二万三千三百余名ニ及ヒ、傷病者ノ総數ハ約五万人ヲ超ヘタリ。(欄外)

因ニ我軍南京攻略ニ関シテハ予ハ最初先ツ軍ヲ蘇州、湖州ノ線ニ停止セシメ、隊伍ノ整頓ト補給ノ進捗ヲ図リ、徐ロニ正々堂々ノ攻撃再挙ヲ行ハシムルヲ欲シタリシカ、我大本營全般ノ作戰計画上海方面軍ノ一部ヲ他方面ニ転用スルノ計画ナリシト、敗退セル敵軍ノ江南地方ニ其隊伍ノ整理スル違フ与ヘサルヲ有利トスル關係上遂ニ急劇快速ノ進撃ヲ決行スルニ決セリ。

尚本作戦間陰險附近ニ於ケル我海軍飛行機ノ米國軍艦バネー号爆撃及南京上流ニ於ケル我陸軍部隊(橋本砲兵聯隊)ノ英國軍艦及商船砲撃事件等ヲ惹起セルハ遺憾ナリシモ、コハ敗退スル敵軍ハ多ク英米等ノ艦船ヲ利用セルモノ尠カラサリシ事実ト追撃戦闘間避ク可カラサル我部隊ノ興奮トニ因リ其過誤ヲ招来スルニ至リタル次第ニテ、予ハ本件ニ對シテモ各部隊ニ對シ敵軍ナル警告ヲ与ヘタリ。

又我軍ノ南京入城直後ニ於ケル奪掠行為ニ對シテハ特ニ嚴重ナル調査ヲ行ヒ、努メテ之ヲ賠償返還セシムルノ方ヲ講シタリ。特ニ英米仏其他列國官民ニ對スル賠償ニ関シテハ我外交官憲ヲ介シテ努メ

テ友誼のニ本件ノ善処ヲ図レルモ、戦場内ニアル列国人ノ財産生命カ自然戦禍ノ累ヲ受ケタルコトハ已ムナキ次第ト云ハサルヲ得ス。

六、本作戦ノ前後列国軍民トノ交渉ノ大要

上海上陸以来ノ作戦間我軍ハ常時爾後ノ作戦ニ伴ヒ一般居留民ニ予告ヲ与ヘ、戦禍ヲ避ケヘキコトヲ警告スルト共ニ、我外交官憲ヲシテ屢次在上海列国軍官憲ニ懇切ナル予告ト警告ヲ与ヘ、更ニ協力の治安ノ維持ニ努メタリ。殊ニ英國艦隊司令官リットル大將及同陸軍司令官スモーレット少將トノ間ニハ、予自ラ十一月十日及十七日ノ兩日ニ亘リ親ク会シテ彼我ノ意志疎通ヲ図リ、作戦間英軍及其官民ニ与ヘタル不幸ノ出来事ニ就キ遺憾ノ意ヲ表セルノ外、十一月二十四日及十二月二十五日ノ兩回公使及公使館海軍司令官ト会见シ公使館租界及南市ニ関スル諸問題ニ付意見ヲ交換シテ彼我ノ諒解ヲ遂ケタルノミナラス、曩ニ南市ニ於ケル居留民保護ニ尽力セル牧師「ジャキノウ」氏ノ行動ニ対シ厚ク感謝ノ意ヲ表シ金若干ヲ寄附シテ其運動ヲ協助セリ。

米國海軍司令官ヤネル提督ニ対シテハ十二月二十四日全二十五日ノ兩回ニ亘リ親ク会见シテ「パネー」事件ニ関シ遺憾ノ意ヲ表スルト共ニ、本作戦ニ関スル予ノ苦衷ヲ左ノ如ク開陳セリ。曰ク

予ハ固トヨリ上海附近ニ於ケル日本居留民ノ生命財産保護ノ任ヲ享ケ渡来シ、惡戦苦闘ノ上我軍ノ將兵ニ万有余ヲ失ヘル外、上海附近ニ在ル邦人ノ諸工場等ノ多クハ少カラズ被害ヲ免ル能ハサリシカ、英米其他列国ノモノニ対シテハ個人の零細ナル被害ヲ別トシ、大工場、大建築等ハ全ク其戦禍ヨリ免レシムルヲ得タリ。是レ作戦ノ終始予カ部下諸部隊ニ嚴命シ、我作戦上ノ不利ヲ忍ビ

尚阿氏ノ質問ニ答ヘテ曰ク

上海地方ニ於ケル此種ノ事件ハ最早再ヒ之ヲ繰返サ、ル様此度コソ完全ニ善処スルコト必要ナリト考ヘ、殊ニ上海ノ特殊地位ニ鑑ミ予ハ出發前ヨリ列国ノ協力ニヨリ之ヲ遂行センコトヲ期シアリシカ、其後内外一般ノ状態及現地ノ状況ヲ體驗シ、聊カ從來ノ希望ヲ失ヒタルノ感アリ、即列国カ一九三二年ノ停戦協定ヲ支那ニ遵守セシムルノ義務ヲ執ラサリシノミナラス其後本事件ニ関スル態度カ列国ノ協力ノ上ニ自信ヲ失ハシメタルヲ遺憾トス。云々之ニ対シ「フレザー」氏ハ敢テ之ヲ論弁セス、如何ニセハ其協力ヲ遂ケ得ヘシヤ、反問セルニヨリ予ハ

右ハ列国カ日本ノ行動ヲ侵略のカ救済のナルカノ根本觀察ヲ改ムルコト先決要件ナリ。

ト答ヘタルニ彼ハ答ヘス。更ニ又「アペンド」氏ハ、右ハ米國ニ於テモ同様ナリヤ、ト問ヘルニヨリ予ハ

上海地方米國官民ノ態度ハ特ニ今日迄指摘スヘキホドノモノナキモ、最近米國ニ於ケル大統領ノ演説ノ内容ニ就テハ不満足ノモノナリ。

ト答ヘタリ。

尚十一月三十日再ヒ右兩通信員ト会见シ、上海占領後ニ於ケル我軍ノ態度方針ヲ説明シ上海附近ニ於ケル列国ノ權益ヲ保護スル為メ予ノ執リタル苦心ノ程ヲ開陳セルニ、彼等ハ我軍ノ公正ナル態度ニ就キ感謝ノ意ヲ表セリ。

右ノ外十一月十日在上海AP、UP、ルーター、ハヴハス、其他各國ノ主要ナル通信員ト会见シ、上記同様軍ノ方針ト将来ニ於ケル企圖等ニ就キ説明ヲ与ヘ、特ニ左ノ要旨ヲ述ヘタリ。

テ列国ニ戦禍ヲ及ボサル様取計ヒタル結果ニシテ今更年ヲ予ハ邦人ノ保護ヲ外ニシテ、列国ノ利権ノ擁護ニ全力ヲ致シタルノ結果ニ陥リ、我朝野ニ対シ深く相済マサル義ナリト苦悶シツ、アリ。云々

右ニ対シ「ヤネル」提督ハ能ク予ノ意中ヲ解シタル如ク、又前ニ英國リットル提督ニモ同様ノ義ヲ申述ヘタルモ彼ハ充分之ヲ理解シ英國政府ニ対シ予ノ苦衷ヲ傳達スヘシト約シタリ。

斯クシテ予ハ上記屢次ノ英米兩國海軍長官トノ間ニ十分ニ意志ノ疎通ヲ遂ケタルノミナラス、今後兩國政府ノ態度如何ナルヘキモ吾等軍事當事者ハ、上海地方ハ勿論況ク太平洋ノ平和ニ関シ協力的態度ヲ執ルヘキ旨ヲ誓ヒタル次第ナリ。

右ノ外予ハ機會ヲ捉ヘテ在上海列国新聞通信員トノ連絡ヲ図リツ、アリシカ、十月十日倫敦タイムス通信員「フレザー」氏及紐育タイムス通信員「アペンド」氏軍司令部ニ招キ懇談ノ機會ヲ与ヘ、先ツ予自ラ左ノ要旨ヲ談話ヲナセリ。曰ク

予ハ三十年来日支提携ノ事ニ微力ヲ尽シ来リタルモノニテ、其多年ノ信念ニ鑑ミ、今ニ於テモ支那ヲ膺懲スルト云フヨリモ如何ニシテ四億民衆ヲ救済スヘキカト云フ考ニ充タサレアリ。支那ハ今共產主義勢力ヨリ之ヲ救脱スルコト緊急ニシテ、是レ支那自身ノ為ノミナラス東亞全般ノ為真ニ喫急ノ事項ナリ。

於此予ハ日本固有ノ國民精神ト東洋傳來ノ道德ノ根基ニ立チ、日本人得意ノ犠牲的行動ヲ發揮シ東亞百年ノ平和ニ貢獻センコトヲ冀ヒツ、アリ。

願クハ欧米諸國ノ官民カ我等ノ此信念ヲ信倚シ暫ク日本ノ為ス所ヲ靜觀センコトヲ望ム。

此次上海事件ノ発端ハ支那軍ノ江南方面ニ於ケル排日行動ニ対シ、列国カ日本ト協同シテ一九三二年ノ停戦協定ノ維持ニ尽サ、リシコトニ原因セリ。然カモ列国カ事變勃發後支那側ニ同情スルノ余リ日支ノ抗争ニ対シ中正ナル態度ヲ保持セス、中立的義務ヲ実行セサリシコトハ甚タ遺憾トスル所ニシテ、其結果戦禍ノ及フ所遂ニ列国官民モ之ヲ免レ能ハサリシハ已ムヲ得サル所ナリ。云々

之ニ対シテハ各通信員ハ何人モ敢テ之ニ対シ反駁の態度ニ出ツル者ノナク、之ヲ肯認セルノ風アリシヲ認メタリ。

附記
是等ノ消息ハ當時通訊ノ任ニ當レル岡崎外務書記官ノ詳知スル所ナリ。

了

上海派遣軍司令官拜命當時ノ所感

(日記ヨリ抽出)

予ハ陸軍出身以来先輩ノ志ヲ継キ、在職間終始日支兩國ノ提携ニ因ル亜細亞ノ復興ニ微力ヲ致セリ。其支那ノ南北ニ駐在スルコト十有余年、當時支那ノ官民トノ間ニ親睦ヲ図リ、相互民族ノ融和提携ヲ折念セリ。滿州事件起ルヤ予ハ自ラ感スル所アリ、我朝野同志ヲ糾合シテ「大亞細亞協會」ヲ組織シ、我同胞ニ対シ反省ヲ促シ亞細亞ノ大局ニ善処スヘキ國民運動ノ勃興ヲ図ルト共ニ、一面支那有識者ニ対シ孫文ノ所謂「大亞細亞主義」ノ精神ニ覺醒シ、真摯ナル日支提携ノ実ヲ拳ケンコトヲ勧誘セントシ、昭和九、十年ノ間兩度支那南北ヲ歴遊シテ其朝野ノ知友ニ徹スルナト一日未タ三十年來ノ信

念ヲ革命ムコトナカリシカ、今ヤ不幸ニシテ兩國ノ關係ハ如此破滅ノ運命ヲ迎リツ、予自ラ支那軍脅懾ノ師ヲ率ヒテ支那ニ向フニ至レルハ真ニ皮肉ノ因縁ト云フ可ク、顧ミテ今昔ノ感ニ禁セサル次第ナルカ事態ハ如何トモ致シ難ク、須ク大命ヲ奉シ聖旨ノ存スル所ヲ体シ、惟レ仁、惟レ威、所謂破邪顯正ノ劍ヲ揮ッテ馬稷ヲ斬ルノ慨深カラシメタリ。

△卷末メモ▽

十月十日、倫敦タイムス・フレザー、紐育タイムス・アペンド会見。

十月十五日、死傷数。十月十六日、割腹機會。

十月二十八日、死傷数。十一月四日、中支那方面軍司令官、兼上海派遣軍司令官。十一月二十日、第一期會戰完成。

十一月二十三日、訓示。十一月二十八日、参本南京攻略決定。

十二月一日、参謀次長、南京攻撃ノ伝宣命令携来。

十二月二十二日、上海帰還。十二月二十六日、南京強姦ヲ戒ム。十二月二十九日、中山参謀。

十二月三十日、李擇一ヲ香港宋子文ニ遣ス。一月十六日、国民政府ヲ相手ニセス。一月二十四日、十六師ノ掠奪品ヲ検査セシム。岡田尚返ル。二月六日、南京ニ行ク。

二月七日、戒飭。八日上海帰還、遺骨二万ト。

陸軍大將

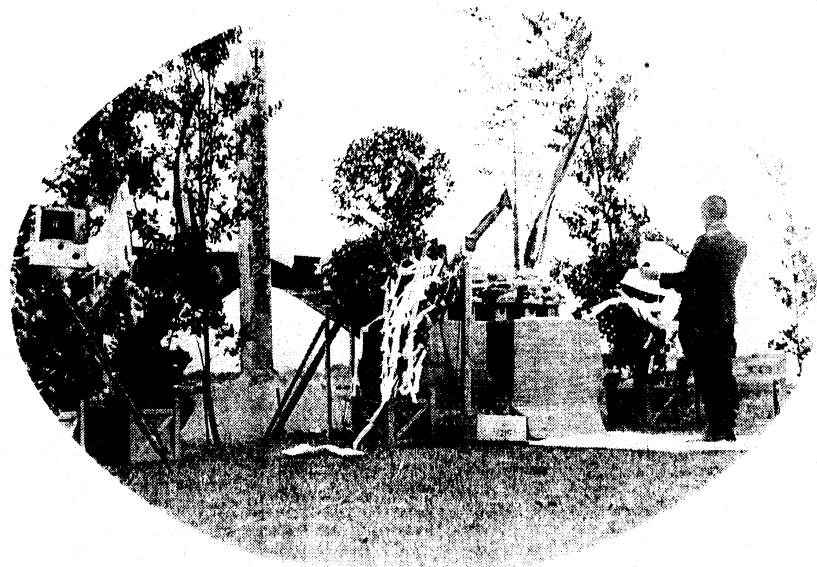
畑俊六日誌 △要約▽

昭和十三年二月十四日中支那派遣軍司令官

一月二十九日 本日より二月六日まで第七師団、第八師団留守隊の教育状況視察の爲北海道、弘前地方に出張。

支那派遣軍も作戰一段落と共に軍紀風紀漸く頹廢、掠奪、強姦類の誠に忌はしき行為も少からざる様なれば、此際召集予備役者を内地に帰らしめ現役兵と交代せしめ、又上海方面にある松井大將も現役者を以て代らしめ、又軍司令官、師団長等の召集者も逐次現役者を以て交代せしむるの必要あり。此意見を大臣に進言致しをきたるが、出張前大臣に面会、西尾^(壽造)梅津兩中將を南北軍司令官たらしむるを可とする意見を申述べ出張したる処、意外にも二月五日夕青森に到着したる処本部長より特使あり書状携帯、それによれば次官、軍務局長は余を松井の後任に推薦し、余の後任は西尾を可とする意見なりとの内報に接し聊か面喰ひたる次第なるが、とにかく帰京の上とし六日朝上野に帰着したる処、大臣より面会したしとのことにその足にて官邸に至り大臣に面会したるに、大臣より上述の如き申出あり。上海は方面軍と二軍司令部との折合兎角面白からず、此際現役者を以て交代せしむるを適當とすべく。△以下略▽

二月七日 「教育」總監は如何に伴食なればとて二、二六事件以



慰靈祭で祭文をささげる松井大將

来半年毎に交代し更迭頻繁なるの嫌あり。事自己に關することなればあまり我儘も云へず仕方なければ受くべしと決心し本日午前十一時大臣を訪問、外に人なき様なれば御請すべしと答へ置きたり。

二月八日 本日午前十時大臣より来てくれとのこと往訪、大臣は今北方が近く作戰するに南方が整理するは適當ならずと思考するも、中支方面の三司令部は各異なるイデオロギーにて勝手なることを云ひをり、松井は初めは此の如き大軍はいらぬと云ひ居たるに、近來は元來余は作戰よりは戦後の經營の爲に出されたるものなりとの処見を述べ、中支にも北支よりも更に大なる政權を樹立し寧ろ南主北従の如き考へを有し、柳川司令部は政權など思ひもよらず此方面の兵力を三師団位とし其他は北方に備ふべしとの意見を吐き、殿下の司令部は尚作戰を継続すべしとの意見にて各思ひ／＼の意見を吐き其間の統制面白からず、兵力は次として司令部は一日も早く取換ふるを可とする参謀本部の意見なれば速に出発せられたしとのことなり。余は其件了承したるも少尉か中尉ではあるまじ、そんなに急ぐに当らずと申述べ△以下略▽

二月十四日 本日午前十一時より昭和十二年度教育上奏をなす。引続き十一時五十分親補式を行はせられ中支那派遣軍司令官に補せらる（陛下は中支那と詔せられたり）。

二月十六日 午前十一時参内、拝謁仰付けられ優渥なる勅語を賜ふ。恐懼に堪へず。之に対し、

優渥なる勅語を賜はり誠に恐懼に堪ませぬ。微力を尽して以て聖

旨に副ひ奉らむことを期します。

と奉答す。次でどうするつもりかとの御下問に、

軍は新たに受けましたる任務を努めて無理をせぬ様に、特に第三国とは極力摩擦を避けて達成致したいと存じます。又隸下団隊に對しては軍紀の確立、次期作戰準備の訓練を二つの指導方針と致したいと存じます。

と申し上げたる処大にうなづかれ、更に「中支の政權はどうするか」と御下問ありたるを以て、努めて無理を致しませぬ様指導致しますと奉答し、「第二の満洲国とする様なことはあるまいな」との御下問に、御座りませぬと奉答したるに、御声高らかに「宜ろしい」と仰せられ之を以て拜謁を終り（以下略）

二月十八日 本日午前六時半頃上海より出迎への為上京せる池谷少佐、参謀名越少佐を帶同、安藤中将以下総監部の幹部、陸軍省今村^(兵本)、木村兩少将等に見送られて飛行機にて出発赴任す。昨日の雨霽れて天氣は晴朗なるも西風頗強く飛行機は大分動揺して聊か閉口したるも、一時間余り後に福岡に約十五分許り休憩の後、后二時半少し前呉松飛行場に到着、自動車にて仮の宿舍アスターハウスに入る。沿道劇戰の迹傷ありて全然廃墟なり。唯見るものは軍人と租界内に少許りの内地人を見るのみ。復興は頗前途遠なるべし。

二月十九日 午前九時軍司令部に登庁、伺候を受けそれより殿下に拝謁す。昨日南京より后六時着滬せられたるに余が出迎に出ざりしとて御機嫌ならず。上海派遣軍の戦場にあり、今派遣軍が之を継承することなれば出迎を予期したるに誰も出ざるは何故かと参謀副

長武藤大佐に尋ねられたるを以て、副長は昨日四時半頃到着せられ

まだ申告も受けず司令部にも入られざるを以て出迎られざるなりと弁明したるにより了解せられたりとのことなり（実は司令部々員は出迎たりとのことなり）。この如きことありたることなれば殿下に拜謁、親補の挨拶をなし御戦功を御祝申上げ、昨日は四時半頃到着、今日初めて登庁したることなれば昨日御出迎をなさよりしは申訳なし、御勘弁を乞ふと御諮申上げたり。

十一時半より松井前軍司令官より申送を受く。大分今更未練がある様なり。大臣にも兵力を整理し現役を以て軍司令官を更迭するが可なりと手紙にて申送り、次長にも視察の際申居たる由なるがその後未練が出たるものと見ゆ。

二月二十一日 本日午后二時松井大将、参謀長塚田^(改)少将其他二、三旧幕僚瑞穂丸にて出帆凱旋、見送る。

二月二十二日 本日は柳川第十軍司令官午后三時東京丸にて出帆凱旋、見送る。

二月二十三日 本日は朝香宮殿下午後三時吉野丸にて御出帆凱旋遊され見送る。身体を大切にといふ有難き御言葉なり。本日より松井大将の住居せし官邸に入る。新任者を一時ホテル住ひにし、自分が現在の処におるといふのは一寸変なるも、松井大将も未練も出で、又殿下ももう少しといふ御氣持らしく、余が着任したる時はあまりよい顔をせられざりしことだけは事実なり。

みず書房『続現代史資料4』による

杉山書簡

杉山陸軍大臣から
松井大将宛書簡

運承 閣下 少将 任 命 已
難 有 深 謝 仕 候
愈々 御 健 勝 連 続
快 速 之 戦 捷 に 接 し 誠 に
欣 賀 の 至 り に 有 之 日
夜 御 辛 勞 之 程 感 謝
に 堪 へ ず 候

松井 石根 9 期
杉山 元 12 期

謹啓 屢々御懇信を辱ふし

有難く深謝仕候

愈々御健勝連続

快速之戦捷に接し誠に

欣賀の至りに有之日

夜御辛勞之程感謝

に堪へず候

御來旨之宣戰布告は種々研
 究候も利するよりも害多く
 萬已を得ざる迄は之を避くべく
 大本營設置は已に御承
 知之如く相進み南京
 攻略の件も決定致委
 曲は多田次長出張之節

御承知被下候事と存候
 從て目下御兼任相成
 居候派遣軍司令官も別に
 專任せらるる筈に有之候
 南京攻略後之工作
 に就ては目下研究致居
 其節は一層現陣
 様を整へ完璧に戦果

御來旨之宣戰布告は種々研
 究候も利するよりも害多く
 萬已を得ざる迄は之を避くべく
 大本營設置は已に御承
 知之如く相進み南京
 攻略の件も決定致委
 曲は多田次長出張之節

獲得に遺憾なきを期
 し度折角急速にと準
 備致居多田次長にも貴
 意之存する處宜敷
 御伝おき被下度
 右不取敢貴答旁
 如此御座候
 折角御自重是禱
 候

の獲得に遺憾なきを期
 し度折角急速にと準
 備致居多田次長にも貴
 意之存する處宜敷
 御伝おき被下度
 右不取敢貴答旁
 如此御座候

折角御自重是禱

折角御自重是禱
候

敬具

十一月二十九日 杉山 元

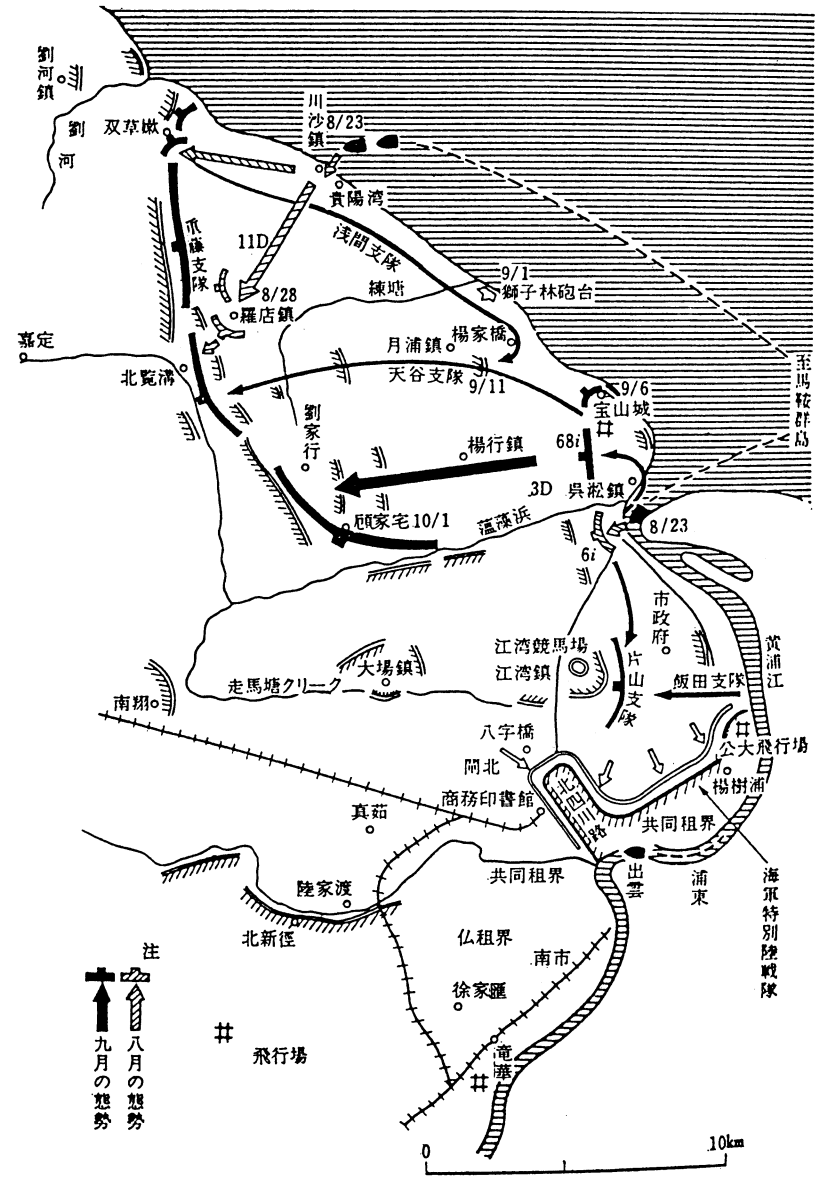
十一月二十九日 杉山 元
松井司令官閣下

松井司令官閣下

【注】この初めて公表される松井大將にあてた杉山元
 陸軍大臣の達筆の書簡は、「南京攻略決定の次長電」
 が発せられた十一月二十八日の明くる日、認められて
 いる。多田次長が伝宣の天命を携えて上海に到着した
 のはその翌々十二月一日のことである。
 松井日記には一切記載がないが、松井大將が「宣戦布
 告」について陸軍大臣に積極的な意見を述べたと思
 われる書簡を送っているのが注目される（飯沼守日記
 八月十五日、十七日、十八日の項を参照されたい）。
 またその宣戦布告を陸軍中央が「万已むを得ざる迄は
 之を避くべく」と、「利害」によって判断しているの
 は、当時の国情をよく物語っている。

（資料提供・鷹尾 敦53期氏）

上海附近戦闘経過要図（昭和12年8月下旬～9月末）



歩兵第34聯隊史による

雑誌『改造』昭和十三年三月号

松井指揮官・山本實彦対談

三軍を統べて我民族のために上海、蘇州、杭州、南京で大捷し、歴史的の偉業を遂げ、某地でホット休養してをる松井最高指揮官を私は大晦日の午後訪問致しまして約一時間会談を遂げることができました。將軍は永い間の苦闘をつづけてをられるから、さぞ一面憔悴してをられるだらうと思つたが、なかなかの元気で顔の血色もよく、眼光は炯として人を射るものがあった。私はS副官に導かれてしばらくその応接室に待った。室には大將を尊敬する或人から贈られたと云ふ南無妙法蓮華經と書かれた尺五の軸がかけられてゐました。副官によれば、この幅は加藤清正が征韓の役に携行した縁喜のよいものだから。その他にはこれぞと將軍の目を慰むるに足るべき置ものも、花もなく、どことなく男世帯の佻しさがひしひしと迫ってくるのを覚えました。そして十七八畳位のかざりのない応接室には丸い三尺大の陶物の火鉢がチヨコンと一つ置かれてゐました。そこに紅茶が運ばれてきました。將軍は星三つのカーキ色の服をきて、スリッパを引つけて無造作に膝を排して來られたのでありましたが、旧知の間柄として「ヤー」と云つて気軽に足を丸火鉢の上にのせながら時余に亘りて私にたいし左のごとき談話をしてくれました。その全部を茲に録することは出来がたい事情があるが、要を摘して左に記して見ました。（山本記）

山本 お忙しいところをどうも。今度の上海戦は随分ひどかつたでせう。さぞ御骨折でしたらう。

松井 なかなか敵もよくやつた。骨が折れたよ。

山本 敵前上陸は大変だつたでせう。

松井 うん。こちらの兵力も少かつたけれども、兎に角上海近辺の戦争は敵が非常に強硬に來たが、蘇州河の線が破れてしまつてからは戦意を喪失して大した抵抗をしなかつた。最初蒋介石の残した文書などを見ると、我々をあつた河の中へ追ひ落してしまふ計画だつたんだからな。

山本 南京もよく行きましたね。あれほど早く陥ちると思ひませんでした。

松井 實は僕等も、もう二週間位は後になるだらうと思つてゐたが、案外に早かつた。蒋介石の教導總隊だけは相當に抵抗をつづけたが、後はたいした抵抗をしなかつた。だから南京は都合の好いことには余り破壊されてゐない。蘇州も十分の一位しか壊はれてゐないが、占領地域の人民の歸つて來るまでには矢張り一月位はかゝるだらうね。今でも一日に六百人位は歸つてくるとか云ふ話だ。それから無錫はさうぶん破壊されたね、また国民政府の建物なども弾丸が一発中つてゐるきりだつた。尤も是は僕が一週間前に南京を経つて來たんだから、その後のことはよくは分らぬ。併しまゝ江南地方

の戦さは大体是で一段落の形だ。

山本 漢口まで行く必要はないでせうか。

松井 支那側では大体に於てもう大した戦意をもつてゐないのみにらず和平を望む空気も少しづつ現はれて来てゐる。現に自分の所へも使者を送つてゐる者もある位だ。だから軍事行動は今後は津浦線方面と離海線の所を少しやつてしまへば、その程度で、もうこれ以上進まなくてもすむのかも知れない。支那人のことだから、急には行くまいけれども、時期を待てば自然にかたがつくだらうと思ふ。上海の外人等も今日では既に日本の武力を十二分に痛感して、かうなつた以上は日本が思ふやうにやるのは仕方がない、日本の意思に随つた方が自国の權益を保持するのに好都合だといふ觀念に變つて来つゝある。

山本 東京の方ぢや、やつぱり英国まで此機会にやつてしまへと云ふ強硬論がさうたうにある様です。この強硬論がいかになをさまつて行くかが問題ですね。それに、日支の關係だけを早く処置してから後でなければ英国にたいして立つてはいけないとの説もあります。そしてさうしたものは英米が現在では一致せないが或段階に達すれば妥協するものと見てをると云ふ認識である様ですね。そのところどんなふうによ御考へでせうか。

松井 こちらはこちらでやることだけやるさ、自分はまだ一度も政府から命令を受けたこともないし、また訓令を仰いだこともない。こちらのことに關する限りは一切誰にも諮らず、自分一人で始末をつけてゐる。こちらの事に対してはこの松井が断乎として責任を負ふだけだ。それで自分も相当考へてゐるつもりだが、いまのところぢや大した失敗もなくやつて来たと思つてゐる。

してやつて行ける筈はないから、共産党勢力も漢口から東へ出ることは間もなく出来なくなるだらうと思ふ。共産勢力の南への侵透はなかなかむづかしいね。

山本 私がこの十月に香港に行きました折に支那の映画を見ましたが、蔣介石が出てくると觀衆は一斉に起立するけれども、陳誠、馮玉祥など国民政府要人などが出て来ても拍手すらしなかつた。併ながら毛沢東、朱徳等が現はれると、彼等は一斉に歡呼した。資本主義の總本山の香港に於てすら、尚且つかういふ形勢であるところを見ると、共産党の若い人達に対する宣伝力といふものは相当大きなものぢやないかと思ひました。

松井 さうだ。彼等には熱があるからな。だから彼等の宣伝力は大きいんだ。

山本 李宗仁、白崇禧の率ゆる広西派の将来に対してはどうお考へですか。

松井 白崇禧等が根本に於て蔣介石と一致し得ないことは勿論疑ひのないところであるが、現在の情勢に於ては彼等も直に蔣介石と対立することは出来ないのぢやないかと思ふ。併し古い国民党の人々、例へば汪兆銘や居正などは自然に蔣介石から離れて行きつゝあるやうだな。

山本 さうですな。私も香港では支那側の人々とも逢つて見ました。余漢謀のもとで働いてゐた某將軍や広西派のさる人とも會つてみて白崇禧に対する信望は相当なものがあると思ひました。併ながら白崇禧は四十万の軍隊の中、二十万を戦線に送つて、二十万は固く省内に残して置いたが、李宗仁が徐州にあり、白崇禧も亦南京に居つたために、その留守中に共産党が広西省の若い学生層を獲得し

山本 さうでした。非常に具合好く行きました。

松井 唯パネー号事件で、一寸一頓挫したけれども、これもさう心配なく行きさうだ。兎に角、日本は何も外国を怖れる必要はない。上海の租界の問題でも、自分は精神としては租界の中立権は認めぬ。また支那側の主権は今後自分が代行するつもりである。それで日本が思ひ切つて勇敢に行動すれば、外国側も自然に日本の威力を認めて来るを得ない。現に上海に於ても支那側の間には、かうなつた以上は日本に頼つて早く和平をしいといふ運動が起つて来てゐる。実は自分が南京にゐる間に、上海でさういふ方向への政策実現を見せしめやうと思つてゐたのであるが、パネー号事件が起つたために是も一頓挫した。併し遠からずさういふ団体が結成されるものと思ふ。ところで又外国人に対しては不必要に彼等の神経を焦ら立たせることは余りよくないけれども、何も怖れる必要はない。当然の日本の主張は堂々と主張していゝし、自分もこれまではさうやつて来たつもりだ。先日租界の大行進をやつてみたが、あれは相當に感銘を与へてゐるやうだ。だから時には矢張りこちらの威力を彼等に示すことが必要で、今後適当な機会を捉へて、又何かやうかと思つてゐる。

山本 共産軍及中国共産派の勢力は今後どうなつて行く御見込みでせうか。朱徳、毛沢東等には依然実権は与へられてゐないやうですが。

松井 蔣介石の周囲は既に共産党の若い人々によつて占められてゐて、蔣介石もこの大勢には従はざるを得ないやうな情勢になつてゐるらしい。共産党としてはソヴェットから援助を受けて飽くまで抗日をやらうとしてゐるが、併し支那の一般人民は彼等と到底一致

てしまつたので、軍隊自身には動揺はなかつたけれども、白崇禧の頭の中にはさうたう大きな影響を与へてゐるやうです。白の将来と西南派の今後の地位をいかに見られてゐますか。

松井 白崇禧は支那古来の道徳を固く守つてゐる男だから三十歳以上の支那人の間には非常に信望が厚い。だが現代の二十代の青年の間には余り尊敬されてゐないかも知れない。

山本 汪精衛、張群が辞職したといふニュースがありますが、あれは事実ぢやないでせうね。(山本曰く私と松井大將と會見した翌日即昭和十三年一月一日張群は行政院副院長に拔擢された)と支那側の新聞には報道した。

松井 あれについては真相はよく分らないが、国民政府の要人の間にも、日本との間に講和を進めた方がいゝといふ人々も段々現はれて来てゐる。現に××などは自分のところへ聯絡使を送つて来てゐる。×××なども何れは日本との間に和睦を図るやうに工作してゐるだらう。それで現在軍事委員会と国民政府とは殆ど關係なしに活動してをり蔣介石を中心に共産党の若い人々が飽くまでも抗日を進めてゐる。併し蔣介石はあゝいふ氣質の男であるから、たとへ×××や、或一派の和平工作が行はれても仲々それを以て蔣介石を引摺る所まで遂行するのは困難ぢやないかと自分は見てゐる。だからこちらとしても余り性急に飛び付かず出来るだけ形勢を監視する態度で居る。だが、漸次にさういふ空氣が強くなつて来てゐることは確かだ。

山本 東京の有力者のうちには、北支政權の勢力が中支の方へまで浸潤して威力をもつやうにしなければならぬといふことを言つてをるものもさうたうある様ですが、此点にたいして如何なる御考